

# 宗方小太郎日記，明治 41～42 年

大里 浩 秋

## 1. はじめに

本所報No. 37 に宗方小太郎の明治 21 年の日記（中国滞在時期のもののみ）を載せ、No. 40 に明治 22～25 年、No. 41 に 26～29 年、No. 44 に 30～31 年、No. 46 に 32～33 年、No. 47 に 34～35 年、No. 48 に 36～38 年、No. 49 に 39～40 年の全部を載せた。今号ではその続きとして、明治 41～42 年の宗方の手書きの日記を活字に起こすとともに、解題をつけることにする。

前回までと同じであるが、お断りすべきことをいくつか記す。解読できなかった文字は今回もあり、文中では□で示した。また、原文のカタカナは西洋の人名、地名、普通名詞のカタカナ表記を除いてひらがなに改め、漢字の旧字体は新字体に改め、適宜句読点を加えたが、日本の人名の漢字は原文のままにした。私の解題中での原文の扱いも同様である。日記の解読と入力作業は、本学中国言語文化修士課程修了（文学修士）の増子直美さんに手伝ってもらった。

## 2. 明治 41 年 1 月から 12 月までの日記

明治 41（1908）年の日記は、1 年を通した一綴じになっている。前々年の暮れに上海に家族と一緒に住みついてから前年はずっと上海におり、この年も一時漢口に行き、7 月から 8 月いっぱいまで熊本に帰ったほかは上海で過ごしている。

鳥類の狩猟は相変わらず続き、上海近郊、さらには蘇州に出かけているが、この年 1 月からは謡曲を習い始めて、1 週間に 1、2 度は日本人倶楽部に通っている。凝り性なのであろう、謡曲も狩猟同様にその後も続けている様子を伺うことができる。日本人倶楽部には謡曲の練習の他に午餐会や日本からやってきた人の歓迎会に参加するなどよく顔を出しており、そのことだけでも上海日本人社会での交際が広がっていることがわかる。日本人倶楽部以外には、上海居留民団や義勇隊、日本小学校に関する付き合いも日記には見られる。また、無名会という会にしばしば出席しており、その会員の名も複数記されているが、この会の性格は今不明として残す。さらに、前年台湾協会から名称変更した東洋協会に 3 月に入会し、6 月には会頭桂太郎から幹事就任を「通告」してきて、承諾の返事を出している。

個々の日本人との交流については、1 月には犬養毅の歓迎会に参加、11 月には平岡小太郎に会い、鍋島直大、細川護成、清浦奎吾一行を上海市内、杭州、蘇州へと案内して回っている。上記細川、清浦は熊本出身者であるが、他にも熊本県人との付き合いは相変わらずで、のちに東京帝国大学教授になる宇野哲人とは彼の滞在中によく会っており、県人会や県出身の東亜同文書院学生との集まりにも出席している。他に気になるのは、上海に寄港している軍艦関係者との交流が数年来増えていることで、街中で会うだけでなく艦内に立ち寄って艦長らと会っている様子が知れる。同文書院とのつながりはそれまでと同様で、個別にその関係者に会っていることや書院内の動きが時々日記に書かれているし、12 月 1 日には 2000 元を融通しているのである。

海軍軍令部への報告は、前年よりは少ないもののひと月2篇程度書いているが、通し番号が220番台から270番台に一気に飛んでいるのは、のちにも触れるが気になるところで、もし単なる番号の振り方の間違いで飛んだだけならば、報告総数は50篇少ないものとして扱う必要がある（後の検討課題となる）。報告に対する手当は、それまで同様に3カ月ごとに払われているが、そのうち金額が日記に書かれているのは、11月から翌年1月にかけての3カ月分の450円である。前年には490円だったのに比べてなぜか減っているのである。この年に起こった中国における大事件としては、11月に光緒帝と西太后が相ついで亡くなったことがあり、これについては11月14日から数日間の日記に言及されている。

中国人との付き合いは、『時報』の経営者狄楚青（日記では、時に狄平，時に狄葆賢と書いている）と会うことが多く、1月16日は狄の招待で、当時上海にいた犬養や柏原文太郎、湯寿潜、鄭孝胥らと会い、2月8日には鄭孝胥の他文廷華、陸純伯と会い、その後姚文藻や汪康年とは以前と同じくしきりに会い、この2人と他の人物、例えば葉瀚、汪甘卿、張元濟等と一緒に会うこともあり、漢口では楊子荃に会っている。また、4月に上海にある中国語新聞社の招待会に出席し、時報、申報、神州日報等の関係者と顔を合わせており、5月、6月にも中国人新聞記者と会っているが、中国語新聞発行に関心を持つ宗方のこの種の動きについては注目する必要がある。

ここで、この年に書いた海軍宛報告の号数と日付けを、『宗方小太郎文書』（以下、『文書』と略称、原書房、1974年）のそれと対照しつつ日記から拾い出すと次のようになる。なお、『文書』中に収録されていないものについては、号数の前に※印をつけることにする。

1月11日—第225号、第226号、1月22日—第227号、1月27日—第228号 [1月22日の第227号から数日後の27日に、番号が50号分も飛んでいるのは変であるが、今はこのままの番号を踏襲する]、1月28日—第279号、2月14日—第280号、2月28日—第281号、3月10日—※第282号（上海社会科学院歴史研究所、以下「上海」と略称、に所蔵されている。そのタイトルは「第二辰丸事件と広東人」）、3月19日—※第283号（上海所蔵、「第二辰丸事件の解決に対し自治会の運動」）、3月27日—※第284号（上海所蔵、「辰丸事件の余響」）、4月15日—第285号、5月8日—第286号、6月7日—第287号、6月9日—第288号、9月18日—第290号、9月26日—※第291号（上海所蔵、「袁世凱の勢力と北京政況一斑」）、10月6日—「報告を發す」とあるが、『文書』にはない。第292号の可能性あり）、10月15日—第293号、10月30日—第295号、11月14日—第296号、12月15日—第299号。なお、日記の記載はなく、『文書』にもないが、上海所蔵中に11月15日—第297号「皇帝崩御後の政局」がある。

明治四十一年正月起

日誌

元日 陰。朝近隣を廻礼し、十時領事館に至り御聖影を拝し、十一時日本人倶楽部の名刺交換会に出席す。午後知人の来りて正を賀する者多し。

正月二日 晴。午前平井、遠藤留吉、波多列来賀。午後賀客接踵す。四時大東局に至り佐々木、辻への書信を致し、豊陽館に至り和泉艦長山口大佐に面し、遠藤を答訪して帰る。野満、上妻、松本等を留て晚餐を饗す。内外知人の年賀状二十通に接す。

正月三日 晴。知人に年賀状を發す。村上、堀来訪。定日午後五時より村上、堀、原田、宇野等と蘇州に出獵せんとす。四時半大東公司に至り船に乗ず。

正月四日 健晴。午前七時蘇州着。大東分局にて朝食を具し、徒歩横塘を過ぎ上方山麓に獵す。午前獲る所無し。午後鳩十羽を獲、五時石湖橋側の船に帰る。

- 正月五日 健晴。午前五時起床。朝食を弁はし六時半上陸，寺院の廢址に朝鳥を打ち僅に一羽を獲，去て山麓の松林に入り二羽を打ち，午前十一時船に帰る。高田九郎蘇州より来訪，日く昨夜余の在所を覓て得ず空く帰去せりと云ふ。厚意感ずべきなり。午後僅に小鳥六羽を獲，五時船に帰り直に抜錨，蘇州に帰る。八時半北門外停車場前に達す。
- 正月六日 雨。七時半上陸，車站に至り朝食を取り八時半の汽車にて上海に向ふ。官瀆里，外跨塘，羅家浜，夷事，真儀，崑山，黃渡，南翔，真茹を経，十二時上海車站に達し車を賃して家に帰る。
- 正月七日 陰。午前阿多来訪。午後井手友，宇野哲人来訪。共に出て郵便局に至り年賀状百余通を發し，帰途井手を訪ひ帰る。夜河野久太来訪。町野列より鳩五羽を贈る。
- 正月八日 晴。年賀状数十通，並に清浦，白岩二氏に致書す。夜日本人倶楽部に至り始て謡曲を学ぶ。十時帰る。
- 正月九日 晴。年賀状数十通を發す。鳥田数雄の内君一昨日男子を産み今朝死去せるを聞き往て之を弔す。桑原来訪。南京船津，坂田に添書を与ふ。
- 正月十日 晴。午前土井伊八来訪。午後和泉艦副長小川水路，並に平井少佐来訪。
- 正月十一日 陰。海軍々令部に報告を發す。更に第二回報告を發す。夜倶楽部に至り謡曲を学ぶ。
- 正月十二日 陰，霾。六時より西郊に出獵，鳩四，小鳥三を獲，正午帰る。午後村山正隆，古閑次郎来訪。町野，那須来訪。古閑，町野列を留めて晚餐を共にす。
- 正月十三日 陰。知人の年賀状に答ふ。午後渡辺繁三来訪，之を留て晚餐す。
- 正月十四日 雨。晚村山正隆の招邀に赴く。本間博士，木下大貞丸船長来会。井手，佐原，神崎亦来会。十一時散ず。藤井来訪。
- 正月十五日 陰。午前時報館印刷部類焼の事を聞き行て狝平を訪ふ。晚倶楽部に赴き犬養毅の招待会に列す。散後謡曲を学び，十時帰る。
- 正月十六日 陰。午前高橋正二来訪。昨日着せりと云ふ。晚狝楚青の招邀に四馬路万家春に赴く。犬養毅，柏原文，村山，堀，真鳥並に浙路総理湯寿潜，鄭孝胥以下支那人十二人来会。宴將に終はらんとするの時眩暈頻々催し漸くにして支持するを得たり。九時帰る。
- 正月十七日 晴。真鳥次郎，土居伊八前後來訪。午後平井徳藏を訪ひ，去て井手を敲き共に出て同文書院の招宴に杏花楼に赴く。犬養毅を主賓とし来客四十人許。九時帰る。
- 正月十八日 晴。朝松尾を訪ひ謡曲本代十四円七十五錢を交付し，朝食後犬養，高橋正二，真鳥次郎等の帰国を送る。知人の年賀に答ふるの信二十余通を發す。午後出て汪康年，姚文藻を訪。阿南，波多両生来訪，晩食を饗す。夜倶楽部に至り謡曲を学ぶ。
- 一月十九日 晴。六時西郊に出獵す。小鳥一羽を獲十時帰る。午後中畑栄，井手三郎，町野，上妻来訪。町野，上妻を留て晚餐す。夜藤井太七，橋本某来訪。
- 一月二十日 陰。熊谷直幹，海軍田中に發信す。宇野海作に致書す。正金銀行より預金五百余円を受取る。
- 一月二十一日 晴。午後民団課金を納め，佐原，小泉を訪ひ無名会の通知状を發す。井手を訪ひ，四時帰る。晚藤井，上多助二を招き饗す。佐々布質直来訪。
- 一月二十二日 陰。佐々布より鹿肉を送り来る。海軍に報告を發す。夜謡曲を学ぶ。
- 一月二十三日 陰。海軍々令部より二，三，四，三ヶ月分手当四百九十円を送り来る。渡辺繁三来訪。
- 一月二十四日 陰。午前木下大貞丸船長より鶏，鶉，兎を贈り来る。夜無名会員と会食す。木下船長，井手，村山，神崎，小泉，黒川，佐原，山崎等来会。十一時散ず。
- 一月二十五日 陰。軍令部に手当領収証を發送す。上多助二，加藤要三郎，波多博来訪。井手来訪。是日大東，商招局，泰盛昌三公司の汽船杭州より上海帰航の途中松江附近に於て塩梟に要せられ死傷者を出せり。夜謡曲を学ぶ。

一月二十六日 雨。是日出獵を堀扶桑等と約す、雨を以て止む。朝高田商會員の宿舎を訪ふ。河野久太郎来り昨日大東の汽船遭難の顛末を話す。共に出て平井徳蔵を豊陽館に訪ふ、在らず。古閑二郎を訪て帰る。午後平井徳蔵、佐々布、福田、柴田、外一人来訪。佐々布留て晚餐す。夜藤井来訪。京都高見翁の歌信到る。

一月二十七日 陰。海軍に報告を發す。川口市之助の信至る。之に復す。正金銀行に至り八百五十円余の小口当座預金を為し、井手を訪ひ遠山景直遺族への香典二円を托し、帰途河野久、宇野哲人等を訪ひ帰る。雨。

一月二十八日 陰。海軍に報告を發す。佐々木武蔵来訪。夜河野を訪ふ。

一月二十九日 陰。午前安河内弘、藤井太七来訪。安河内は本日来着せる者なり。晩山本條太郎の送別會に俱樂部に赴く。九時帰る。熊谷直亮の信至る。其子直幹の借金五十円を送り来る。徳田廣作、田鍋安之助、恒屋盛服の信、並に清浦奎吾翁の信至る。

一月三十日 雨。西村天囚、田鍋安之助に致書す。

一月三十一日 陰。午前古閑、平井、堀等を訪ふ。四時三井山本條太郎の催せる「アットホーム」に出席し八時半帰る。藤井太七来訪。平松市太郎来訪。熊谷直亮より送來の金五十円を古閑次郎に返却す。

二月一日 半晴。朝出て古閑の帰国を送り、帰途井手、堀を一訪して帰る。熊谷直亮に古閑の金子領収証を送る。天津瀬上に致書す。夜雨。

二月二日 雨。支那知人の処へ年賀の名刺を送る。午後堀扶桑来訪、留て晚餐す。阿南、波多来訪。是日陰曆正月元日たり。

二月三日 陰。五時起床。六時四十分の汽車にて呉淞に獵せんとす。停車場に至る。同行者の一人乗り後れたるを以て八時十五分の汽車に乗ず。堀扶桑、小林和佐久、乙竹某同行たり。八時半呉淞着。船を賃して対岸に渡る。風雪寒氣甚し。僅に鳩一羽を獲、五時四十五分の汽車にて帰る。山根立庵、緒方二三の信至る。緒方二三に復書す。

二月四日 陰。午後西郊に獵す。鳩一羽を獲て帰る。夜阿多氏の招宴に赴く。十一時帰る。井手兄弟、島田来會。上妻来訪。

二月五日 陰。真島次郎、熊谷直幹、瀬川浅之進、亀雄等の信至る。夜熊本県人會に杏花樓に出席す。八時俱樂部に至り九時帰る。

二月六日 陰、寒甚し。島田数雄来訪。午後平井を訪ふ、在らず。河野久来訪。晩井手兄弟、阿多廣介夫婦を招飲す。古屋勝太郎、佐々布来訪。安河内弘亦来訪。

二月七日 陰。佐々布、汪康年来訪。汪氏より今夕雅叙園に招請す。同座は永瀧、村山、堀、井手、佐原、姚文藻、志貴、文廷華の諸人なり。宇野哲人、姚文藻父子来訪。夜堀、阿多二氏来訪。

二月八日 陰。佐々布の帰朝に托し大江、河口、田中に菓子を送る。海軍安村介一並に河口介男に致書す。午後出て井手三郎、山本條等の帰国を送る。四時宇野哲人と共に姚文藻の招宴に赴く。鄭孝胥、志貴、胡二梅、陸純伯、外一名来會。七時辞して日本人俱樂部の總會に列す。紛擾甚し。九時帰る。

二月九日 日曜。晴。午前五時起床。領事館前の埠頭に至り三井の汽船にて黄浦江の上流閔行地方に獵せんとす。七時幡生、神崎、村上等前後来會。直に拔錨、九時獵区に達し上陸す。午前中鳩二羽、小鳥三羽を獲、正午船に帰り中食す。午後閔行の対岸に上陸し獵して五時に至り帰船す。鳩二、小鳥一を獲たり。夜九時上海に達し、九時半家に帰る。是日上妻、古閑次郎、安河内等来訪せりと云ふ。

二月十日 雨。終日在家。

二月十一日 陰。紀元節。午前領事館の遥拜式に赴く。正午俱樂部午餐會に出席す。夜阿多を訪ふ。

二月十二日 陰、朝雪。午前堀、土居、澤本等を訪ふ。午後村山正隆、井手友を訪ふ。晩古屋を招き晚餐し、七時より琵琶會を開く。澤本夫婦、堀夫婦、阿多夫婦来會。十一時散ず。

- 二月十三日 陰。香月梅外，林田常雄の信至る。林田よりは其父並に其兄道利の病死を報じ来る。午後倶楽部に至り堀に会し，蘇州大東局に致書し船の雇入を依頼す。正金銀行に至り預金四十六円余を受取て帰る。
- 二月十四日 陰。香月梅外，岡幸七郎に致書し，海軍に報告を發す。大連山田純三郎の信至る。三原経治来訪。
- 二月十五日 晴。午前海軍々令部に報告を發す。午後辻武雄夫婦並に宇野哲人来訪。辻は南京実業学堂に赴任する者なり。船津に紹介状を与ふ。村山来訪。阿南，波多両氏来訪。午後四時十四分の汽車にて阿多廣介，村山正隆，堀扶桑，原亮一郎，小平某と蘇州に赴く。神崎，幡生は後れて及ぶ能はず。六時半蘇州着。佐々木武蔵来り迎ふ。画舫二隻に分乗す。余と村山，堀の三人船を同ふす。晩食後八時半着の汽車に神崎等を迎ふ，至らず。因て船を横塘に進む。西門外にて佐々木来り乗ず。十一時横塘着。
- 二月十六日 陰。午前四時半起床。朝食後上陸。村山，佐々木は横塘山に向ひ，余等は上方山に向て進發し七時二十分獵区に達し，阿多，小平，堀等を三方に配置し，十時迄纔に鳩二羽を獲，方向を転じて横塘の西北十八清里の地に獵す。小鳥二羽を獲，午後五時船に帰る。晩食後蘇州に向ふ。西門外にて阿多，原等上陸す。余等は停車場前に至り停泊す。雨。
- 二月十七日 晴。午前六時起床。行李を戒め六時五十分の一番汽車にて蘇州を發し車中にて朝食し，九時上海に達す。午後塩谷鐵鋼，汪康年来訪。汪氏其の著小説一部を持贈す。佐々布，相良，緒方二三の信至る。六時大貞丸船長木下の招邀に赴く。同座は本間英一郎，神崎，佐原，黒川，小泉，村山，外船員二名なり。九時辞帰。途中倶楽部に至り玉利司令官，橋三郎等と小談。
- 二月十八日 雪。
- 二月十九日 晴。朝阿多来訪。倶楽部の午餐会に赴く。会する者十四人。夜謡曲を学ぶ。佐々木武蔵の信至る。夜渡辺繁三来訪。
- 二月二十日 晴。午前滙山碼頭に至り渡辺繁三の帰国を送る。佐久間浩，岡幸七郎，林安繁，黒川新次郎の信至る。晩玉利司令官の招宴に豊陽館に赴く。艦隊慰問使をして来着せる関野大佐を主賓とし各艦長，参謀，並に上海の重立者七八名なり。
- 二月二十一日 晴。宇土奥村宅に金四円五十銭，林田恒雄に其父兄一の奠儀二円を送る。午後宇野哲人，原田来訪。五時半より関野慰問使の招待会に臨む。席散ずるの後黒川新次郎宅の無名会に出席す。小泉，佐原，村山，山崎，神崎と主人黒川と余の七人なり。十一時散ず。
- 二月二十二日 晴。午前安河内弘来訪。午後関野慰問使の帰朝を博愛丸に送る。森茂，荒木七十郎，森岡正平の信至る。荒木より十一，十二月分利金を送り来る。夜藤井太七来訪。
- 二月二十三日 晴。午前岸田太郎来訪。午後同文書院の演武会に臨む。立食の饗を受け五時半帰る。
- 二月二十四日 晴。午前河野久，平井徳蔵来訪。夜阿多宅の招饗に赴く。古閑，河野某，堀同座たり。十一時帰る。
- 二月二十五日 晴。午前郵便局に至り荒木宅よりの送金を受取り，上海日報に至り，転じて平井徳蔵の南清行を送り，帰途堀と小談，十二時帰る。午後国学保存会に至り王守仁，高攀龍の手蹟，並に黄陶□の手写詩巻を購ひ，帰途楽善堂に岸田太郎を訪ひ，去て大倉洋行に川本，両川，今井等を訪ひ，東和洋行に原田を敲き帰る。
- 二月二十六日 晴。午後五時小泉土之丞，河野某の送別会に臨む。八時半帰る。藤井，川本，両川，今井来訪。
- 二月二十七日 晴。北京増田高頼，大連森茂に復書す。午後出て髪を理す。
- 二月二十八日 晴，暖気如晩春。午前内人と停車場附近に散策す。午後木下大貞丸船長より鹿肉を送り来る。海軍々令部川原中佐に報告を送る。田中耕太郎露国公使館附として赴任せるを以て川原其後を

承けたるなり。夜出て郵便局に至り、帰途井手、古閑を一訪して帰る。是日先考の忌辰たり。

二月二十九日 晴。土曜日。午前河野久太郎来り告て日く、嘉興附近に塩梟の船出現し汽船の航路を絶てりと。出て豊陽館に至り玉利司令官、久保田艦長を訪ひ十一時帰る。午後阿南、波多来訪。夜藤井来訪。倶楽部に至り謡曲を学ぶ。

三月一日 陰。午前宇野哲人来訪。十時上車徐家滙に至り東裕製筆会社に古莊弘、平田彦熊を訪ひ、中食後龍華附近に猟す。微雨。小鳥二羽を獲て六時帰る。白岩龍平、井手三郎、緒方二三、山田珠一、小早川等の信至る。

三月二日 雪。夜豊島捨松を東和洋行に訪ひ、六時共に出て正金銀行鈴木島吉の招宴に赴く。会する者豊島、永瀧、本間英一郎、佐原、村山、宇野、小林、及予の八人なり。

三月三日 雨。午後出て謡曲を学ぶ。夜河野を訪ふ。

三月四日 陰。午前出て正金銀行に至り金百元を受取り、郵便局、井手に抵り十二時帰る。心気不舒。夜藤井来訪。

三月五日 陰。清浦奎吾、田中耕太郎、波多博の信至る。悪寒就蓐。夜上奏博路、河野久太郎来訪。

三月六日 雨。午後倶楽部に至る。

三月七日 陰。波多博来訪。夜基督教青年会に岡山孤児院の為に開催せる慈善会に出席す。十一時帰る。岡幸七郎、林田恒雄の信至る。

三月八日 陰。午前清藤幸七郎、玉利司令官、久保田艦長来訪。午後古莊弘、平田彦熊来訪。

三月九日 陰。頭痛。清浦子、白岩、井手に復書し東洋協会へ入会の手続を為す。渡邊繁三に致書す。野満四郎、上妻博路来訪、晚餐後去る。

三月十日 陰。海軍々令部に報告を發す。午後郵便局、井手、清藤幸七、内藤熊喜、小泉土之丞等を訪ひ六時帰る。

三月十一日 晴。午後軍艦浪速に至り玉利司令官、久保田艦長、並に白井副長、岩邊等を訪ひ、四時辞歸。東和洋行に至り宇野哲人を訪ふ。夜宇野哲人の帰国を杏花楼に饞す。井手友、島田、秋田、島田、原田、及余の七人なり。九時帰る。

三月十二日 晴。正午井上写真店に至り小泉、村山等と離別の紀念として無名会員全部七人撮影す。電気工師佐波修吉郎、及宇野哲人来訪。

三月十三日 晴。午前五時西郊に猟す。雀六羽を獲て五時半帰る。夜宇野哲人を東和洋行に訪ふ。

三月十四日 晴。早朝小泉、宇野の帰国を送る。小泉は安東県税関に転任する者なり。晩玉利艦隊司令官、久保田浪速艦長、四竈參謀、神崎正助を招宴。十時散ず。

三月十五日 陰。午後西郊に出猟。未だ猟区に至らず雨に遇て帰る。古閑次郎来訪。明後日出發、営口に転任すと云ふ。

三月十六日 陰。午後安河内弘来訪。夜出て古閑次郎をアストルハウスに訪ひ、十時之を招商局の泰順号に送り、十二時帰る。西本省三、佐々布質直の信至る。井野春毅の信至る。

三月十七日 陰。田辺二吉来訪。午後謡曲を学ぶ。領事館に村上を訪ひ小談。帰途井手友喜を敲き、五時帰る。夜長尾楨太郎、河野久太郎を訪ふ。

三月十八日 半晴。西本省三、真島次郎、井野春毅、佐々布質直に復書す。午後出て理髮し、書林に至り書籍数部を購ふ。熊谷直亮の信至る。

三月十九日 晴。海軍に報告を發し、松倉に致書す。

三月二十日 快晴。正金より金子を受取る。夜阿南、波多、市川、佐原篤来訪。河口介男の信至る。

三月二十一日 快晴。春季孝靈祭。午後西郊に出猟小鳥一を獲、五時帰る。夜藤井来訪。

三月二十二日 快晴。午前より倶楽部の謡曲大会に出席す。渡邊繁三、田中耕太郎の信至る。

三月二十三日 快晴。

- 三月二十四日 快晴。井手友喜来訪。橘，岡に致書す。夜安河内，島田来訪。
- 三月二十五日 雨。十時日本小学校の卒業式に臨む。十二時帰る。
- 三月二十六日 健晴。午後玉利司令官を豊陽館に訪ひ，去て領事館に中畑と談じ，上海日報社に至り原田棟一郎と共に商務印書館に赴き二十四史を一覧して帰る。白岩龍平，阿多廣介の信至る。
- 三月二十七日 晴。熊本宇野哲人の信至る。海軍々令部に報告を發す。夜佐野篤介を訪ふ。
- 三月二十八日 晴。午後秋田康世，井手友喜，秦長三郎，並に大倉洋行を訪ひ，四時帰る。
- 三月二十九日 晴。井野春毅，玉利司令官に復書す。夜日昇ホテル吉永の開店披露の宴に臨む。真鳥次郎の信至る。
- 三月三十日 晴。午前波多博，市川，阿南来訪。午後井手友来訪。出て木下大貞丸船長を訪ふ，在らず。帰途村山，中畑を一訪して帰る。野満，外一人来訪。夜藤井太七来訪。
- 三月三十一日 半晴。午前上妻，那須，市川，外一名，佐々木武蔵，波多，島田数雄等来訪。佐々木，波多を留め晚餐す。波多に托し漢口迄の往復船票を購ふ。代金百四十七円余。五時浦東に渡り大貞丸に乗ず。市川，波多，川本静夫，両川等来たり送る。夜藤井太七来り送る。十一時本間博士の一行二名，及び三井の森恪上船。十二時就寝。
- 四月一日 快晴。午前十一時半通州着。本間氏等此地に於て上陸す。五時江陰を過ぎ，九時二十分鎮江に達す。
- 四月二日 午後雷雨。正午蕪湖に著す。日野勉来訪。平松市太郎，森謹一來訪。
- 四月三日 雷雨。前九時過安慶，午後六時九江着。七時開船，武穴附近に至り停泊す。
- 四月四日 陰。午前八時半大冶石灰窟の前を過ぐ。飛雲洞の瀑布を望む。大冶駐在の西澤公雄，並に森茂，藤井太七，市川信也，波多博，海軍川原に致書す。黄州を過ぎ赤壁を望み，午後六時漢口に着す。岡幸七郎，宝妻，内田，牧田武，中知秀吉，相良利吉，外同文書院出身者六七名来り迎ふ。橘三郎の馬車にて其の住宅に至り投ず。夜角田隆郎を主とし同文書院の出身者牧田，大間知，伊東，山田勝治，遠藤，相良，有安，川上以下約二十五六名にて余を山月亭に招邀す。十一時辞帰。橘，岡等と談じ，十二時就寝。
- 四月五日 陰。朝領事高橋橋太郎，角田隆郎，深澤暹，中村喜次郎等を訪ふ。正午橘三郎，渡邊郵便局長，長安，岡幸七郎，深澤暹，中村善，宝妻，中知，福島豊太郎，角田隆郎，杉本重道等，余を某ホテルに招宴す。午後二時倶楽部に至り深澤，橘，角田，岡，中村等と寛談。去て岡と漢口日報社に至り中久喜を訪ひ，帰途大倉洋行に至り名刺を留て帰る。七時高橋領事の招宴に家族と共に赴く。橘夫婦，角田夫婦，岡同座たり。九時半帰る。宝妻，内田来訪。
- 四月六日 半晴。朝楊子荃来訪。九時半家族と大倉洋行に至り宝妻を東道とし轎を聯て漢陽に向ふ。漢水暴漲して覆舟甚だ多く危険渡る可からず。因て龍王廟に至り橋を下り小蒸気船にて武昌に渡り漢陽門に上陸し黄鶴樓に上る。宝妻病を以て中途辞帰。内田友義代はり至る。黄鶴樓にて行厨を開て中食し，小舟を賃して漢陽に渡り晴川閣に上り，転じて大別山の頂に攀。眺望少時にして山を下り，晴川閣下より船に乗じ三碼頭に上陸し，車を雇て寓に帰る。四時家族と領事宅，角田，渡辺，田添，浜口日報社，大倉洋行を歴訪し七時橘宅に帰り，晚餐後橘を辞し大貞丸に上る。橘，岡，角田，長安，深澤，中村，領事，渡辺，鑄方徳蔵，田添，中知，内田，澤村，村松，梶田，中津，安達，中久喜，有安一雄，相良利吉，牧田武以下同文書院出身者十余来り送る。大間知某同船たり。九時開船。
- 四月七日 風雨。正午九江着。同船の森川某上陸。横田某来訪。夕刻安慶を過ぐ。九江にて磁器十余点を購ふ。
- 四月八日 陰。十一時乘石磯，烏江項羽廟の間を過ぎ，十二時右舷近く三山を望む。李白の詩，三山半落青天外なる者即是也。午後一時南京着。平松上陸。午後六時鎮江に達す。田島某来訪，日清汽船会社の出張所主任なり。同文書院学生坂等三四人此地より上船，来り訪ふ。武昌鑄方，勝木，山田，真

藤に致書す。

四月九日 陰。午後一時上海着。木下船長に辞別し特別の小蒸気船にて領事館前に上陸し、二時寓に帰る。田中耕太郎露国行の途次昨日来着せりとの報に接し、出て之を東和洋行に訪ふ。牧卷次郎亦た広東行の途次此地に寄港せるに会す。六時田中を送りて郵船碼頭に至り握別して帰る。岳翁の信、並に井野、川原軍令部、同文会、牧、田辺二吉、高橋正二、渡辺繁三、田中耕太郎、香月梅外、山田珠一、白須直、町野晋吉、古閑次郎、清藤幸七郎等の書信に接す。夜藤井来訪。

四月十日 雨。渡辺繁三に復書す。井手友喜を訪ひ、去て倶楽部に至る。晩藤井太七を招き晩食す。夜無名会に出席す。会する者山崎、神崎、村山、佐原、遠藤留吉、及余の六人なり。十一時半散ず。

四月十一日 雨。晩倶楽部に総会に出席し、八時半帰る。

四月十二日 雨。午後河野久太郎、波多博、阿南鎮民、市川信也、両川藤次郎、川本静夫等来訪。那須、松岡亦来訪。晩川本、両川、河本、波多、那須、松岡を留め会食す。時報館より一月より四月迄の報酬二百円を送り来る。三浦鑿来訪、熊谷直幹の事に関し云云す。之に五元を与ふ。

四月十三日 快晴。熊谷直亮より其子の借金償還の為め金三十五円を送り来る。熊谷に復書す。午前郵便局に至り金子を受取り、別に貯金通帳三冊を出し利子記入の手續を為す。根津一来訪。島田数雄来訪。夜藤井来訪。

四月十四日 晴。午後井手友喜来訪。白岩龍平の信、並に本願寺新築落成式の案内状至る。夜河野久太郎を訪ふ。

四月十五日 晴。朝川本静夫を山口丸に送り、帰途井手、堀を訪ひ帰る。北京増田高頼、並に軍令部に報告を發す。夜倶楽部に至り謡曲を学ぶ。

四月十六日 雨。朝五時より江湾附近に獵す。鳩一羽を獲九時帰る。午後本願寺の落成式に列す。岳父翁、亀雄の信至る。

四月十七日 晴。午前同文書院に至り根津一、大原武慶、小田勝太郎、福岡禄太郎等を訪ひ、福岡の処に中食し、帰途上原宇佐太郎を訪ひ、三時帰る。北京宇野海作より熊谷直幹身上の事を云云し来る。昨日汪康年来訪。夜両川藤次郎来訪。井手三郎布哇よりの信至る。

四月十八日 晴。熊谷直亮、宇野海作に発信す。午前狄平、張元濟、姚文藻、汪康年等を訪ひ、徐家滙上海製筆会社の披露会に臨む。三時半帰る。夜藤井来訪。本日午後狄平、姚文藻等来訪せりと云ふ。夜謡曲の稽古に出席す。

四月十九日 晴。朝五時起床。神崎正助を誘ひ江湾附近に獵す。獲る所無し。九時帰る。狄平、藤井来訪。是日同文書院短艇競争会に招待を受けしも事故有て赴かず。夜藤井来訪。平井少佐来訪。一昨夜軍艦和泉にて帰来せりと云ふ。

四月二十日 半晴。軍令部より手当金五、六、七、三ヶ月分を送り来る。之が領収証を發し、別に川原中佐に致書す。午前出て郵便局長を訪ひ時報の事を商量し、帰途領事館に永瀧、村山、中畑等を訪ふ。狄平来会。井手の処に中食し、平井を豊陽館に訪ひ帰る。午後木下温知家族を伴ひ来訪。井手友喜亦来訪。五時半井手の招邀に杏花楼に赴き九時帰る。大冶西澤公雄の信至る。

四月二十一日 雨。亀雄、安河内、町野晋吉、白岩に致書す。晌午狄葆賢来訪。共に出て郵便局に至り樋野局長を訪ひ、一時前帰る。

四月二十二日 晴。午後井手友喜来訪。夜謡曲の稽古に倶楽部に赴く。

四月二十三日 晴。午後豊陽館に深澤暹、小川水路、平井徳蔵を訪ひ、上海日報館に至り五時、帰る。深澤、佐原、原田来訪。六時半上海に在る漢字新聞社の聯合請待会に海寧路虞洽卿の家に至る。時報、輿論日報、申報、新聞報、神州日報、時事報の六社の代表者、並に主筆、主人役にして、来客は永瀧、村山、中畑、堀、佐原、原田、及余の七人なり。九時半散ず。

四月二十四日 晴。午前井手来訪。正午井手の招邀に豊陽館に赴く。深澤、島田、村山、原田、佐原、



- 及び余の七人なり。二時帰る。平松市太郎来訪。明朝の船にて帰国すと云ふ。夜出て橘の夫人、並に平松等を送る。風甚強し。
- 四月二十五日 雨。午後阿南、波多来訪。二時より家族と馬車にて愚園に遊び、転じて徐家滙李鴻章の祠堂に至り茶を喫し、五時帰る。夜謡曲の稽古に倶楽部に赴く。
- 四月二十六日 晴。午前十時半より素謡会に出席す。五時散ず。堀、小林、青木等と電車にて北公園に遊び六時半帰る。藤井兄弟、佐々木来訪。佐々木より湖州の筆を贈り来る。夜安河内弘来訪。田鍋安之助長崎よりの信至る。朝鮮富平にて農園の経営に従事せりと云ふ。岡次郎の信至る。
- 四月二十七日 陰。午前正金銀行に至り預金を為し、国学保存会にて書籍数部を購ひ、転じて瀛華洋行に至り屏風を購て帰る。午後井手友喜来訪。四時半家族と馬車にて姚文藻第五子の結婚式に臨み九時半村山と共に帰る。
- 四月二十八日 陰。午後井手と軍艦和泉に至り山口大佐、小川副長を訪ひ、四時半楊樹浦より電車にて日報社に帰り、六時東荘実業組合の招宴に新太和に臨席す。日清両国の紳商無慮六七十人來会。九時半帰る。松岡玄雄、太田、土井来訪せりと云ふ。
- 四月二十九日 雨。午前土井伊八来訪。太田政徳亦来訪。野添熊太、奈良一雄、井野春毅の信至る。夜謡曲を倶楽部に学ぶ。
- 四月三十日 雨。午後姚文藻を訪ひ、去て土井伊八、楽善堂岸田太郎等を訪ひ、六時根津の招邀に一品香に赴く。永瀧久吉、及び同文書院新教頭上野貞正、並に余の四人なり。九時散歸。緒方二三、川本静夫、大間知芳之助の信至る。木下船長より其の獵獲に係はる鷓七羽を送り来る。
- 五月初一日 雨。午前中島康三郎来訪。是日より上海居留民会を開く。事故の為め欠席届を出す。夜和泉艦長山口大佐、長尾楨太郎、井手友善を招き晚餐す。練習艦松島火薬庫爆発の為め澎澎湖島にて沈没。船長以下死傷多し。
- 五月二日 雨。船津辰一郎夫婦、木下温知来訪。午前豊陽館に中島康三郎、平井徳藏、松岡玄雄を訪ひ帰る。午後船津辰一郎の香港に赴くを送る。上野貞正に名刺を留む。松倉善家の信至る。夜謡曲を学ぶ。藤井来訪。
- 五月三日 晴。日曜日。七時神崎正助を途中に誘ひ射的場の北方に出獵す。大鷓二、大千鳥一、鷓一を獲、正午帰る。秦長三郎、井出友喜、並に同文書院学生中味等道三列五人来訪。秦を留て晩食す。夜河野久太郎、藤井、上多来訪。
- 五月四日 晴。晚上多助二、藤井太七を招き晚餐を饗す。靶子路火有り、出て看る。
- 五月五日 快晴。午前五時半より靶子場の北方に獵し、鷓一、千鳥十羽、シヤク抜一羽、鷺一羽を獲、正午帰る。相良、有安の信、並に根津の案内状至る。高橋正二、緒方二三に致書す。夜佐原宅の無名会に出席し、十二時帰る。
- 五月六日 晴。富田安兵衛、太田政徳来訪。夜上海各支那新聞社長、並に主筆八名を六三亭に招宴す。日本人側にては永瀧、村山、中畑、堀、佐原、原田、樋野、及余の八人なり。十時散ず。
- 五月七日 晴。午後井手来訪。白岩龍平を豊陽館に訪ふ。今朝來着せる者なり。六時根津の招宴に杏花楼に赴き、九時帰る。
- 五月八日 晴。鈴木商店支配人香川潔、黒川新次郎の紹介状を持し来訪。海軍々令部の報告を送る。夜出て根津一、上多助二の帰国を送る。雨。
- 五月九日 雨。午前白岩龍平来訪。午後阿南、波多、松岡恭一、山口昇、野満、上妻来訪。野満、上妻を留め晩食す。夜謡曲を学ぶ。高橋正二の信至る。
- 五月十日 雨。日曜日。午前五時前起床。結束して出獵せんとす。適々雨至る。六時堀扶桑来る。七時雨歇む。堀と共に射的場の北方に獵す。細雨時に至り時に歇む。千鳥七羽を獲十二時帰る。島田、姚文藻、久保田清来訪。安河内来訪。夜木下温知、藤井太七、平井某、佐原篤介来談。晩食前村山正隆

来て辞行す。近日副領事として鉄嶺に赴任する者なり。

五月十一日 晴。正午村山正隆夫婦を中食に招く。食事中木下温知、佐原篤介来訪。

五月十二日 晴。午前五時より木下温知と出獵。嶋二羽、千鳥六羽を獲、十二時木下を誘て帰り中食を共にす。井手友喜亦留飯。姚文藻来訪。五時松岡生来訪。家族と村山の招邀に靶子路の趙園に赴く。支那料理の饗有り。八時帰る。夜阿多廣介を訪ふ。

五月十三日 晴。朝橋三郎の帰国を送る。晩島田夫婦、井手友喜を招饗す。岳翁、並に荒木七十郎の信至る。荒木より二、三、両月分利子を送り来る。岡次郎の信至る。渡辺繁三の信至る。

五月十四日 晴。午前六時本間博士の来るを待ち、共に出て北郊に獵す。嶋に類する鳥三羽を獲正午帰る。午後本間氏来訪。六時家族と井手友喜の招邀に豊陽館に赴き九時散ず。帰途堀を訪ふ、在らず。佐原篤介を敲き十時帰る。

五月十五日 風雨。姚文藻、文廷華の信至る。午後平井徳蔵来訪。

五月十六日 雨。午前島田夫人の帰国を送り、十一時帰る。岳翁、並に井野春毅、相良、有安、荒木七十郎に致書す。午後五時佐原来訪、共に出て姚文藻の招饗に赴く。村山正隆、外清人二名来会。九時半帰る。

五月十七日 陰。六時半神崎正助を誘ひ北郊に獵す。シヤク抜一羽、千鳥八羽を獲、正午帰る。井手、島田来訪。上野貞正亦来訪せりと云ふ。午後佐原を訪ひ、去て上野を東和洋行に訪ひ、五時帰る。白岩来訪せりと云ふ。村山正隆夫婦来訪。六時玉利司令官を豊陽館に訪ふ。

五月十八日 晴。渡辺繁三に致書す。午後出て理髪し、帰途白岩を訪ふ。五時家族と電車にて北公園に散歩す。六時半帰る。

五月十九日 晴。平田彦熊来訪。正午白岩、佐原を招き中食を共にす。二時半去る。青木喬来訪。増田高頼の信至る。昨日堤敬太郎北海道小樽に於て病死の訃至る。此人余の親交にして温厚篤実の人物なり。一朝迷明相隔つ、可悲也。

五月二十日 晴。玉利司令官、渡辺繁三、松岡恭一、土屋員安に致書す。昨日午後長尾楨太郎を訪ふ。玉利氏依頼の書画鑑定を依頼す。是日玉利氏より預りの書画を豊陽館に送る。午前郵便局に至り紫藤猛に致書し、小口当座預金通帳を書留にて送り預金全額二千五百余円を長崎正金銀行を経由し上海に送らんことを依頼す。井手の処に中食し、出て村山正隆の鉄嶺副領事と為りて赴任するを送る。一時半村山と握別し、井手友喜、原田棟一郎と電車にて楊樹浦に至り軍艦浪速に玉利司令官、久保田艦長、白井副長を訪ひ三時帰る。三人相伴て宇野哲人を東和洋行に訪ふ。本日独逸留学の途次常陸丸にて来着せる者なり。

五月二十一日 晴。宇野海作、岳翁、川原中佐の信至る。井手三郎米国よりの信片二通至る。井原真澄、白岩龍平来訪。井原は南京領事として赴任する者なり。木下温知、蝦名某来訪。夜井原を訪ふ、在らず。夜今井邦三来訪。

五月二十二日 晴。午前四時より北郊に獵し千鳥八羽を獲、八時帰る。佐原篤介、正午白須直を東和洋行に訪ふ。本日重慶より来着せし者なり。一時宇野哲人の独逸行を滙山碼頭の常陸丸に送り三時握別、帰途阿部、井手、原田と本間英一郎を訪ふ、在らず。諸人に別れ独り木下温知を訪ひ、五時帰る。姚文藻来訪。夜白須を東和洋行に訪ひ別を叙し、阿部の処にて本間、佐原、神崎、原田等と談じ、十一時帰る。

五月二十三日 晴。土曜日。軍令部川原中佐に致書し、熊本岳翁に□復す。平井徳蔵来訪。午後内人と木下温知を兆豊路に訪ひ、五時帰る。阿南、波多、榎木、藤井、平井来訪。留て晩食す。

五月二十四日 晴。午前八時半東和洋行に至り、本間博士、神崎正助、阿部一毛、原田棟一郎、堀越某と三井の小蒸気船にて南市に至り、更に腕車を賃して大南門外の車站に赴き、十時の汽車にて松江府に向ふ。十二時松江着。上海より此に至る十八哩なり。車站東側の樹蔭にて行厨を開き、二時城の南

- 門を入り薬王廟の高塔に上り、東門を出で車站に帰る。四時の汽車に乗り六時上海着、馬車にて東和洋行に帰り小坐、帰寓。七時白岩の招邀に六三亭に赴く。姚文藻、志錡、狄平、佐原、中畑、及び余の七人なり。十時散ず。
- 五月二十五日 晴。平原文三郎の信至る。午前堀、井手を訪ふ。午後白岩、原田を訪ひ、上海日報に至り小談、帰る。李泉溪来訪せりと云ふ。夜藤井太七、堀扶桑来訪。夜雨。
- 五月二十六日 晴。午前篠崎都香佐を迎ふ。午後松岡恭一、安河内弘、福岡禄太郎、姚文藻、白岩龍平、平井徳藏前后来訪。平原文三郎に復書す。熊本紫藤猛の信至る。
- 五月二十七日 晴。午後三時領事館前より汽船に乗り南清艦隊旗艦浪速に到る。是日日本海々戦の記念日にて司令官以下より招待有りしを以てなり。来賓四十名許。水兵の角力、撃剣、剣舞等有り。立食の饗を受け六時辞帰。井手、島田来訪。長崎村山正隆の信至る。
- 五月二十八日 半晴。野添熊太に復書す。奈良、河口に復書す。日本大学生矢野敬三郎、齋藤梧楼来訪。土屋貞安の信至る。夜篠崎都香佐来訪。
- 五月二十九日 晴。朝藤井来訪。槿種の栽培を助く。午前李泉溪を棋盤街新益公に訪ふ、在り。正金銀行に至り預金を受取り、井手を訪て帰る。井上清秀、李泉溪来訪。田鍋安之助、土屋貞安に復書し、外に武藤虎太、堤武夫に甲詞並に奠儀を送る。夜土居某、大川愛次郎の手紙を携へ来り訪ふ。河野、阿多来訪。共に出て倶楽部に至り謡曲を学び、十一時帰る。
- 五月三十日 朝雨。井手来訪。夜阿多の処に謡会を催す。
- 五月三十一日 晴。午前十時より謡会に倶楽部に臨む。五時終はる。牧卷次郎来訪、南清より帰来せし者なり。隈元喜助、藤井太七来訪、留めて晩食す。夜河野久来訪。
- 六月一日 晴。午前牧卷次郎、隈元、井手を訪ふ。紫藤猛より為替券を郵送し来る。井野春毅の信至る。井手来訪。五時半より新太和楼の軍艦浪速の送別会兼義勇隊慰労会に出席。主客百三十余人。九時散ず。帰途神崎と東和洋行に至り白岩、阿部、原田、明渡等と談じ、十一時帰る。
- 六月二日 晴。晩謡曲を学ぶ。河野と牧卷次郎の南京行を大貞丸に送り、十一時帰る。是日木下温知来訪。
- 六月三日 晴。午前平井徳藏、神崎正助前后来訪。午後白岩、河野来訪、共に龍華に至り龍華園に小憩。帰途同文書院に青木、安河内、福岡等を訪ひ、六時帰る。是日陰曆端午節たり。
- 六月四日 晴。午後紫藤猛に為替券領収証を郵送し、正金銀行に至り熊本よりの送金の当座預と為す。佐原を訪ふ。夜神崎来訪。町野晋吉、山根虎之助の信至る。
- 六月五日 雨。午前平井、井手、正金に抵る。午後汪康年、岸田某来訪。内藤湖南に致書す。海軍々令部に報告を發す。
- 六月六日 晴。午後郵便局に至り、帰途井手並に和泉艦長を訪ひ、五時帰る。夜井手、島田、藤井、堀来訪。
- 六月七日 晴。両川来訪。正午角田隆郎を車站に送る。午後堀と正金銀行員謡曲会に臨む。五時帰る。前島二郎を訪ふ。
- 六月八日 陰。東洋協会頭桂侯より余に東洋協会幹事を囑託する事を通告し来る。
- 六月九日 雨。東洋協会に幹事承諾の事を回答す。軍令部に報告を發す。米原繁蔵、小泉土之丞の信至る。夜阿多を訪ふ。
- 六月十日 陰。午前牧卷次郎来訪。渡辺繁三の信至る。夜狄楚青の招邀に万家春に赴く。支那新聞記者数人と白岩、堀、小井手、原田、中畑、牧、及予なり。帰途東和洋行に阿部、白岩、原田、明渡等と談じ、十時半帰る。
- 六月十一日 半晴。午前佐原篤介の病を問ふ。村山正隆大連よりの信至る。夜牧卷次郎の招邀に杏花楼に赴く。支那各新聞記者、並に白岩、堀、原田、島田、井手、及予の数人なり。

六月十二日 陰。頭痛。正午汪康年の招宴に四馬路九華樓に赴く。牧、白岩、葉瀚、金暹、汪甘啣、葉、外一人と予の九人なり。二時帰る。午後五時井上に至り牧、白岩、堀、原田、佐原等と撮影し、六時倶楽部に至り牧の為に送別会を催す。会者十七八名。謡曲終はりて鑄方徳藏を豊陽館に訪ふ。海軍に発信。外に鳥居、米原に致書す。

六月十三日 晴。九時鑄方、牧の帰国を春日丸に送る。両川藤二郎来訪。夜莊田平五郎の招待会に倶楽部に出席し、散後阿部、原田、井手と北公園に散策し十時帰る。

六月十四日 晴。午前土井伊八、藤井、阿部一毛、安河内来訪。正午出て根津一を迎ふ。井手友喜を招き晩食す。今井邦三来訪。夜本間博士来訪。外出中平井徳藏来訪。

六月十五日 晴。武藤虎太の信至る。午前平井来訪。午後井手と軍艦浪速、対馬を歴訪し別を叙す。明日出港するを以てなり。波多来訪。

六月十六日 晴。午前平井徳藏を訪ひ辞別す。本日より満州地方に旅行するを以てなり。帰途藤崎を訪ひ、晌午帰る。夜謡曲を学ぶ。両川夫婦来訪。

六月十七日 風雨。午後安河内、五島、田辺前後來訪。夜阿多を訪ふ。

六月十八日 晴。平原文三郎、田鍋安之助の信至る。午後姚文藻を訪ふ、在らず。上海日報社に井手友喜を訪ふ。井手の東道にて雅叙園に至り原田、島田等と晩食し、七時帰る。山口和泉艦長来訪せりと云ふ。

六月十九日 陰。午前井手友喜、阿多廣介と軍艦和泉に至り山口艦長、小川副長を訪ひ辞別す。明日出港するを以てなり。十二時帰る。午後安河内、深澤暹来訪。七時深澤の招にて豊陽館に赴き晩食す。九時半深澤に別を告げ小林和介と百老滙路本間工学博士の寓に至り無名会に臨席す。本間氏を主人とし神崎、佐原、黒川、村田、原田等先つ在り。十一時散ず。是日午後雨雹。

六月二十日 晴。井野春毅に致書す。午後熊本県学生四人、其他学生五人来訪。夜中川来訪。

六月二十一日 雨。午前野満四郎、福岡禄太郎、藤富来訪。午後山口昇、松岡恭一來訪。鳥居赫雄、亀雄、森田一義の信至る。五時吉坂に至り熊本県同文書院学生一同と撮影す。六時半杏花樓に至り同文書院卒業生上妻、野満、松本三人送別会に臨む。九時帰る。

六月二十二日 晴雨無定。午後一時井上写真店に至り本間博士送別の為め無名会員全体にて撮影す。午後篠崎都香佐来訪。夜河野久太郎を訪ふ。

六月二十三日 晴。夜中川、神崎、河野、阿多来訪。河野、阿多と倶楽部に至り謡曲を学ぶ。

六月二十四日 雨。午前正金銀行に至り預金を引出し、郵便局、井手を訪ふて帰る。夜白岩龍平来談。

六月二十五日 雨。午後野満、上妻、木下温知来訪。

六月二十六日 陰雨。夜謡曲を学ぶ。中川来訪。

六月二十七日 半晴。午前本間英一郎氏の帰国を送る。午前阿南鎮民、波多博兩人、写真師を伴ひ来り我家族と共に撮影す。夜井手、島田来談。

六月二十八日 陰。日曜日。午前倶楽部の素謡会に出席す。午後帰る。二時井手友喜と同車、同文書院の卒業式に臨む。五時帰る。途中東和洋行に阿部を訪ひ、神崎、佐原、原田等と会談。

六月二十九日 晴。午前那須、外一名来訪。午後上妻、野満、市川等来訪。頭痛下痢。夜阿多と倶楽部に至り小林、堀と会し謡会の事を商量し、十一時帰る。池邊吉太郎、狩野直喜、土屋員安、鳥居赫雄等集合書の信片至る。井野春毅の信至る。

六月三十日 晴。午前民団事務所に至り六、七月分の課金を納め、郵便局に至り為替金を受取り、帰途篠崎を訪ひ十二時帰る。午後熊本県学生松本、田中、本田、甲斐列来り別を叙す。佐原篤介来訪。六時安河内来訪、留て晩餐を共にす。夜謡曲会に出席す。十一時帰る。

七月一日 雨。午前勝木恒喜、小山田叔助等の帰国を送る。午後那須、江尻、上野、松岡、阿南、波多、松岡恭、外一名来訪。晩中川、佐原を訪ふ。

- 七月二日 雨。午前井手友来訪。午後阿南鎮民，田辺均来訪。緒方二三，高橋正二の信至る。
- 七月三日 雨。午前姚文藻，安河内来訪。香月梅外来訪，昨日福州より帰来せりと云ふ。
- 七月四日 雨。午前篠崎を訪ひ同文書院借款の事を商量し，井手の処に中食，二時根津，安河内列の帰国を春日丸に送る。是日同文書院卒業生八十人帰国。夜阿多，藤井来訪。
- 七月五日 陰。午前香月，河野を訪ふ。午後阿部一毛，上妻，菊地，波多，井手，高橋栄七来訪。張元濟東游せしを以て清浦子，並に東洋協会小松原英太郎に優待の事を依頼す。別に原亮一郎，池邊吉太郎に致書す。夜白岩を東和洋行に訪ひ，其室にて神崎，佐原，香月，河野等と談じ十一時半帰る。
- 七月六日 雨。午前正金に至り預金を受取る。午後上妻，池部鶴彦，野満，五島等来訪。井手と大馬路に至りツランクー一個を購ふ。晩佐原の処に至り晩食す。白岩来会。
- 七月七日 雨。午前増田高頼，亀井陸郎を正金銀行に訪ひ，十二時帰る。学友会幹事西田善蔵より写真ブック一冊を贈り来る。同文書院学友会より記念として贈る所なり。福岡禄太郎来訪。山口和泉艦長，並に露国大使館田中中佐に致書す。夜倶楽部の松尾，丹羽，青木三氏の離別謡会に出席す。十二時帰る。
- 七月八日 半晴，熱甚。午前銀行に至り，転じて福岡の法律事務所を訪ひ帰る。午後郵船会社に至り四人の往復切符を購ふ。代百十五円なり。永瀧を訪ひ小談。去て正金に増田を訪ふ，在らず。亀井の処に小談，帰る。増田高頼より六三亭に招宴。事を以て辞す。夜藤井，島田，阿部来訪。阿部と烏帽子折を謡ふ。
- 七月九日 晴。木下温知来訪。軍令部川原中佐に致書，帰国を報ず。豊陽館に平井徳蔵を訪ふ。本日旅行より帰来せる者なり。七時倶楽部の尾崎，丹羽，青木の送別，並に増田少佐，亀井陸郎の招待会に出席。九時より佐原宅の無名会に出席，十一時帰る。岡幸七郎，阿南鎮民，森田一義，上妻博よりの信至る。
- 七月十日 晴。午前正金に増田，亀井を訪ひ辞別し，去て尾崎，井手を訪ひ，十一時帰る。上妻留守の爲め来寓。井手友喜来訪。海軍軍令部より八，九，十，三ヶ月手当を送り来る。直に正金に至り当座預けと為す。平井，久保田，土井，池部等来訪。時報館に至り，転じて中畑を領事館に訪ひ，八時帰る。夜行李を弘濟丸に送る。夜笹山，土井，河野，藤井来訪。十二時就寝。
- 七月十一日 晴。午前五時起床。七時弘濟丸に上る。正金の青木，張元濟等同船たり。井手，島田，篠崎，神崎，白岩，河野，両川，今井，菊地，田辺，藤井，福岡，三木，中畑，横山，富田，牧野，古瀬，平井，秋田等来り送る。八時半開船。海上平穩。
- 七月十二日 陰。海上平穩。船上に於て種々の遊戯を為す。
- 七月十三日 雨。七時上陸。税関の検査を終り土佐屋に入る。峯彦郎来訪。白水館に電報を發す。夜町野晋吉来訪。
- 七月十四日 雨。午前九時二十分の汽車にて長崎を發し，午後五時着。白水館より来迎，五時半白水館に入る。夜大江に至り，九時帰る。
- 七月十五日 陰。午後九州日々，鎮西館，古莊嘉門翁を歴訪して大江に至り十時帰る。午前白石卯一來訪，麦酒を贈る。
- 七月十六日 晴。学生田中某，河口介男来訪。午前河口宅を訪ひ，中食後去て田中清司に抵り晩食後帰る。井口，松本等来訪。
- 七月十七日 晴。午前長野一誠翁，緒方二三，豊田虎之進，勝木恒喜，水上某，井手三郎来訪。緒方，勝木を留め中食す。安村介一の信至る。真島，西本の信至る。
- 七月十八日 晴。午前長野一誠，紫藤猛，香山豊薫，辛島格，津野一雄，吉田善門，平井，藤本，福島，井口を歴訪し，上野寅彦の宅に小談。午時緒方二三を本荘に訪ひ，三時帰る。夜井手と談ず。
- 七月十九日 晴。午前井手と林田喜一郎を大江に訪ひ家宅を相る。中食の饗を受け，帰途井場熊喜氏を

訪ひ、三時帰る。内藤儀十郎、紫藤猛、奥村金太郎、松本清司諸人来訪せりと云ふ。豊田虎之進来訪、其の東道にて春日三浦に至り晩食の饗を受け、八時辞して松倉善家を訪ひ九時半帰る。津野一雄、河口、松本清、吉田寿三郎等来訪せりと云ふ。

七月二十日 晴。佐々干城氏来訪。井手郷里に帰る。午後安河内弘、日奈久の浴澤より来訪。之を伴ふて鎮西館、錦山神社を一覧し城内を通過し、御幸橋にて分袂して帰る。夜松倉善家来訪、十一時去る。

七月二十一日 晴。軍令部の報告領収書、波多博の信至る。午前内藤儀十郎氏を訪ふ。午後井口忠二郎来訪。夜井場氏を訪ひ中将姫の祭典を觀、十時帰る。

七月二十二日 晴。田畑貞喜来訪。朝内田齒科医に赴き齒を療治す。夜上妻宅を訪ふ。九品介善来訪せりと云ふ。

七月二十三日 晴。町野晋吉、井野春毅の信至る。朝齒を療す。久品介善来訪。午後家族と水前寺に汽車にて赴き池亭に小休。瓜を割り氷を飲み、護全公子の銅像に展し、五時帰る。夜上妻博之来訪。雷雨。

七月二十四日 陰、微雨。齒療を為す。佐々布遠来訪。森岡正平、上妻博路、江尻邦真の信至る。藤井、上妻、井手列に致書す。

七月二十五日 晴。朝松倉善家来訪。中食後松倉と出て肥後銀行に至り預金百九十余円を受取り、春日松倉の宅に至り小坐。共に出て住江常雄を訪ひ、談話時を移し、松倉親敬に抵る。松倉兄弟の東道にて植半楼に至り鰻飯を吃し、終はりて中谷某の寓に至り謡曲を聴き、十時半帰る。上野寅彦来訪せりと云ふ。

七月二十六日 晴。朝齒療を為す。辛島格来訪。午前家族と大江に至り中食の饗を受け、竹林に盤桓、晡時辞帰。途中井芹経平の病を問ふ。山田珠一來訪せりと云ふ。夜津野一雄を訪ふ。

七月二十七日 晴。朝齒の療治を為す。上田正喜来訪。十一時安河内夫婦来訪。正午より家族と安河内夫婦を誘ひ輕鉄より水前寺に至り旗亭に投じ中食し、五時帰る。六時辛島格の招宴に静養軒に赴く。成川海軍少将、佐藤參謀長、石川事務官、井場熊喜、其他県庁、市役所の吏員十余人なり。九時帰る。十時より安河内を洗馬角屋を訪ひ小談。帰途成川の処に名刺を留て帰る。小笠原昂来訪。井手、根津に発信す。

七月二十八日 晴。朝齒療を為す。園田勘吾来訪。石黒昌明、柳原又熊、藤井太七の信至る。午前平山岩彦、緒方二三来訪。三時鎮西館に至り平山、岡、中知等と談ず。夜河口宅を訪ふ。雨。

七月二十九日 晴。朝福島来訪。齒療を為す。午前大江に至り盤桓終日、五時辞帰。手島省三来談。晚□□宅を訪ふ。

七月三十日 晴。齒療。毛利篤来訪。十一時より家族と久品介善、福島政太郎の招邀に砂取勢無水楼別邸に赴き、中食後久品と佐々干城氏を訪ひ、六時福島等と共に帰る。不破昌在来訪せりと云ふ。井場熊喜氏来訪。

七月三十一日 晴。齒療。武藤虎太来訪。井手三郎、上妻の信至る。午後武藤虎太を訪ふ、在らず。

八月一日 晴。

八月二日 晴。林市蔵に致書す。午前角田政治、大野謙次郎来訪。午後清子を伴ひ田中宅に至り、大野、葉室、佐々布、澤村、町野宅を歴訪して帰る。雷雨。

八月三日 晴。午前古莊韜、松倉善家、牛島貫吾来訪。晌午松倉と出て緒方を訪ふ、在らず。松倉の処に至り中食し、五時より松倉と藤森茂一郎を谷尾崎を訪ひ、黄昏辞帰。井手友喜、上妻博路、武藤虎太の信至る。

八月四日 晴。野満四郎、白岩龍平の信至る。佐々干城氏来訪。

八月五日 晴。午前小笠原昂来訪。午後不破昌材、河口介男、山田珠一前後來訪。夜吉田壽三郎来訪。

八月六日 雨。午後松倉善家来訪。共に出て古莊嘉門翁を訪ひ、帰途井芹経平を敲き帰る。井芹来訪。

- 八月七日 晴。井手に致書す。宇土奥村，塩浜田畑に致書す。河口来訪。夜勤工場に至り物品数点を購ふ。
- 八月八日 晴。川畑豊次，松岡介壽，波多博，内田友義，牧卷次郎，江尻邦彦，上妻の信至る。八代大野謙次郎に致書す。是日より赤瀬，宇土，八代，人吉地方に向はんとす。行李を收拾す。午後二時上車白水館を出て熊本駅に至り，三時の汽車にて赤瀬に向ふ。四時着。宝慶館に投じ家族と河口の家族を丸屋に訪ふ。晩入浴。
- 八月九日 雨。朝村上一郎に邂逅す。宝慶館に在て病を養ふ者なり。河口の処に至り海水浴を為す。韓国江崎嘉蔵，並に井手三郎の信至る。晩海岸に散歩す。西温泉岳に対し，東北金峰，小岱の諸山を望み，風趣佳絶。
- 八月十日 陰。午前河口来訪。村上一郎，泉増次郎来談。午後海浜を散歩す。五時出て河口家族の熊本に帰るを送る。
- 八月十一日 晴。午前十時旅館を辞し車站に至り上車，宇土に至り船場の岬屋に投じ中食し，二時家族と車を賃し法華寺の先塋に展し，一里奥村氏に抵る。晩食後奥村氏，並に家族と城山の先塋に謁す。旧曆孟蘭盆会に属するを以てなり。燈籠香燭北邙を照し，雑踏織るが如し。九時一里に帰り小談，岬屋に帰る。途中雨に遭ふ。家族と船場橋に至り，所謂精霊流しなる者を観，十二時就寝。
- 八月十二日 晴。午前九時岬屋を出て宇土駅より上車，松橋に至り車站附近の茶店に小休。腕車を賃して塩浜田畑宅に至る。中食後寛談，四時に至り辞して車站に至り，五時の汽車にて八代に向ひ，六時着帯屋に投宿す。雨。是夜陰曆七月既望，月色甚清。
- 八月十三日 晴。朝九時半旅館を辞し，八代車站に至り駅長大野謙次郎に面し小談。十二時二十七分の汽車にて人吉に向ふ。坂本，白石，一勝地，渡等の車站を過ぎ，十二時半人吉駅に達す。八代を出てより隧道二十三道有り。線路は球磨川に沿ひ，一路の風光極て宜し。人吉駅にて駅長千布某に面し，其の斡旋にて鍋屋旅館に投ず。楼下は直に球磨川の清流に枕み，中川原を隔て旧城址に対し，下游に鳳凰橋を望み，眺望佳絶の処なり。夜橋上に納涼す。月色清波に映し，夜景名状す可からず。
- 八月十四日 雨。雨中溪山の風致一段の妙有り。午前車を駆りて青井神社，並に旧城の人吉神社，林鹿寺等を遊覧して帰る。午後船を賃して流を遡り，船を城山深林の下に停め西瓜を割て涼を取る。五時帰る。夜大橋畔の氷店に投じ西瓜を吃す。上海白岩，佐原，上妻，平井，並に山田珠，鳥居，土屋，森田一義，武藤虎太，松倉，岡幸七郎等に致書す。
- 八月十五日 雨。午前八時鍋屋を辞し，九時の汽車にて人吉を發し，車上槍倒清正公岩岩屋の洞穴を觀望し，十一時八代着。停車場にて上野寅彦に邂逅す。車を賃して麓の熊屋に至り鮎の料理を命じて中食す。味殊に美なり。盤桓時を移し，午後六時舟を僦て萩原に上陸し，停車場に到り七時十五分の汽車にて熊本に帰る。九時着白水館に入る。葉室侃温，藤森茂一郎，井野春毅等来訪せりと云ふ。上海両川，池部，井上雅二，西本省三，波多，宝妻等の信に接す。
- 八月十六日 晴。佐々干城，津野，白石来訪。午前大江に至り中食の饗を受け，七時辞帰。藤原邦威の信至る。
- 八月十七日 晴。朝井野春毅，葉室謙純来訪。葉室は十六日韓国より帰来せりと云ふ。午後肥後銀行に至り預金四百円を受取り，松倉善家を春日に訪ひ，六時帰る。武藤虎太の信至る。
- 八月十八日 晴。毛利篤来訪。午後三時より大和座に至り春雨傘の演劇を觀，十時半帰る。島田数雄の信至る。
- 八月十九日 晴。朝九品介善，葉室侃温来訪。午前山田珠一を訪ふ。渡辺繁三，井手三郎，森田一義，松本亀太郎の信至る。三時より大和座に至り忠臣蔵劇を觀る。十一時帰る。
- 八月二十日 晴。午前毛利篤来訪，保険加入を勧誘す。午前鎮西館に至り，正午帰る。井手三郎に復書す。東洋協会に三月至六月会費二円を納入す。

八月二十一日 晴。午前毛利並に保険医来り、身体検査を為し保険契約を定め、単身保険五百円に対する一年分掛金十八円二十五銭を支払ふ。松倉親敬、津野一雄、佐々干城来訪。上妻、土屋、山根虎、若杉、藤井、宇野哲人等の信至る。朝吉田善門来訪。井手に致書す。

八月二十二日 晴。午前古莊嘉門翁来訪。十時出て葉室謙純を訪ふ、在らず。去て竹部に葉室侃温を敲く、謙純在り。十一時半辞帰。午後河口介男、井口、緒方前後來訪。緒方、井口を留て晩食す。夜佐々布質直来訪。柳原又熊の信至る。是日郵船長崎支店に往復船票を郵寄す。

八月二十三日 陰。午前松倉善家、池内源七来訪。岡幸七郎、福岡禄太郎に致書す。岳母君来過。河口介男来訪。

八月二十四日 雨。午前大江に至り岳翁を寿す。晩帰る。鳥居、土屋の信至る。田中、松岡両生大江に來訪。

八月二十五日 晴。午前葉室謙純、奥村傳、田畑二男、井手三郎来訪。奥村、葉室、井手と会食す。河口介男、田中清司を招き晩餐を共にす。

八月二十六日 陰。午前井手と井場熊喜を市役所に訪ひ、井手友喜縁談の事を商量し媒介を井場氏に托して帰る。藤森茂一郎、河口介男来訪。藤森を留め申食す。午後松倉を春日に訪ひ、車を賃して中島村に至り井手三郎を訪ひ、晩餐の饗を受け七時辞帰。松倉の処に小談、九時半帰寓。途中島田数雄の姻戚林宅を高橋を訪ふ。森田一義、白岩龍平、米原繁蔵の信至る。

八月二十七日 雨。佐々布遠来訪。森田、米原に復書し土佐屋に致書す。正午家族と河口宅の招邀に赴く。六時田中宅の招きに赴き、八時帰る。河口の家族来訪。宮原義雄の信至る。

八月二十八日 晴。午前佐々布質直、井芹経平来訪。午後武藤虎太来訪。夜大江に至り叙別、十時帰る。

八月二十九日 晴。朝佐々干城、久品介善、葉室、井口来訪。午前紫藤、富田、長野、豊田、佐々布、津野、井場、井芹、武藤巖男、手島、緒方、九州日々、鎮西館を歴訪し別を告ぐ。午後山田、白岩を訪ひ、肥後銀行に至り預金二百円を受取り、松倉兄弟を訪ひ、三時帰る。紫藤、井芹、河口、緒方、井口、不破、井場、毛利、園田来訪。晩緒方、平山岩彦、岡辰喜、三津家傳之、井口列の招待に静養軒に赴き九時帰る。津野一雄来訪。井手三郎来談。

八月三十日 晴。是日家族を掲げ渡清の途に上らんとす。朝内藤儀十郎、佐々干城、佐々布質直、松倉親敬、同善家、河口介、白石卯、久品介善、平山岩彦来り送る。佐々布、河口行李を整頓。十時半白水館を出で車站に至る。葉室侃温、同謙純、井芹、田中清司、河口介、久品介善、井手三郎、松倉兄弟、佐々布遠、同質直、緒方、井口、田中、上野両学生、上妻、津野、白石、隈田諸氏来り送る。此他婦人の来り送る者少なからず。十一時二十分発車、長洲駅を過ぐるとき不破駅長菓子一箱を餞別す。午後八時半長崎着、土佐屋に投宿す。

八月三十一日 晴。午前町野晋吉、安河内弘来訪。午後三時春日丸に上る。大瀧八郎、上野貞正等同船たり。五時開船。海上平穩。

九月一日 晴。海上平穩。

九月二日 晴。午前六時船上海に達し浦東に泊す。小蒸気船にて税関碼頭に上陸。大瀧、上野等と分れ北山西路の寓に帰る。留守を托せし上妻博路、池部鶴彦在り。福岡禄太郎、上原宇佐太郎、井手友喜、島田数雄等来訪。夜両川藤次郎、藤井太七、今井邦三、白岩龍平、河野久太郎等来訪。池部、上妻を招き晩食す。

九月三日 晴。午前井手、島田列を訪ひ、去て銀行に至り預金二百円を受取り、帰途平井を豊陽館に、中畑に永瀧、横山列を訪ひ、帰途藤崎、平井、狄平を敲き帰る。鷹見五郎来訪。漢口岡幸七郎、内田友義の信至る。午後和泉艦長山口大佐来訪、琉球塗菓子器一台並に茶卓を贈る。上妻博路来訪。夜白岩、大瀧を東和に訪ふ、在らず。阿部と上野貞正の処に寛談、十一時帰る。

九月四日 晴。午後大倉に河野、両川、今井を訪ひ、去て中井に秦、大馬路に村上、福岡を訪ひ、緒方、



- 井口の為に六神丸、筆、墨を購ひ、六時帰る。平井、原田来訪せりと云ふ。晚上妻の帰国を餞す。池部雀彦をも招邀せり。緒方、井口列に致書し、上妻に托し六神丸を送る。上妻を伊集院公使、亀井英三郎に紹介す。夜謡曲を倶楽部に学び、十一時上妻を虎屋に訪ひ別を告て帰る。
- 九月五日 晴。夜島田数雄宅を訪ふ。
- 九月六日 晴。午前村上貞吉、原田、安河内、吉永来訪。午後中野熊五郎、井野春毅来訪、本日来着せりと云ふ。午後篠崎、井手、井野を訪て帰る。晩原田の招邀に赴く。同座に白岩、井手友、村上、河野、阿部、及予なり。上野貞正来訪せりと云ふ。篠原、宮原、榎、今井邦三、吉田豊喜、阿多廣介の信、並に台湾総督より縦貫鉄道完成式の案内状至る。
- 九月七日 晴。午前井手友喜、岸田太郎来訪。午後白岩来訪。平井徳藏、汪康年、本田、田中、甲斐三学生来訪。篠崎来訪。
- 九月八日 晴。午後白岩と汪康年、姚文藻を訪ひ、帰途福岡の処に小談、五時帰る。白岩今夕より漢口に赴くと云ふ。
- 九月九日 雨。安村介一、台湾総督府事務所、佐原篤介、大江、井場、内藤、佐々干城氏に致書す。午前根津一を迎ふ。同文書院新学生来着。帰途井野を訪ふ、在らず。夜井手、池部来談。
- 九月十日 陰。是日陰曆中秋たり。午前四時車站附近に出獵鷺一羽を獲、七時帰る。午前内人と両川藤五郎を楊樹浦を訪ふ。帰途民団、倶楽部の七、八月分課金、会費を納めて帰る。井野、上野来訪。岳翁、上妻、内田友義の信至る。井芹、松倉兄弟、佐々布父子、葉室、山田珠、河口、田中、江崎嘉蔵、不破、白石、岡次郎、津野、上妻、岡辰、平山岩、久品列に信片を郵寄す。午後五時内田友義漢口より来着。橘三郎の信に接す。
- 九月十一日 雨。有安、川口市之助、隅元喜助、相良利吉、井手三郎、渡辺繁三、山根虎之助、若杉要、篠原邦威に致書す。篠原に其母堂への奠儀一円を贈る。午後出て大谷、平井を訪ひ、理髪して帰る。野満四郎、安河内、藤井等前後來訪。夜謡曲を倶楽部に学ぶ。
- 九月十二日 晴。午前井手友喜来訪。共に出て豊陽館に至り大倉の大谷を訪ひ其の帰国を送り、井手の処に中食し、軍艦和泉に至り山口艦長、小川副長を訪ふ、在らず。帰途井野を訪ひ、相伴ふて瀛華洋行に至り石井徳二郎を訪ひ、井野家具購入を托して帰る。堀扶桑来訪。重慶波多博の信至る。夜上野貞正来訪。
- 九月十三日 晴。日曜。早朝北郊に獵す。鷺一羽を獲八時帰る。阿部一毛、秦長三郎来訪。緒方二三、上妻博路の信至る。
- 九月十四日 晴。井手友喜、大原信来訪。井手三郎の信至る。夜島田宅を訪ふ。
- 九月十五日 雨。田鍋安之助、土屋員安に致書す。島田、藤井、池部来訪。夜豊陽館に山口和泉艦長、平井少佐を訪ひ別を叙す。和泉は明日出港、平井は今夕より通州地方に旅行するを以てなり。
- 九月十六日 風雨。午後内田友義の帰国を送り、帰途井手の処に小談、帰る。夜堀を訪ふ、在らず。原田の処に談じ、十時帰る。大瀧八郎来訪せりと云ふ。
- 九月十七日 晴。田川、江尻邦彦の信至る。午後根津一來訪。夜大瀧八郎、上野貞正を訪ひ、十時帰る。
- 九月十八日 陰。川島浪速、小泉土之丞、古閑二郎に致著す。海軍々令部に報告を発す。夜謡曲を学ぶ。
- 九月十九日 陰。午後馬車を賃し家族と愚園、李鴻章祠堂、公園を遊覧し、五時半帰る。木下温知鷺七羽携贈、木下を留て晩食す。夜今井邦三来訪。藤井、平井亦来訪。
- 九月二十日 晴。日曜。午前花田彦三郎、坂口幸三来訪。十時より出獵、鳩二羽を獲て帰る。午後清子を伴ひ紀成を領事館を訪ひ、横山、牧野、花田等の処に名刺を留め、井手の処に小談、五時帰る。阿安鎮民、松倉兄弟、清藤幸七郎、高島義恭の信至る。
- 九月二十一日 晴。午後上海日報社、大倉洋行を訪ひ、六時根津一の招邀に一品香に赴く。同座は永瀧、浮田、上野貞正、福岡、及び余の五人なり。八時半帰る。

九月二十二日 陰。隈元喜助，山口昇の信至る。岡次郎に書籍を小包にて郵送す。阿南，角田政治，池田源七，清藤幸七郎に致書す。汪康年来訪。

九月二十三日 晴。午後野満四郎，池部雀彦来訪。山田珠一，久品介善，岡次郎，篠原邦威，不破昌材の信至る。

九月二十四日 陰，微雨。井手友喜来訪。夜西本省三，大瀧八郎来訪。西本は雲南省干崖に，大瀧は広東に赴く者なり。夜謡曲。

九月二十五日 陰。朝井手と丹波丸に至り西本，大瀧を送る。西本の一行は岩本千綱，外一名なり。島田数雄来訪せりと云ふ。岳翁，岡辰喜，緒方二三の信至る。倶楽部に至り謡曲を復習す。

九月二十六日 雨。海軍々令部に報告を發し，岡幸七に詩信を送る。南京鈴木房雄に致書す。北京増田少佐に致書す。平井徳蔵，井野春毅来訪。夜根津の招宴に杏花楼に赴く。九時半帰る。藤井来訪。

九月二十七日 快晴。日曜。午後倶楽部の謡會に出席，六時帰る。松倉，土屋，佐原，波多，井口，佐々布の信至る。夜井手，島田夫婦来訪，十一時帰る。横山慶三，牧野義春来訪。

九月二十八日 陰。月曜。午後平井を豊陽館に訪ひ，井手友喜と電車に斜橋に至り，更に車を賃して同文書院に根津一を訪ひ，五時帰る。松倉，園田勘吾に致書す。夜中川を訪ふ。

九月二十九日 晴。午後出獵，啄木鳥一羽を獲たるのみ。帰れば岡幸七郎，井手友喜在り。岡は本日漢口より来着せる者なり。夜井手，島田，岡と一品香に至り洋食を用ひ，三人を誘て帰り，十一時半散ず。安村介一，上妻博之，葉室謹純の信至る。

九月三十日 陰。正午井野を訪ひ小談。去て郵船碼頭に至り岡幸七郎，阿部一毛，根津一の帰国を送る。午後二時弘済丸入港，井手三郎来着。井手の処に小談，帰る。暴雨覆盆の為小時豊陽館に避て帰る。上妻博路，角田政治，海軍よりの信，並に木下温知より鶺鴒六羽を贈り来る。安河内，大原信来訪。

十月一日 晴，風強し。夜井手三郎来訪。

十月二日 晴。午後理髮。井野を訪て帰る。齊藤亨，外一名来訪。大連川口市之助より露国煙草二箱，並に大連，旅順の画端書多数送り来る。河口介男，鈴木房夫の信，並に永瀧の案内状至る。夜謡曲を学ぶ。

十月三日 晴，風大，午後雨意。軍令部川原中佐に致書し，大連川口市之助に返信を發す。夜清子を伴ひ堀扶桑を訪ひ，十時帰る。

十月四日 雨。井野，河野来訪。上奏博路，那須保昌の信至る。晚永瀧領事の招宴に赴く。同座は姚文藻，井手三郎，上田貞正，浮田等なり。九時半帰る。藤井太七来訪。

十月五日 雨。河口介男に致書，外に堤敬太郎遺族への寄附金十五円を郵送す。岡本源二に托するなり。午前正金銀行に至り預金を受取り，郵便局，井手を訪ふて帰る。

十月六日 陰。川原中佐，岡次郎，香月梅外の信至る。軍令部に報告を發す。夜謡曲に出席す。風邪の気味あり。鈴木房夫の信至る。

十月七日 雨。心気不舒，床に就く。夜今井邦三来訪。

十月八日 陰。午前井手三郎来訪。平井少佐来訪。午後井野春毅来訪。

十月九日 雨。有安一雄，波多博の信，並に保険会社の保険証書来着。野満四郎来訪。木下温知より鶺鴒六羽と干魚を送り来る。

十月十日 雨。井手友喜，中畑栄来訪。

十月十一日 雨。海軍々令部より十一，十二，一，三ヶ月分の手当金四百五十円を送り来る。久品介善の信至る。午前香月梅外来訪，今朝来着せりと云ふ。河野久太郎来訪。午後木下温知来談。是日病稍癒ゆ。

十月十二日 晴。香月梅外，安河内，井野春毅来訪。鈴木房夫に復書す。太田政徳来訪。

十月十三日 晴。午後始て外出。平井徳蔵，井手友喜来訪。平井は本日より廈門に出張すと云ふ。海軍

- に手当金領収書を送る。外に久品介善、岡幸七郎、岡次郎に復書す。岡次郎より榛原製信封百五十枚を贈り来る。夜謡曲を学ぶ。
- 十月十四日 雨。海軍に報告を郵寄す。石井徳次郎来訪。池邊、岡次郎、池内源七、上妻博路、田鍋安之助の信、並に安東県成田定母堂の訃至る。白岩龍平より請帖至る。
- 十月十五日 陰。午前倶楽部の午餐会に出席す。二時大倉洋行に河野、香月を訪ひ、五時井手の処に帰り、三時白岩主催の旧友会に豊陽に出席す。会する者井手兄弟、香月、河野、中野熊、小幡、古莊、篠崎、原田棟、秦、青木、安河内、中畑、白岩の十七名なり。十時散ず。
- 十月十六日 晴。松倉善家、神崎正助の信至る。軍令部安村少佐に致書す。夜謡曲を学ぶ。
- 十月十七日 晴。神崎に復書す。午後香月、河野を訪ふ。晩堀扶桑の招邀に赴く。同座は小林、乙竹、井手、原田、浅川、外二名なり。十時帰る。姚文藻、並に熊本学生数人来訪せりと云ふ。
- 十月十八日 晴。午後白岩を東和に訪ふ、在らず。香月、河野、江、古莊等と大馬路江南製筆公司に至り小談。白岩、原田来会、兩人予の寓を訪問せりと云ふ。六時河野の招宴に大倉洋行に赴く。同座は香月、白岩、江、古莊、秦、原田等なり。八時一同支那物品陳列所を一覧して帰る。西本省三新嘉坡よりの信、並に熊本田中清司の信至る。
- 十月十九日 晴。朝井手三郎を訪ふ。昨夜其母堂病氣危篤の電報有りしを以てなり。帰途井野春毅を一訪して帰る。井手友喜、野満四郎前後來訪。晩出て大倉洋行に至り香月梅外の湖南行を送り、十時帰る。
- 十月二十日 晴。午後木下温知より鶉六羽を贈り来る。六時井手三郎より其母堂死去の訃至る。夜内人と奠儀を具し行て之を弔す。
- 十月二十一日 快晴。早朝井手兄弟の帰国を山口丸に送り、帰途領事館に中畑を訪ひ帰る。北京伊集院公使に致書、上妻身上の事を依頼す。上妻に致書す。午後岡幸七郎来訪、今朝来着せりと云ふ。小泉土之丞、内田友義の信至る。晩井野春毅、木下温知、島田数雄を招き晚餐す。十一時散ず。
- 十月二十二日 晴。午前岡幸七郎を豊陽館に訪ふ。帰途篠崎を訪ひ、正午倶楽部の午餐会に出席す。岡幸七郎、原田棟一郎を招き晚餐す。八時出て岡夫婦の漢口行を南陽丸に送る。十一時帰る。
- 十月二十三日 晴。午前姚文藻を訪ふ。晩謡曲を学ぶ。田畑の信至る。
- 十月二十四日 晴。佐々木武蔵より淮陰釣魚台懷古詩石刻二枚、並に鄭板橋四君子の石刻を贈り来る。北京宇野海作の信片至る。
- 十月二十五日 積陰。午前堀扶桑を訪ひ、午後素謡会に出席す。夜に入て帰る。藤井太七来訪。
- 十月二十六日 陰、微雨。午時東和洋行白岩の処に至り中食す。江猛聡、原田来会。帰途理髮、吉永、井野、堀を一訪して帰る。佐々布質直、姚文藻の信至る。荒木七十郎の信至る。
- 十月二十七日 雨。荒木、井手兄弟に致書し、別に漢口日報社に詩三首を送る。清江浦佐々木武蔵に致書す。正金銀行に至り預金を為し百余円を引出す。共済生命保険料十六円二十銭を肥後銀行河添泰喜に郵送す。東洋協会々費七月至十月、四ヶ月分二円を郵送す。伊東米次郎を訪ふ、在らず。香月梅外の信至る。宮崎信夫、吉永清一來訪。夜謡曲を学ぶ。
- 十月二十八日 雨。鷹見五郎、井野春毅、福田規矩蔵来前後來訪。夜姚文藻の招宴に赴く。白岩、汪甘卿、胡二梅、汪康年、志等同座たり。九時辞帰。阿部一毛を東和洋行に一訪して帰る。
- 十月二十九日 雨。倶楽部午餐会に赴く。漢口相良利吉の信至る。不舒。
- 十月三十日 陰。海軍に報告を發す。夜倶楽部に赴く。留守中神崎正助来訪、佃煮を贈る。上妻博路、井手三郎の信至る。
- 十月三十一日 晴。夜白岩の招邀に原田の寓に赴く。会する者小林和介、阿部一毛、神崎正助、河野久太郎、原田棟一郎、白岩龍平、及予の七人なり。十時半散ず。藤井来訪。阿部一毛夫婦来訪。
- 十一月一日 陰。朝五時半より西郊に獵す。鳩三、小鳥四を獲、十一時帰る。藤井、平井来り午餐を共

にす。内人等藤井，平井の東道にて城内に赴く。石崎良二来訪。藤井，平井を留め晩食す。

十一月二日 雨。久品介善，井口忠次郎，阿多廣介に致書。阿多宅に衣服代五十円を郵送す。夜謡曲に出席す。

十一月三日 陰。天長節。午前九時半より領事館に至り御聖影に拝し祝杯を挙げ，十二時半より軍艦隅田の祝宴に列席す。艦上にて紀念端書に白岩，原田と三人聯名にて大阪西村天囚，鳥居赫雄，牧卷次郎，池邊吉太郎の諸友に□信す。二時軍艦を辞して帰る。是日六三園に祝賀会，領事宅にアットホームの催有れども往かず。海軍に致書。

十一月四日 雨。四川波多博の信片至る。廈門平井少佐，熊本河添の信至る。緒方二三，葉室謙純に致書す。四川波多博の信至る。夜井野春毅を訪ふ。熊本角田政治来訪せりと云ふ。

十一月五日 雨。倶楽部午餐会に出席す。阿南鎮民，香月梅外，川本静夫，渡辺繁三の信至る。角田政治の為に蘇大賀禰木，高田，南京井原，鈴木に紹介状を認む。八時熊本商業学校生徒を倶楽部に招き茶話会を開く。九時半散ず。

十一月六日 雨。渡邊繁三に復書し安達宛の添書を封送す。海軍川原中佐に致書す。午後角田政治，志水数雄来訪。

十一月七日 晴。朝角田の蘇州行を車站に送り，九時商業学校志水列の帰国を春日村に送る。夜内人と井野を訪ふ。

十一月八日 晴。五時西郊に出獵鳩二，小鳥五を獲，十一時帰る。中食後日本校に至り運動会を觀，五時帰る。

十一月九日 晴。終日在家。

十一月十日 雨。午後上野貞正来訪。夜倶楽部に至る。池邊吉太郎の信至る。池辺に復書す。木下温知来訪，鶉六羽を贈る。夜佐原篤介の帰るを聞き，往て之を訪ひ十一時帰る。

十一月十一日 陰。正午倶楽部に服部琢歓迎の午餐会に出席し，帰途角田政治を豊陽館に訪ひ，上海日報社に至り小談，帰る。晩角田，木下を招饗す。白岩より招宴，辞して行かず。

十一月十二日 晴。午前角田を豊陽館に訪ひ其の帰国を送る。帰途井野，村上，時報館，福岡を訪ひ，十二時帰る。午後池部来訪，共に出で西郊に散策し，四時帰る。四川へ旅行せし江尻来訪。羊皮並に武侯祠堂記一枚を贈る。夜福田規矩蔵来訪，明日出発，本部各省を経て伊犁地方に遠遊すと云ふ。八時半内人と白岩を東和に訪ひ，十時帰る。

十一月十三日 晴。朝神崎来訪。午後橋三郎より紅茶一箱を送り来る。出て橋を訪ふ，在らず。平岡小太郎と小談。帰途上海日報社を訪ひ帰る。夜倶楽部に赴く。漢口に宛て清浦奎吾氏に発信す。

十一月十四日 晴。清子の誕辰なるを以て正午祝杯を挙ぐ。神崎正助，中畑栄来訪。醇親王載灃摂政王と為り，其子溥儀宮中に教養せらるる事と為り，同時に今皇の病篤きを報ず。太后亦た危篤に瀕せりとの報有り。料るに皇帝は既に崩御せし者ならん。二時橋三郎，平岡小太郎の帰国を弘濟丸に送り，並に橋に長崎より海軍々令部に打電の事を托し，外に軍令部に報告を送り，東洋協会に発信す。帰途上海日報社に小談，去て汪康年，姚文藻を訪ふ，在らず。今夕より神崎等と平湖地方に出獵の約有りしも，北京政變の兆有るを以て破約す。五島聡千代来訪。茶器並に蜜餞を贈る。夜藤井太七来訪。

十一月十五日 健晴。午時松岡生来訪。午後井野に中畑栄，村上貞吉，安河内，石崎廣二，高島等来訪。三時半家族と伊東宅のアットホームに出席，五時帰る。佐々干城，宮崎信夫の信至る。夜佐原を訪ふ。光緒帝昨日午後五時崩御。

十一月十六日 晴。原田，曾根原，姚文藻来訪。皇太后昨日午後崩去の報有り。明日嗣皇帝として醇親王の子溥儀位に即き，醇親王載灃摂政王として監国之任に当る。上妻の信至る。夜佐原篤介の漢口行を送る。

十一月十七日 晴。白岩，河野伸之助，外二三来訪。海軍々令部に報告を發す。午後上野貞正，高島醇，

古荘弘来訪。岡幸七郎の信至る。夜井野を訪ふ。

十一月十八日 晴。午前白岩を訪ひ鎮江行を約し、去て領事館に永瀧、浮田を訪ひ、十一時帰る。姚文藻来訪、共に出て永瀧、中畑を訪ひ、午後帰る。北京増田中佐、東京軍令部に致書す。宇野海作、緒方二三の信至る。汪康年来訪。池部雀彦、松岡来訪。松岡宝慶竹器並に桂林の写真を贈る。海軍の信至る。

十一月十九日 健晴。午前八時の汽車にて白岩、上野貞正、徳永、姚文藻等と細川、鍋島両侯、並に清浦子の一行を迎ふる為め鎮江に向ふ。十時半蘇州を経、三時半鎮江着、轎子を連れ日清汽船の棧橋に至り小憩、五時南陽丸来着、直に上船、細川侯の一行に面接す。夜食卓に就て寛談、十一時寝に就く。

十一月二十日 健晴。正午上海着。領事以下居留民多数出迎。一行と領事館に入り旅館の部処を定む。両侯一子以下豊陽館に投宿。細川侯及び清浦子の処に小談、六時帰る。波多列の信至る。

十一月二十一日 陰。午前清浦子を訪ひ、白岩と共に中食の饗を受け同文書院の事を商量し、一時一行と馬車を連れ同文書院の招待会に出席立食の饗を受け、六時半帰る。奉天中島真雄の電報至る。

十一月二十二日 晴。朝白岩来る。共に出て車站に至り小川平吉を迎ふ。十時豊陽館に至り細川侯、清浦子を訪ふ。正午細川侯爵より中食の御饗応有り。永瀧領事、白岩、小川、柏原等同座たり。終はりて侯爵に陪乗し徐家滙、李鴻章の祠堂、張園等を遊覧し、五時帰る。夜居留民一同より侯爵一行を日本人倶楽部に請待す。鍋島侯、清浦子の演説有り。九時散ず。

十一月二十三日 晴。朝姚文藻と白岩の処に会す。十時内人を伴ひ鍋島、細川両侯、清浦子に候し、十一時清浦子と同車姚文藻を訪ひ、正午帰る。平井少佐の処に中食し、二時帰寓。野満来訪。四時半より両侯一子の招待に内人と共にアストルハウスに赴く。立食の饗有り、六時散ず。来会者約百二三十人。有安一雄の信至る。

十一月二十四日 晴。是日より細川、鍋島両侯の一行に陪して杭州より蘇州に一遊せんとす。九時半郵船棧橋にて船に上る。白岩、小川平吉、武田寧等同行たり。十時開船。海軍々令部に致書す。一行ハウスボート二隻と支那船二隻に分乗す。鍋島侯夫婦は東郷号に乗り、細川侯、小川平吉、白岩と予は別船に乗り、他の随員一同は支那船二隻に分乗せり。一同鍋島侯の船にて晚餐す。夜細川侯、武田寧、余の三人にて謡曲七騎落、鞍馬を歌ふ。

十一月二十五日 健晴。午前七時船拱宸橋に達す。吉岡領事代理、石原警部、近藤弘造以下男女二十余人出迎。八時轎に坐し杭州に向ふ。先つ玉泉の清澗寺に至り、去て靈隠寺に赴き飛來峯、五百羅漢等を巡覧す。是日秋晴如画、満山の紅葉最も観るに宜し。徜徉時を移し、帰途岳飛の墓に展し、兪楼を一覧して領事館に至り小休。二時居留民の歓迎会有り。主客二隻の画舫に分乗し支那料理の饗応有り。三潭印月に至り、五時湧金門に上陸、轎を連れて城内に入り清泰門を出て停車に至り、五時五十分の汽車に乗り拱宸橋に至り原船に帰る。吉岡以下十余人来り送る。八時開船。

十一月二十六日 晴、風強し。午後一時蘇州に達す。大賀領事代理以下来り迎ふ。領事館に入て茶菓の饗を受け、三時一行は船にて寒山寺、留園、□□遊覧す。余は白岩、小川と留て船に在り。小川平吉五時半の汽車にて上海に帰る。六時より月ノ家に於て居留民全体より一行を歓迎す。会する者男女三十余名。九時散ず。船に帰り蘇州を發す。大賀、樗木、藤田劍峯、高田九郎以下来り送る。

十一月二十七日 健晴。午前九時上海着。井手三郎、浮田以下出迎。豊陽館に入る。井手と清浦子を訪、正午帰る。午後井手来訪、五時半井手と伊東米次郎宅の謡曲会に出席す。細川、鍋島両侯、並に鍋島夫人、清浦子を主賓とし井手、白岩、永瀧、武田、小幡、鈴木、藤瀬、深野、松尾、及び予の拾人々に陪す。支那料理の饗有り。八時より謡曲会を開く。細川侯は景清を歌ひ、並に芦荊の仕舞を演せられ、一坐皆其妙に驚けり。外に清浦子観世流の独吟有り。十一時散ず。

十一月二十八日 健晴。朝細川侯、清浦子、鍋島侯を訪問す。井手の処に中食し、出て滙山碼頭の伊予丸に至り両侯一子、並に小川、柏原、武田列の帰朝を送り、帰途阿多廣介を篠崎宅に訪ひ、去て豊陽

館に和田彦二郎を敲き小談，辞帰。和田は本日出発，欧米に赴く者なり。夜倶楽部の謡曲大会に出席す。藤井，平井来訪。河野，児玉来訪。有安，井上雅二，町野晋吉等の信至る。

十一月二十九日 健晴。午前内人と井野，堀を訪ひ，正午帰る。午後西郊に出獵，五時帰る。獲る所無し。

十一月三十日 健晴。晩井野来訪，之を留て晩食す。夜内人と澤本良臣を訪ふ。

十二月一日 快晴。午前正金に至り金二千百元を受取り，内二千元を同文書院に貸与す。村上貞吉を訪ひ，十二時帰る。蘇州高田九郎，東京池辺吉太郎，奉天中島真雄に致書す。午後安河内弘来訪。夜謡曲を学ぶ。帰途佐原を訪ひ，本日長沙より帰りし者なり。井手，神崎等在焉。十時半帰る。青木，高田等の信至る。

十二月二日 健晴。和田連次郎来訪。海軍々令部川原中佐の信至る。五時村上貞吉宅の招邀に赴く。是日佐原より晚餐の案内有りしも村上と先約有るを以て之を辞す。六時内人と村上宅に赴き晚餐の饗を受け，九時帰る。

十二月三日 晴。木下温知来訪。中久喜信周来訪，漢口より昨日来着せりと云ふ。倶楽部の午餐会に出席す。午後中久喜，中畑を領事館を訪ひ，三時帰る。六時青木喬の招宴に杏花楼に赴く。御幡，白岩，澤本，河野，秦同座たり。九時散ず。帰途河野宅に至り謡曲一二番を謡ひ十一時帰る。海軍川原中佐の信至る。

十二月四日 健晴。高島義恭，高田九郎，木下温知の信至る。午後篠崎，阿多を訪ひ，阿多に反物代の残金四十三円半を返附して帰る。夜市川信也，石丸来訪。

十二月五日 健晴。平井徳蔵来訪。午後日本墓地に同文書院の建碑式に臨む。中村兼善以下学生六人の碑石成りしを以て読経，祭文等の式有り。帰途汪康年を訪ふ。張元済来会。姚文藻を敲き，五時帰る。

十二月六日 快晴。日曜日。午前四時半起床，結束。村上貞吉を誘ひ江湾附近に獵し□一，小鳥四を獲て，二時帰る。三時御幡雅文宅の茶話会に赴く。河野，青木，秦，澤本，白岩，井手，古荘弘来会。謡曲，囲碁，各好む所に従ひ，九時帰る。微雨。夜藤井来訪。

十二月七日 陰，微雨。柳原又熊の信至る。午前原田棟一郎来訪。午後井手三郎来談。

十二月八日 陰。松倉，河口に致書す。倶楽部の小林和介送別の午餐会に出席す。帰途大倉に河野，今井，両川列を訪ひ，三時帰る。平岡小太郎来訪せりと云ふ。

十二月九日 微雨。蘇州高田九郎に致書す。朝宗像金吾来訪。十時宇野海作来訪，陸軍演習を觀て来滬せし者，正午北京に向て出発すと云ふ。十一時出て宇野を日昇ホテルを訪ひ，十二時半小林和介，小田切萬壽之助の漢口行を停車場に送る。晩白岩と小幡恭三宅の晚餐に赴く。井手，篠崎来会。十一時帰る。

十二月十日 陰。午前井手来訪，預金利子八十円を受取る。午後原田を訪ひ，去て郵便局に至り金子を受取り，帰途篠崎，平井を訪ひ，四時帰る。山田純，原口聞一の信至る。

十二月十一日 雨。漢口中久喜信周の信至る。晩白岩，阿多，井手，篠崎を招き晩食す。十一時散ず。

十二月十二日 雨。是日より蘇州に出獵せんとす。雨を以て中止す。午前井手を訪ひ，正午佐原宅の中食の招きに赴き，三時帰る。平井徳蔵来訪。村上貞吉夫婦を晚餐に招く。十時散ず。

十二月十三日 陰。午後佐原，原田を訪ひ，阿部一毛に会し，四時帰る。井野来訪。晩井手の招宴に杏花楼に赴き，八時帰る。

十二月十四日 晴。波多博雲南よりの信至る。漢口岡，中久喜に致すの書信を原田に托す。晩佐原宅の晚餐に赴く。平井少佐，関田宇治艦長，大井隅田艦長来会。十時散ず。原田是夜より漢口に赴く。

十二月十五日 雨。午後白岩来り別る。明朝の船にて帰国する者なり。五時半甲斐寛中の招邀に豊陽館に赴き，終はりて倶楽部に至り，転じて白岩を筑後丸に送る。軍令部に報告を送り，別に岳翁，並に松倉に復書す。

- 十二月十六日 雨。九州日々社より利金七十六円余を送り来る。高田九郎，岡次郎，同幸七郎，武田寧の信至る。夜佐原宅に会す。小泉土之丞満洲より来着，明日杭州税関に赴任するを以てなり。十一時帰る。井手，西郡，黒川，神崎来会。
- 十二月十七日 雨。大東に托し蘇州高田に復書す。午前甲斐寛中を訪ひ別を告げ，去て井手に抵り，正午倶楽午餐会に出席す。四時小泉の杭州行を送る。軍艦明石伊集院俊の信至る。
- 十二月十八日 陰。東洋協会に上海其他各地入会者十一名を紹介す。九州日々宇野に金子領収書を送る。午前平井を訪ひ小談，帰る。夜倶楽部に謡曲を学ぶ。
- 十二月十九日 快晴。午前井手を訪ひ，中食後軍艦明石を迎へんとす。明日にあらざれば入港せざるを以て平井を訪ひ小談，帰る。是日五時の汽車にて村上貞吉，上野貞正と蘇州に出獵せんとす。四時食事を終はり車站に至る。上野，村上尋で至る。五時十五分発車，七時半蘇州着，高田九郎来り迎ふ。直に車に乗じ西門外に至り，船に上り石湖に向ふ。十一時横塘を過ぎ，十二時石湖橋下に泊す。寒甚終夜不成眠。
- 十二月二十日 健晴。日曜日。午前四時半起床，五時食事を為し船を寺院の廢址に移し，六時半上陸。四人四処に分れ朝鳥を待つ。余三羽を獲たり。八時より上方山に入り，午前に前後六羽を獲，罾子を打て中らず。中食後又た上方山一帯に獵し六羽を獲，五時船に帰る。
- 十二月二十一日 微雨。五時吃飯。六時半上陸雨を冒して獵し，十時船に帰る。十一時帰途に就く。三時前鉄道碼頭に達す。車站にて高田と分袂し，三時三十八分の汽車にて上海に帰り，六時半着，上野，村上に分れ家に帰る。雨益す大なり。是行獲る所鳩十二羽，小鳥七羽なり。田鍋安之助の信に接す。
- 十二月二十二日 陰。午後井手を訪ひ，共に出て軍艦明石を訪ふ。司令官以下皆在らず。副長に面し名刺を留めて帰る。篠崎を訪ひ小談，五時帰る。藤井，平井を招き晩食す。八時倶楽部に至る。長沙香月，平岡に致書す。
- 十二月二十三日 快晴。夜両川夫婦を招き晩食す。
- 十二月二十四日 陰。晩練習艦隊，南清艦隊の将校，並に英国大使加藤高明の歓迎会に出席。帰途中畑と橋三郎を豊陽館に訪ひ，十時帰る。
- 十二月二十五日 陰。荒木宅より十，十一，二ヶ月分利息を送り来る。高島生来訪。時報館より銀二百元を送り来る。藤井太七来訪。共に出て商品陳列所に至り茶盅，卓布を購ふ。夜倶楽部に至る。田鍋安之助に復書す。帰途佐原を訪ふ。原田本夕漢口より帰来，閑談十時に及で帰る。井手，中島裁之在焉。中島は本日欧米の遊より帰りし者。談話深更に及で去る。
- 十二月二十六日 快晴。午前橋三郎，井手艦長を豊陽館に訪ひ別を叙す。兩人共本日の便船にて帰国するを以てなり。去て上海日報社に中島裁之を訪ふ。中島は本日帰国する者なり。正午大慶樓の練習艦隊候補生の歓迎会に出席す。午後二時散ず。三時より練習艦隊司令官伊地知少将の茶会にアストルハウスに内人と共に出席し，四時帰る。席上にて南清艦隊司令官寺垣少将と晤談す。軍令部の報告領収証至る。夜堀宅に至り謡曲小会を催す。
- 十二月二十七日 晴。午前吉岡範策，井手と共に来訪。練習艦隊の副長たり。内人と秋田康世，神崎，村上，島田儀一，阿部一毛宅を歴訪。午後武者小路，徳永，佐原，浮田等を訪ひ，五時車站に至り吉岡範策を送る。明日呉淞を抜錨し帰国するを以てなり。夜今井邦三来訪，年暮の贈物を為す。倶楽部に至り十一時帰る。澤本夫婦来訪せりと云ふ。露国田中海軍中佐の書信至る。
- 十二月二十八日 陰。午前郵便局に至り為替を受取り，理髪して帰る。両川より火鶏二隻を贈り来る。
- 十二月二十九日 快晴。井上雅二，高田九郎に致書す。岸田太郎来訪。平井徳蔵来訪。
- 十二月三十日 晴。熊本，其他各地知人へ年賀状を發す。安河内来訪。松倉，小泉土之丞，堤武夫等の信至る。夜倶楽部の謡曲研究会に出席，十一時半帰る。平井少佐より鯽一本を贈り来る。
- 十二月三十一日 陰寒。午前池部鶴彦来訪。午後牛丸喜一，井野春毅前後来訪。伊集院参謀より干柿一

箱を贈り来る。夜迎年の準備を為し深更就寝。鉢木、烏帽子の二番を謡ふ。

### 3. 明治42年1月から12月までの日記

明治42年の日記は、己酉日誌と題した1月初めから10月16日まで、飛んで12月1日から12月31日までの一綴じと、10月16日から11月30日までの北清遊紀と題した一綴じからなっている。この年は、2度杭州近くや蘇州に出かけ、10月から11月のひと月半を北方の調査旅行に出かけた以外の時間を上海で過ごしている。

日常生活において頻繁に鳥撃ちに出かけ、謡曲の練習（この年になって、謡曲の専門家である松尾氏に習っていることが知れる）をしているのは変わらず、日本人倶楽部の午餐会に出たり、同倶楽部の総会や上海居留民会に参加しているのも変わらず、日本小学校の行事や無名会に参加している様子にも変化がない。東亜同文書院とのつながりも続いており、前年に融通したお金は一旦返されたものの、また6月に1000円を貸し、それが返済され、さらに9月に1000円を貸している。

日本人との交流で注目したいのは、前年同様に海軍、軍艦幹部との往來の他にも、のち1937年12月の南京侵攻の責任者として知られる当時陸軍大尉だった松井石根や、上海領事を務めていてのちに外務大臣になった松岡洋右との交流がこの年の冬にあったことである。また、4月28日に東亜同文会支部が設立されたことにも注目しておきたい。中国人との交流については、汪康年、姚文藻、狄楚青等との行き来が続き、狄楚青との間では、12月7日に時報館との契約をさらに1年間延長することを話している。

海軍軍令部の手当ては、この年8月からは年額で2200円を支給することになったとし、事実8月からは3カ月分として550円が支払われている。また、海軍の派遣で10月から11月にかけて北方に出かけ、各地で日本人、中国人多数に会って情報を仕入れては、それを北清遊紀に書きこんでいる。時間の順に見ると、10月18日から21日までは大連、旅順を回り、23日から27日までは奉天に滞在しているが、ほぼ同時期に伊藤博文も大連から奉天を経てハルピンに向かい、26日にハルピン駅頭で朝鮮人安重根に銃殺されたことが日記にも移動の順に記されており、26日夜のうちに伊藤の遺骸が奉天経由で南下し、奉天在住の日本人が奉天駅で送迎したことも書いている（宗方本人も奉天駅に出向いたかははっきりしないが）。26日に向野賢一が訪ねてき、その後も何度か会っている。向野賢一1868—1931、福岡県直方出身は、日清貿易研究所で学んだ後、日清戦争で海軍の諜報活動をし、その後大連、奉天等で日中合弁の正隆銀行や満洲市場株式会社等を設立した（向野賢一記念館ホームページより）。

27日は撫順に移動して炭鉱を詳しく視察し、30日は鉄嶺に行き、11月1日は奉天に戻った後、中西正樹と蘇家屯に移動し、そこで中西と松田満雄と歓談している。2人は漢口楽善堂以来の同志である。2日營口、7日天津と回り9日から10日余りを北京で過ごし、その間に順天時報社を数回訪ねた他、時の清朝を支える中堅幹部たる鉄良（陸軍部尚書）、那桐（外務部尚書）、良弼（禁衛軍第一旅団長）や、曹汝霖（外務部左丞）、程明超（郵便部）等会遇到意見交換をしている。そして保定経由で24日に漢口に着き、日本租界を見たりした後上海に戻るのである。おそらくこの旅は前年に西太后亡き後の清朝周辺の動静を探ることを主目的にした調査旅行であったと思われるが、各地で見聞した状況を詳しく記しているのは、最後に並べた「北京政況拾遺」（12月13日付け海軍軍令部宛て報告第318号「北京の政況」を補う内容）を含めて、貴重な情報のはずである。

ここで、明治42年に海軍軍令部宛てに送った宗方の報告の日付けと号数を『宗方小太郎文書』中の記載と対照しつつ日記から拾い出す。書き方の要領は、前年と同様である。うち、日付けの前に※印をつけたのは、『文書』に日付けの記載がないものである。

1月7日—「雲南西本省三の鉄道報告至る」とあるのは、第300号に該当すると推定される。1月8



日一第 301 号, 2 月 6 日一第 302 号, 2 月 24 日一第 303 号, 3 月 13 日一第 304 号, 3 月 24 日一「報告を發す」とあるが、『文書』にはない。第 305 号の可能性ある。4 月 24 日一第 306 号, 5 月 8 日一第 307 号, 5 月 14 日一第 308 号, 6 月 1 日一第 309 号, 7 月 23 日一第 310 号, 7 月 24 日一第 311 号, 8 月 3 日一第 312 号, 8 月 21 日一「文書を發す」とあるが、『文書』にはない。第 313 号の可能性ある。8 月 25 日一第 314 号, 8 月 31 日一第 315 号, 10 月 8 日一※第 316 号 (上海所蔵, 「張之洞の逝去と北京の政局」), 11 月 30 日一「報告を作る」とあるが、『文書』にはない。「北清遊紀」の最後に置かれた「北京政況拾遺」の一文が, それに該当し, 報告第 317 号にあたる可能性あり。※ 12 月 13 日一「北京政況を報告す」とあるのは、『文書』の第 318 号「北京の政況」を指すのであろう。

明治四十二年正月起

己酉日誌

一月元日 晴。五時半起床, 盥嗽, 衣を改め一家樂坐椒酒を傾く。十時領事館に至り御聖影を拝し, 午前知人を歴訪して年禧を賀し, 正午日本人倶楽部の名刺交換会に列席, 午後又出て廻礼す。是日朝来夜に及ぶ迄知人の来て正を賀する者多し。

一月二日 晴。午前軍艦明石に至り寺垣司令官, 伊集院參謀に面し新禧を賀し, 正午永瀧領事の招宴に大慶樓に赴く。同座は井手, 浮田, 武者小路, 原田, 紀成, 佐原, 阿部, 及余なり。帰途井手, 阿部, 原田等と知人を歴訪し, 最後伊東米次郎を訪ひ, 黄昏帰る。是日朝来賀客頗る多し。夜木下等来訪。是日袁世凱免官帰郷を命ぜらる。

一月三日 陰。午前多少の賀客に接す。午後内人と軍艦明石の招宴に赴く。種々の余興有り。内外の賓客約二百許。五時辞帰。内外各地に年賀状を發す。軍令部に書信を發す。

一月四日 陰。年賀状を發す。夜伊集院, 平井徳藏, 井手三郎を招き晚餐を共にす。十時散ず。是日村上列来訪。

一月五日 雨。内外各地の年賀状続々来着。午後三時永瀧領事の新年宴会に大慶樓に臨む。艦隊の將校, 居留民の重立つ者約百二, 三十人。七時帰る。

一月六日 雨。終日在家。井野来訪。

一月七日 陰。露国田中耕太郎に致書す。倶楽部午餐会に出席す。午後平井徳藏来訪。雲南西本省三の鉄道報告至る。

一月八日 陰。午前同文書院に至り賀年, 帰途上原を訪て帰る。海軍々令部に報告を發す。夜倶楽部に至る。各地友人への年賀状を發す。

一月九日 微雨。頭痛。五時より内人と井野の招宴に杏花樓に赴く。井手, 篠崎, 秋田, 村上夫婦同座たり。八時帰る。熊本学生五, 六人来談。

一月十日 陰。中畑夫婦来訪。中食後六三亭に謡曲初会に出席者二十余人。九時散ず。熊本学生来談。佐原来訪。

一月十一日 微雨。東洋協会門田正経, 河口介男に致書す。北京伊集院公使に致書し清国の時局に付き注意する所有り。夜富田安兵衛来訪, 明後日の便船にて一時帰朝すと云ふ。

一月十二日 陰。海軍々令部に報告を發す。午後篠崎来訪。晩平井, 佐原を招き晚餐す。

一月十三日 陰。宇土奥村宅に送金し, 塩浜高野, 松本兩人に致書す。小川平吉, 小林庸政, 伊集院俊の信至る。岳翁, 並に海軍よりの信に接す。軍令部より二, 三, 四, 三ヶ月分の手当金を送り来る。

一月十四日 陰。出て帽子掛を購ふ。南京伊集院少佐の信至る。

一月十五日 晴。午前泰東同文局に至り山葉風琴一台, 其他附属品を購ふ。価四十三元余。午後池部鶴彦来訪。夜謡曲を学ぶ。

一月十六日 微雨。午後高島来訪，晚餐を饗す。時報館より銀二百元を送り来る。此れにて昨年中の分皆完了せり。伊集院に復書す。佐々布質直に返信す。夜藤井兄弟，萩原来談。

一月十七日 積陰。午前安河内，鷹見，荒川来訪。晌午より徐家滙に獵す。雨。鳩二羽を獲，六時雨を衝て帰る。松倉，田中清司，清浦奎吾氏の信至る。

一月十八日 陰。午後篠崎を訪ひ，転じて正金に至り金千円を受取り同文書院の急需に応ず。安河内来訪。

一月十九日 雨。午後松尾の処に至り謡曲を学ぶ。安河内，井野来訪。夜俱樂部に至る。

一月二十日 雪，地上積三寸許，九時比に至て晴る。本年の初雪なり。北京増田中佐に致書し雑誌燕塵に寄書す。鉄嶺村山正隆に致書す。

一月二十一日 晴。是日陰曆尽日にして光緒三十四年の最終日たり。

一月二十二日 晴。是日陰曆正月元日たり。清国宣統と改元す。狄平の処に至り賀正し，姚，汪，張等の知人に名刺を送る。

一月二十三日 陰。村上，浮田，波多等来訪。波多は雲南の旅行より本日帰来せりと云ふ。之を留て晩食す。

一月二十四日 陰。是日正午より木下温知と蘇州に赴き大東公司鳶兵太郎の寓に投宿す。晡時日本租界に獵す。夜樗木耕一，福本等と談じ十二時就寝。

一月二十五日 雪。七時より木下，鳶と虎邱附近に獵し雉二羽，鶉四羽を獲，虎邱の茶館に投じて中食し，夜に入て帰る。

一月二十六日 晴。八時鳶の寓を辞し停車場に至り虎邱附近に獵す。終に鳩一，小鳥一を獲，午後三時半の汽車に乗り，六時上海に着す。

一月二十七日 陰。白岩龍平，上妻博路，玉利少将等の信至る。晩木下温知，佐原篤介，秋田康世を招き会食す。十一時散ず。是日午後小泉土之丞を東和洋行に訪ふ。蘇州鳶兵太郎に致書す。

一月二十八日 晴。細川，鍋島二侯，清浦子一行より礼状至る。俱樂部の午餐会に出す。鴉片会出席の為に来着せる宮岡参事官以下七，八人来会。夜家族一同佐原宅を訪ひ，九時半帰る。

一月二十九日 陰。午前郵便局に至り国債償還金百円を貯金と為す。領事館に打田正六を訪ひ別を叙す。其バタビヤに赴任するを以てなり。午後松尾氏に謡曲を学ぶ。夜俱樂部に至り，去て井手を訪ひ，共に出て永瀧久吉の帰国を春日丸に送る。漢口隈元喜助の信至る。

一月三十日 陰。孝明天皇祭。

一月三十一日 雨。日曜日。是日村上と出獵の約有り，雨天により止む。安河内来り金一千元を返却す。波多博，市川信也等来訪。清浦奎吾氏，並に富田安兵衛，上妻博路等の信至る。五時より平野勇造の招邀に赴く。晚餐の前後謡会を開く。来会者松尾，松本，鈴木，井手，桂，及余の六人なり。十一時散ず。

二月一日 雨。終日在家。

二月二日 雨。岡幸七郎，有安，隈元，宇野海作，香山豊熹，高島義恭，佐々布質直，佐々正之，上妻，角田政治，白岩龍平に致書す。南京辻武雄の信至る，之に復す。

二月三日 陰。午前郵便局に至り，井手の処に中食して帰る。夜俱樂部の謡曲研究会に出席，十一時帰る。

二月四日 快晴。午餐会に出席す。

二月五日 晴。鉄嶺村上正隆の信至る。午後井手，浮田来訪。木下より鶉六羽を贈り来る。

二月六日 晴。海軍に報告を發す。午前平井徳蔵を訪ひ，十二時帰る。午時野満，池部来訪。午後波多，市川来訪。波多より豹皮一枚，苗笛一個を贈る。四人を留め晩食を共にす。十時半帰る。九時阿部夫婦来談，十二時辞帰。

- 二月七日 晴。日曜日。六時より西郊に出獵小鳥二を獲、正午帰る。夜佐原来談、熊本詩社、鶏鼎社創設に付き入社を勧誘し来る。
- 二月八日 微雪。
- 二月九日 晴。午前池部来訪。午後井手を訪ふ、在らず。去て中畑を領事館に訪ひ小談。夜平井、堀を訪ひ、九時帰る。藤井太七来訪。
- 二月十日 陰。朝六時四十分車砧に至り平井徳藏、岡田徳好の江浙沿岸に遊歴するを送る。午前北京順天時報社上野岩太郎来訪。夜佐原を訪ふ。
- 二月十一日 快晴。九時小学校の紀元節、拝賀式に列席し、終て領事館に至り聖影を拝し、正午倶楽部の午餐会に出席し、午後三時軍艦伏見の招宴に出席し、六時辞帰。篠崎宅の晚餐会に赴く。山崎正董、神尾三伯列の医士連五名同座たり。一行は歐洲行の途次此地に寄港せし者なり。九時散ず。鉄嶺村山正隆、熊本佐々布質直の信至る。
- 二月十二日 晴。午前井野、村上、河野、土井等を訪ひ、出師表石刻、並に筆を購ひ帰る。午後三時山崎列を滙山碼頭に送る。漢口隈元喜助の信至る。夜井手の輪番主催なる無名会に佐原宅に出席す。上野岩太郎来会。会員は井手、佐原、村田、神崎、黒川、佐原、及び会員外篠崎、村上、鳥田の三人なり。十時半上野岩太郎を博愛丸に送り、十二時帰る。
- 二月十三日 晴。大阪鳥居赫雄の信至る。頭痛、終日在家。鉄嶺村山正隆に復書す。夜藤井太七来訪、近々大阪に転任すと云ふ。
- 二月十四日 晴。日曜日。午前五時食事。六時村上貞吉と西郊に獵す。鳩二羽、鶉十羽を獲、五時帰る。井野来訪。晚藤井を招き晚餐を共にす。
- 二月十五日 快晴、春暖。午後町野晋吉に致書。領事館に徳永格を訪ひ、帰途井手の処に小談、帰る。平井、岡田、旅行途中よりの信、並に井手友喜の信至る。佐原篤介宅の晚餐案内に赴き、九時帰る。佐々布質直来訪。
- 二月十六日 晴。午後家族と新公園に散策す。姚文藻来訪、之に清浦子爵よりの贈品二函を交付す。木下温知来訪、小鳥十数羽、並に犬一頭を贈る。之を留めて晚餐す。夜謡曲を学ぶ。新嘉坡山口昇、熊本上妻の信至る。
- 二月十七日 晴。九時井手を訪ひ、去て領事館に浮田を敲き、根津一の来滙を春日丸に迎ふ。熊本角田政治に出師表石刻一冊、東京岡次郎に呉可読集一冊を送る。
- 二月十八日 雨。倶楽部午餐会に出席す。
- 二月十九日
- 二月二十日 陰。田中耕太郎、宇野哲人、有安一雄の信至る。午後井手を訪ひ、夜倶楽部に至る。
- 二月二十一日 晴。清浦子、久品、上妻、河口介男、原田棟一郎、鳥居赫雄、鶏鼎社に致書す。平井、岡田、乍浦よりの信至る。迎英甫来訪、木下より贈りし獵犬を之に譲る。波多博来訪。新嘉坡山口昇に復書し孫文への紹介状を封送す。独逸宇野哲人に復書す。午前村上貞吉来訪。出て佐原、井手を訪ひ、井手の処に中食し、転じて阿部一毛を敲き三時帰る。飛雪撩乱。浮田夫婦、秦長三郎来訪せりと云ふ。大阪松倉の信至る。鉄嶺村山正隆に内田の履歴書を郵送す。別に阿安鎮民に致書す。晚謡曲月並会に出席。雪。
- 二月二十二日 陰寒。午後根津一來訪。夜長尾楨太郎来談。
- 二月二十三日 雨。午後池田郡蔵、篠崎都香佐来訪。
- 二月二十四日 陰雨。海軍に報告を發す。井手を訪ひ正午帰る。午後安河内来訪。晡時高宮議来訪。夜佐々布来談。
- 二月二十五日 陰。白岩龍平、高洲太助、永瀧久吉に致書す。武田寧、上妻博路の信至る。細川侯爵より宝生流謡本一部を賜はる。武田に致書し、細川侯に謡本の賜を謝す。午後安河内来訪、三千元に対

する本日迄の利子百四十六元を送り来る。熊谷直亮に其子直幹債務支払残額金四円を郵送す。

二月二十六日 雨。午後佐原を訪ひ、去て松尾に抵る。五時河野久太郎を訪ひ、六時杏花楼に根津氏の招宴に赴く。来会者平野勇造、御幡雅文、井手、佐原、高宮議、上野貞正、安河内、和田連次郎、及び余の十人なり。八時半帰る。

二月二十七日 陰。午時より家族一同南陽丸に至り木下温知を訪ふ。船内の各部を巡覽し中食の饗を受け、午後六時半の小汽船にて帰る。大連阿南、川口等の信至る。

二月二十八日 陰。是日先考十三年の忌辰たり。時物を供へ祭を為す。午後楊樹浦に至り軍艦音羽を訪ひ司令官寺垣少将、秋山艦長、伊集院参謀に会し、四時半帰る。晚藤井太七来訪。

三月一日 晴。午前高宮議、池部雀彦来訪。午後井手三郎来訪。家族を伴ひ電車愚園に至り書画、金石、賽会を縦覧す。総督端方の出品に係はる三代の祭器、鼎等の数頗る見る可き者有り。四時帰る。頭痛甚しきを以て褥に就く。文学士桑原隲蔵来訪、病を以て辞す。夜佐々布質直来訪。

三月二日 晴。正午高宮を車站に送る、来らず。転じて同文書院に至り根津、上野等を訪ひ、帰途秦、河野、小平等を歴訪し、途中書肆に至り光緒政要の預約、並に二十四史を訂購し、筆を購て帰る。東和に桑原文学士を訪ふ、在らず。河野、児玉両学生来訪。夜謡曲を学ぶ。

三月三日 晴。北京宇野海作の信至る。夜謡曲研究会に出席。

三月四日 晴。午前上妻博路来訪、昨日来着せりと云ふ。午餐会に出席す。午後佐々布来訪。六時より同文書院の招宴に四馬路杏花楼に出席す。来客六十余人。九時散ず。

三月五日 陰。朝浮田郷次来訪。鉄嶺村山正隆よりの電報を携へ来る。村山よりは内田友義採用の事を通知し来れり。京都内田に右の趣を通報す。村山、河口、大江、高宮に致書す。夜謡会に出席す。熊本角田政治、上妻博之の信至る。

三月六日 陰。午後河野久、中畑栄、池部政二、上妻博路来談。

三月七日 日曜。晴。前五時半より西郊に獵す。鳩一、小島十四を獲、三時半帰る。久品介善、角田政治の信至る。

三月八日 陰。午後井手、上妻来訪。杭州吉岡彦一に致書す。

三月九日 雨。宇土に金三円を郵送し先考十三年忌の読経、供物の資を為す。内田友義に金三十円を送り鉄嶺行の旅費に充つ。領事館に中畑、池部、宮尾等を訪ひ、帰途井手を敲き帰る。寺垣司令官より十一日晚餐の案内状到る、之に復す。夜倶楽部に至る。波多生来る、留め晚餐す。

三月十日 雨。午後上妻来訪、本人の為に蘇州高田、北京西田耕一に致書す。夜伊集院来訪。夜佐原を訪ふ。

三月十一日 雨。午餐会に出席す。午後井手と狄平を時報館を訪ふ、在らず。五時半南清艦隊司令官の招宴に軍艦音羽に赴く。同座は伊東、藤瀬、松木、井手、及び余の五人と秋山、関田両艦長、以下伊集院、船越両参謀、外二人なり。九時辞帰。風雨。

三月十二日 風雨。松本正純の信至る。佐野直喜に致書す。下午井手三郎来訪。鉄峯村山正隆、大連森茂、岳翁大人の信至る。

三月十三日 陰。海軍々令部に報告を發す。午後武者小路公共、池部政次と西郊に獵し鳩一、鶉二を獲、五時帰る。藤井、牛丸、波多を招き晩食す。

三月十四日 晴。午前寺垣司令官、伊集院、船越両参謀来訪。午後家族と出て吉坂に至り撮影す。今井邦三、上妻等来訪、兩人を留て晚餐す。

三月十五日 雨。吉岡彦一、阿多廣介、亀雄の信至る。

三月十六日 雨。午後上妻、安河内、七里恭三郎来訪。岳翁、友義、小山田淑助、白岩龍平、樗木耕一の信至る。是日井手愛而近路に移り来る。往て之を訪ふ。

三月十七日 雨。七時郵船碼頭に至り侍従武官関野大佐、並に井手友喜夫婦を迎へ、帰途七里を豊陽館

- に訪て帰る。井手を訪ふ。晩井手兄弟、並に友喜の夫人を招き晩食す。
- 三月十八日 陰。午餐会に出席す。午後五時領事館に至り、武者小路、浮田、伊東、菊地等と軍艦音羽に至り寺垣司令官の招宴に列す。関野侍従武官を主賓とし予等一行五人と艦長、副長、参謀十余人なり。九時辞帰。西本省三、熊谷直亮の信至る。井手、藤井太七来談。
- 三月十九日 雨。悪寒頭痛。正午内人、並に信子を伴ふて雅叙園に至り支那料理を用ひ、二時帰る。七里恭三郎、井手三郎来訪。晩侍従武官の招待会に倶楽部に出席す。九時帰る。佐々布来訪。
- 三月二十日 微雨。八時半信子の帰国を弘済丸に送る。侍従武官亦此船にて帰朝、往て別を叙す。九時半開船。帰途七里を豊陽館に訪ひ、井手、河野を拉して帰り、謡曲を謡ひ中食を共にす。午後野満、池部、上妻、上野等来訪、之を留て晩食す。
- 三月二十一日 陰。朝井手を訪ふ。午後池部政治夫婦、井野春毅、井手友、上妻来訪。夜謡曲月並会に出席す。修史材料蒐集の爲め来滬中の藤野静輝亦来会、博学善談。十一時半散会。
- 三月二十二日 微雨。午前正金に至り金千円を受取り、帰途篠崎を訪ふ。午後安河内来る、千円を貸附す。荒木七十郎、河口介男に致書す。是日より上妻博路来り寓す。夜居留民会に出席す。
- 三月二十三日 風雨。中島裁之の信、並に土井伊八の案内状至る。晩倶楽部に至り、八時より佐原宅の無名会に出席す。来賓として藤野静輝、桑原文学士来会。会員は井手、佐原、西郡、神崎、浮田、黒川、並に小畔、阿部の諸人なり。十二時散会。
- 三月二十四日 晴。海軍々令部に報告を發す。午後中畑を領事館に訪ふ。橘三郎来会、只今着せりと云ふ。六時土井伊八の招邀に赴く。御幡、井手、古莊、河野、澤本、青木列来会。九時帰る。
- 三月二十五日 晴。十時小学校の卒業式に臨み、正午倶楽部午餐会に出席し、午後藤野静輝を東和に訪ふ、在らず。四時帰る。橘三郎、岸田太郎等来訪せりと云ふ。晩迎英甫来訪、湖南に転任すと云ふ。藤野静輝来訪。夜堀扶桑夫婦来訪、十一時去る。葉室、佐野、伊集院、亀雄、安藤虎、阿南、川原の信至る。
- 三月二十六日 晴。午後橘三郎を訪ふ。夜倶楽部に於て宝生觀世の聯合謡会に出席す。藤野君山来会。十二時散す。
- 三月二十七日 晴。午前井手、佐々布来訪。午後波多来訪。晩食後家族一同に波多を加へ基督教青年会紀念会に出席す。会する者約千余人。耶蘇一代記の活動写真を見、十一時帰る。迎英輔来訪、長沙に転任すと云ふ。
- 三月二十八日 晴。同文書院学生高島、五島等来訪。午後二時内人と堀扶桑を訪ひ、晩食の饗を受けて帰る。亀雄、小田桐の信至る。
- 三月二十九日 晴。午前六時四十分の汽車にて江湾附近に出獵小鳥八羽を獲、十一時帰る。午後河野仲之助、児玉、並に熊本学生四名来訪。熊本学生を留め晩食す。
- 三月三十日 晴。午後佐々木武蔵来訪、清江浦より此地に帰任せし者なり。是日雛祭を爲し清子の学友四人を招く。晩藤野君山来訪。夜謡曲を学ぶ。佐々布来訪。
- 三月三十一日 晴。午前井手と白岩を東和洋行に訪ふ、本日来着せる者なり。去て領事館に永瀧を敲く、昨日帰任せりと云ふ。中畑と小談、十二時帰る。午後村上、土井、迎、佐々木等を訪ひ、五時倶楽部の藤野君山の招待会に出席す。佐々布、並に独逸留学の古賀栄信来訪せりと云ふ。
- 四月一日 晴。午前十時井手と郵船碼頭に至り久邇宮妃殿下を迎ふ。帰途豊陽館に古賀栄信を訪ふ、在らず。正午倶楽部午餐会に出席す。古賀亦来会。五時妃殿下を送り、帰途井手、村田と藤野に餞別金募集の事を商量して帰る。夜井手を訪ふ。
- 四月二日 微雨。午後黒木保、中村海田来訪。池部、河野久太郎来訪。町野晋吉、内田友義の信至る。山口昇来訪。糸川海軍少佐成太郎を松崎洋行に訪ふ。夜中村海田来り旅費を請ふ。五円を与ふ。
- 四月三日 晴。神武天皇祭。九時井手兄弟と春日丸に河野久太郎、藤瀬政次郎の帰国を送る。午後西本

願寺北畠玄瀛を訪ひ寛談，去て佐々布，池部政治を訪ひ，寺垣司令官の杭州行を送り，帰途井手と倶楽部に村田に会し藤野の事を商量して帰る。六時村上貞吉の招宴に赴く。同座は上野貞正，長野楨太郎，福岡禄太郎，篠崎都香佐，秋田康世，安河内弘等なり。十時帰る。市川新也，大山某，波多博，佐々木武蔵等来訪。

四月四日 陰。午後井野，井手来訪。井手と姚文藻を訪ふ。蘇州に往て在らず。五時神崎正助，阿部一毛夫婦，並に堀扶桑来訪。堀，孔子集語一部を贈る。

四月五日 雨。午前北畠玄瀛，藤野君山来訪。荒木七十郎より十二，一，二ヶ月利子を送り来る。七里恭三郎，内田友義の信至る。安河内弘来訪。夜伊集院俊来訪。

四月六日 晴。午前預金通帳三冊を郵便局に差出し利子記入の手續を為す。秋山音羽艦長，伊集院参謀，浮田郷次に明日晚餐の案内を為す。午後藤野君山を大東碼頭に送る。五時に及ぶも来らず，之を其寓に訪はんとす。之に途に遇ふ。漢口岡幸七郎，南京井原への紹介状を与へて別る。佐原を訪ひ小談，帰る。夜佐々布，井手夫婦来訪。

四月七日 晴。午前池部来訪。午後古澤藤三郎来訪。晩秋山音羽艦長，伊集院参謀，浮田副領事を招き晚餐す。十時半散ず。

四月八日 晴。午餐会に出席す。河口介男の信至る。夜井手友喜来訪。

四月九日 快晴。午前五時半井手と西郊に獵す。是日春色駘蕩，菜黄麦緑，桃李盛に開き野趣掬す可し。小鳥五羽を獲，十時半帰る。白岩龍平在り，井手を招き会談。午後文学士桑原隲蔵来別，明日の船にて帰朝すと云ふ。松倉に復書す。木下より鴨二十羽を送り来る。

四月十日 晴。午前桑原隲蔵を東和に訪ひ別を叙す。午後一時より内人を伴ひ旗艦音羽のアットホームに赴く。角力，演劇，撃剣等の余興有り。五時半辞帰。木下温知来訪。

四月十一日 晴。午前十一時家族同伴，井手兄弟と電車，徐家滙製筆会社に至り桃花を観る。白岩夫婦来会。酒饌の饗有り。是日桃李盛んに開き，菜黄麦緑，春色十分，快適殊に甚し。午後六時辞帰。熊本香山豊熹の信至る。北京西田耕一の信至る。

四月十二日 晴。午前木下来訪。晩司令官寺垣少将，鈴木明石艦長，船越参謀，井手三郎を招邀して晚餐を共にす。十時散ず。

四月十三日 晴。五時六三亭の艦隊将校招待会に出席す。寺垣少将を主賓とし，秋山，鈴木両艦長，宇治，明石艦長，参謀以下二十余人，主客総員八十余名。九時半散ず。

四月十四日 雨。海軍より五，六，七，三ヶ月分の手当を送り来る。軍令部川原中佐の信至る。午後井手，伊東，菊池等と旗艦音羽に至り寺垣司令官，秋山艦長，伊集院，船越両参謀に面し別を叙す。明日出港長江に潮航するを以てなり。転じて明石に至り鈴木艦長に面して帰る。

四月十五日 夜佐々木武蔵，井手三郎，宝妻壽作来訪。宝妻は本日漢口より帰来せりと云ふ。午前平井徳蔵を訪ふ，昨日閩浙の旅行より帰来せる者なり。平井氏より青田産の印材，素麵，温州橘，醬菜を贈り来る。

四月十六日 晴。午前鄭永昌，川本静夫，宝妻等を豊陽館に訪ひ，帰途東和に深野卯四童を敲き帰る。午後井手の松尾氏に至り謡曲を学び，三時帰る。四時内人と高洲太助を東和洋行に訪ふ。重患に罹り帰国する者なり。晩家族と井手宅の饗筵に赴き，□時帰る。

四月十七日 晴。午前井手と滙山碼頭に至り高洲太助の帰国を送る。軍令部名和少将に致書す。午後安河内来訪，明日の学友会端艇競漕に銀五円を寄附す。川本静夫，今井邦三来訪。六時井手と伊東米次郎の招邀に赴く。同座は白岩夫婦，菊池夫婦，井手，及び予と内人となり。晩食後鉢木一番を謡ひ，十一時帰る。

四月十八日 日曜。六時より江湾附近に獵し小鳥五羽を獲，八時半比より春雨頻に至り衣袂尽く沾ふ。十一時帰る。是日同文書院短艇競争の当日なれども雨を以て行かず。午後佐々布来訪，之を伴て志保

- 井を訪ふ、在らず。夜謡曲月並会に出席す。十一時半帰る。池邊吉太郎に致書、其姪高島醇の事を申送る。
- 四月十九日 晴。軍令部吉田中佐の信至る。午後根津一來訪、昨日来着せりと云ふ。平井、大井両海軍少佐、佐原篤介を招き晚餐す。
- 四月二十日 陰。午前井手と同文書院に根津を訪ふ。本夕出発、漢口に赴くを以てなり。正午帰る。午後佐々木、高島来訪。
- 四月二十一日 陰。午前井手と商務印書館に小平を訪ひ、帰途筑前丸に石渡、神崎の帰国を送る。軍令部岩村副官、吉田中佐に致書す。午後安河内来訪。晩家族同伴、井手等と佐原宅の晚餐に赴き支那料理の饗を受け、十一時帰る。
- 四月二十二日 晴。午前井手宅に木村丑徳に会す。昨日来着、近日福州に赴くと云ふ。軍令部吉田参謀、並に柳原、伊藤源七、村山正隆等の信到る。村山、柳原、町野晋吉、木下温知、中島裁之、佐野直喜、西本省三、渡辺繁三に復書す。木下は漢口にてチブスに罹れりと云ふ。田畑新平に復書す。武者小路氏夫婦来て別を叙す。明後日の春日丸にて帰朝すと云ふ。理髪後川本を訪ひ、六時武者小路、蓮二氏の送別会に出席す。九時帰る。佐々布来訪。
- 四月二十三日 晴。井手友喜と朝食前車站附近に猟し鳴二羽を獲、八時帰る。十時井手と木村丑徳を滙山碼頭に訪ふ、在らず。帰途長尾雨山を訪ひ、正午帰る。川本静夫、佐々木武蔵、上妻博路を招き晚餐す。
- 四月二十四日 晴。海軍に報告を發す。午後武者小路公共、蓮等の帰国を送る。河野、兎玉、波多、那須等来訪。波多、那須留飯。村上の処に至り晚餐し、十時帰る。
- 四月二十五日 晴。午前十時の汽車にて花田新三郎と江湾に下車し鳴猟を為し大鷓三羽を獲、五時帰る。夜井手、木下宅を訪ふ。海軍々令部名和少将の信至り、来八月以降手当年額二千二百円支給の事を報じ来る。山内崑、佐々布遠、藤井太七、松倉、原田棟一郎、宝妻の信至る。
- 四月二十六日 微雨。軍令部名和少将、伊集院参謀、七里恭三郎に致書。七里の信至る。是日安河内より金一千元を返却し来る。加藤駒二来訪。東京原亮一郎の贈品を持参す。五時より義勇隊招待会に六三園に出席、七時半帰る。井手来談。商務印書館に小平を訪ひ二十四史の損書を調換す。
- 四月二十七日 晴。秋山音羽艦長に致書、並に治兵心書を郵送す。原亮一郎、荒木七十郎、吉田参謀に致書す。午前銀行に至り預金を為す。午後野満、池部、船津辰一郎、鄭永昌、御幡雅文等来訪。船津は本日帰朝の途次香港より立寄りし者なり。五時出て船津を送らんとす、来らず。晩謡曲を学ぶ。筑後丸に至り村上貞吉、深野卯四童の帰国を送る、在らず名刺を留て帰る。
- 四月二十八日 雨。午前中島某を東和に訪ひ、白岩と小談。井手と高道武雄を佐々木医院に訪ひ、正午正金原誼太郎の午餐の招きに赴く。高道、井手、予の三人なり。二時辞帰。藤井太七、西本省三、町野玄同氏の信至る。町野氏よりは其三男晋吉二十日死去せることを報じ来る。五時高道の帰国を稅務碼頭に送り、六時倶楽部の同文会支部創立委員会に出席し、晩食後八時に至て散ず。出席者は永瀧、上野、井手、白岩、御幡、黒川、佐原、大原信、及予の九人なり。
- 四月二十九日 晴。町野玄同氏に弔詞を送り、藤井太七、松倉、鳥居、原田、土屋、中島裁之に信片を致す。午餐会に出席す。是日同県人中島為喜来訪、高島義恭よりの贈に係はる関兼房の短刀一口を贈る。五時井手、中野と雅叙園に赴き木村丑徳を主賓とし、中島為喜、白岩、佐原を招飲し、八時半帰る。途中加藤駒次を東和洋行に訪ふ。
- 四月三十日 晴。高島義恭に短刀の礼状を出す。平井徳藏、木村丑徳、黒木保等来訪。五時倶楽部の総会に出席、九時帰る。夜今井邦三来訪。京都桑原隲藏の信至る。
- 五月一日 陰。上妻博路是日出発、大連を経て營口に向ふ。八時出て之を送り同時に白岩龍平の帰国を送る。八時半より同文書院の町野晋吉の追弔会に臨席し、正午帰る。是日清国先帝大葬の期たり。中

鳥為喜，高島醇来訪。晚篠崎，佐々布，長尾来訪。

五月二日 雨。日曜日。是日井手，神崎，上野，花田等と出獵の約有りしも雨を以て休む。午前井手を訪ふ。中島為喜の為に岡幸七郎に紹介状を与ふ。

五月三日 晴。午後郵便局に至り預金通帳を受取り熊本に金十五円を送り，帰途中島為喜，井手等を訪ひ帰る。鈴木房夫，波多博，大山博来訪。鎮江佐々木武蔵，大阪原田，鳥居の信片至る。晚中島為喜来訪，本夕より漢口に赴くと云ふ。

五月四日 晴。午前五時より井手と小笠原と江湾附近に獵し鳴五羽を獲，十一時半帰る。

五月五日 晴。佐野直喜の信至る。熊本学生田中，上野，外二名来訪。晚謡研究会に出席，九時帰る。

五月六日 晴。午前会に出席す。福建より来れる佐倉孫三と会談す。午後上海日報に至り，帰途平井，秋田，佐原等を訪ひ，五時帰る。大連柳原又熊の信至る。

五月七日 晴。漢口藤野君山の詩片至る。九江秋山音羽艦長の信至る。

五月八日 晴。海軍々令部に報告を發す。午前佐倉孫三の帰国を送る。是日晝の表換を為す。午後両川藤次郎来訪。晚鈴木房夫，野満四郎，波多博を招き晩食を饗す。予は藤田劍峯の送別会に佐原宅に出席す。同座は藤田を主とし長尾楨太郎，井手三郎，小野兼基，篠崎都香佐，佐原，及予也。九時散ず。夜佐々布来談。

五月九日 晴。日曜日。午前六時四十分の汽車にて井手友喜，並に日報社の青年三人，神崎正助，荻野元太郎，外一人，小平元，花田新三郎等と江湾に獵し大鷗一羽，鷗一，千鳥三を獲，六時の汽車にて帰る。七時鈴木送別の謡会に出席，十一時帰。池部夫婦来訪せりと云ふ。

五月十日 晴。岳翁，上妻兄弟，田畑貞喜の信至る。奥村某，外一人来訪。

五月十一日 晴。午前井手と汪康年，姚文藻を訪ふ。午後領事館に中畑を訪ひ，帰途井手を敲き帰る。夜北河南路村上，神崎列住所の附近に大災有り，往て両家，並に秋田の宅を見舞，九時帰る。河口介男の信至る。

五月十二日 晴。午前印書館，河野久太郎を訪ふ。河野は今朝帰来せる者なり。阿南，村山正隆，篠原邦威，軍令部，上妻，川口，緒方二三の信至る。篠原祐喜来訪，本日来着せりと云ふ。松岡，甲斐両学生，並に秋田，神崎来訪。

五月十三日 雨。午前井手，狄楚青来訪。午餐会に出席す。是日時報館より正月より三月に至る銀一百五十元を送り来る。満洲村山，北京西田耕一に致書す。七里恭三郎，上野岩太郎の信至る。

五月十四日 晴。午前日本小学校の学芸会に出席す。午後姚文藻来訪。町野玄同氏の信至る。清浦奎吾に致書，海軍に報告を發す。外に香月，松倉に致書す。是日商務印書館に自用書籍代二十七元八角，軍令部送り書籍代十一元二角を払ふ。佐々木武蔵に致書す。北京七里に致書，並に原稿を送還す。河野久太郎来訪。九時出て春日丸に至り，報告を投函し，両川藤次郎，藤田劍峯に名刺を留て帰る。此兩人本船にて帰国するを以てなり。

五月十五日 晴。上妻博之に復書す。午後出て理髪。三時本願寺に至り町野晋吉の追弔会に列し，四時帰る。

五月十六日 日曜。晴。六時四十分の汽車にて井手，荻野，外三名と江湾に獵し鳴六羽を獲，四時半帰る。夜謡曲月並会に出席，十二時帰。深野卯四童，山内崑の信至る。

五月十七日 晴。澤村幸夫来訪。晚長尾楨太郎来訪。伊集院俊の信至る。

五月十八日 晴。夜佐原宅の無名会に出席す。会者神崎，井手，佐原，浮田，西郡，原誼太郎，外印度より帰来の某々二人なり。十一時半散ず。

五月十九日 晴。晚雷雨。午後篠崎来訪。高島義恭，樗木耕一，藤井太七の信，並に鷄鼎社の信至る。上妻博路の信至る。

五月二十日 晴。朝佐々布来訪。午餐会に出席す。帽子を購ひ，上海日報社に至り，帰途北島玄瀛を一



- 訪して帰る。野田，池部，上野来訪。夜佐々布，澤村幸夫来談。午前山東平陰人朱蔭成来訪。村山正隆，亀井陸良の紹介を持し来る。同文書院教師として来任せる者也。荒木七十郎より二，三両月分利子を送り来る。
- 五月二十一日 晴。午後郵便局に至り熊本鶏鼎詩社に原稿並に会費一円を，東京隆文館に肥後文献叢書代金拾五円を郵送す。帰途井手，篠崎を訪ひ帰る。夜井手友喜来訪。福州篠原祐喜，漢口木下温知の信至る。
- 五月二十二日 晴。漢口木下温知に致書す。午後濱田磐吉来訪，本人を永瀧，中畑に紹介す。晩西本願寺北畠玄瀛の招饗に赴く。同座は井手兄弟，阿部，外二人なり。十時帰る。是日午後波多来訪。
- 五月二十三日 晴。日曜日。井手友喜，上野貞正，荻野元太郎，神崎正助等と江湾に獵しシヤクヌギー羽を獲，三時帰る。松倉，土屋の信至る。晩内人と篠崎の晩餐の招きに赴く。
- 五月二十四日 晴。午後清子を伴ひ出て帽子を購ふ。漢口木下より銀四十元を送り来る。内五元を其ボーイに渡す。
- 五月二十五日 晴。午後松尾に至り謡曲を学ぶ。時報館より中国名画，並に漢碑石刻二冊を送り来る。井野来訪。
- 五月二十六日 晴。午前井手来訪。午後兩川，安河内来訪。蘇州姚の信，並に村山，松倉，肥後銀行，黒龍会の信至る。午後四時より井手一家と家眷を伴ひ張園に曲馬を觀，七時帰る。夜謡研究会に出席，十一時帰る。
- 五月二十七日 晴。午前平井徳蔵来訪。午餐会に出席し，上海日報社に至り小談，帰る。夜平井少佐の招宴に六三亭に赴き，十時帰る。香月梅外の信至る。
- 五月二十八日 晴。林安繁，後藤助二，上妻博路の信至る。鉄茶村山正隆に致書す。午前平井徳蔵来訪。午後池部，野満来訪。七時永瀧領事の招宴に六三亭に赴く。同座は狄葆賢兄弟，井手，浮田，中畑，池部，佐原等なり。九時散ず。十時井手三郎の帰国を博愛丸に送り，十一時半帰る。
- 五月二十九日 晴。土曜日。
- 五月三十日 晴。午前郵便局に至り，帰途領事館，平井を訪ひ，十二時帰る。杭州岡田徳好の信至る。兩川藤次郎来訪。午後内人と澤本，島田を訪ひ，五時帰る。
- 五月三十一日 晴。午前郵便局に至り公債償還金一千二百円の記入を為し，預金中より整理公債十四枚一千四百円，第二十八回勸業債券十枚二百円の購入手続を為し，証券保管帳を托して帰る。黒龍会本部，並に肥後銀行生命保険部に復書す。
- 六月一日 晴。杭州岡田徳好より去年十一月西湖にて写せし細川，鍋島両侯一行の写真一枚，並に岡田家族の写真を送り来る。岡田に復書す。海軍々令部に報告を發す。夜井手宅を訪ひ弔詞を述ぶ。其岳父死去せしを以てなり。夜澤村幸夫来訪。
- 六月二日 晴。九時半井手夫人の帰国を送り，帰途理髮，十一時帰る。海軍々令部に報告を發し，河口介男に復書す。北畠和尚来訪。海軍より日本海々戦第四周年紀念画葉書を送り来る。井手，長崎よりの端書至る。夜平田彦熊来訪。
- 六月三日 雨，晌午晴。午餐会に出席す。井手友喜来訪。晩井手と河野久太郎を訪ひ，十時帰る。
- 六月四日 晴。午前平田来訪。午後正金銀行に至り金を受取，領事館に永瀧を訪ひ，帰途狄宅を訪ひ時報記事更正の事を商量して帰る。大雨。中島為喜来訪，本日漢口より帰来せりと云ふ。
- 六月五日 雨。午前長谷場某の帰国を春日丸に送り，帰途領事を一訪して帰る。杭州岡田徳好来訪，枇杷一簞を贈る。同文書院和田連次郎来訪。午後澤村幸夫来訪。樗木耕一，香山豊熹に致書す。軍艦隅田艦長より来七日茶会の案内至る。
- 六月六日 晴。日曜。岩村軍令部副官，川原鹿島副長，大阪商船会社末永一三に復書す。帰途平井，岡田を豊陽館に訪ひ，去て篠崎，秋田を一訪して帰る。佐々布来訪，晩餐後帰る。夜半雷雨。

六月七日 雨。高島義恭の信至る。之に復す。午後井手友喜、並に郵便報知新聞記者石川安次郎、中島為喜来訪。三時岡田を訪ひ、電車にて滙山碼頭の軍艦隅田のアットホームに出席、七時帰る。

六月八日 雨。午前岡田徳好来訪。山根虎之助、東洋協会門田正経の信至る。山根、高島に復書す。午後鑄方徳蔵来訪、本日武昌より来着せりと云ふ。井手友喜、濱田某亦来訪。晩井手と鑄方を豊陽館に訪ひ別を叙す。本日上船、帰国するを以てなり。筑後丸に至り名刺を石川半山に留て帰る。途上大雨驟かに至り衣袂皆濡ふ。

六月九日 陰。上妻、並に肥後銀行の信至る。午後中島為喜、松本菊熊来訪。松本は北京より来着せる者なり。京都工藤常三郎の信至る。

六月十日 陰。内人と礼査路に至り反物、其他数品を購ひ、午餐会に出席す。六時正金大島徳太郎の送別謡会に倶楽部に出席し、十一時帰る。

六月十一日 微雨。村山正隆、藤井太七、古閑信夫の信至る。古閑に復書す。上妻博路、海軍々令部に発信す。夜大島、鈴木等船に送り名刺を留め帰る。帰途中島為喜を東和に訪ふ。

六月十二日 雨。午後安河内来訪。

六月十三日 陰。午前平井徳蔵来訪。午後池部夫婦、浮田夫婦来訪。井手友喜を招き晚餐す。河野久太郎来談。

六月十四日 雨。貯金管理局より保管通帳を送り来る。同文会、黒龍会、軍令部、有働政喜の信至る。小木曾僧人、工藤常三郎の添書を携へ来訪。

六月十五日 晴。午後野満四郎来訪。夜隠岐生来訪。四川宮阪九郎の信至る、之に復す。中島為喜来訪。

六月十六日 陰。午前井手、平井、佐原を訪ひ、十二時帰る。井手、松倉、香山の信至る。香山よりは高島醇を同文書院県費生に採用せし事を通知し来る。井手友喜来訪。夜佐々木武蔵、市川信也来談。

六月十七日 雨。午餐に出席。郵便局に至り東洋協会に費四円、並に博文館に雑誌代を郵送し、外に松倉、高島に致書す。帰途上海日報、池部等を訪ひ、四時半倶楽部の同文会委員会に出席、六時帰る。波多博、甲斐、本田、高島四学生、並に中島為喜来訪。

六月十八日 雨。森岡正平の信至る。午後平井を訪ひ、去て吉阪写真店に至り熊本県人全体と撮影し、五時半杏花楼の同文書院卒業生送別会に出席、九時帰る。是日出席二十六名。

六月十九日 半晴。満洲日々新聞特派員山ノ井格太郎来訪。高島義恭、武藤虎太、崑山の葉書並に書信至る。午前出て中畑栄、杉本重道等の帰国を送り、帰途狄楚青を敲き帰る。午後山ノ井、領事を訪ひ、井手と浮田郷次、池部政治、横山、紀成虎一、阿部一毛、島田儀市、川本静夫、鄭永昌等を歴訪し、六時半帰る。晩食後謡曲を学ぶ。

六月二十日 微雨。日曜日。午前横山、花田、宮尾来訪。中食後井手と出て根津一を迎へんとす。船已に入港し上陸後にして及ばず。午後二時より滙謡月並会に出席、六時帰る。夜五島聰千代、島田数雄来訪。岳翁、並に高島義恭の信至る。九州日々社より利金を送り来る。

六月二十一日 陰。午後篠崎を訪ひ、去て上海日報社に至り小談、帰る。九州日々社に金子領収証を送る。岳翁の信に接す。

六月二十二日 陰。午前井手友喜と軍艦音羽、明石を訪問し司令官、艦長、参謀等に面し帰る。午後木下温知来訪、本日漢口より来着せりと云ふ。三時より井手と同文書院に至り根津一を訪ひ、五時帰る。夜木下を訪ひ、去て郵船に至り伊東米次郎、水野梅暁の帰国を送り、篠崎を一訪して帰る。水野梅暁来訪せりと云ふ。

六月二十三日 雨。午前山ノ井格太郎、安河内弘前後来訪。根津一、野満四郎来訪。午後二時松尾謡曲師の処に至り伊藤、松尾両氏の隅田川を聴き、五時帰る。夜中島為喜来訪。

六月二十四日 雨。大阪末永一三、東京石川安次郎の信至る。郵便局に勸業債券第五回発行の分二百円代購入の事を申込む。午餐会に出席す。午後寺垣艦隊司令官、伊集院参謀、安河内弘、並に同文書院

- 学生波多, 田中, 外二名来訪。夜長尾慎太郎来訪。佐原宅を訪ふ。
- 六月二十五日 雨。正午大慶樓の機関候補生歓迎会に出席, 二時半散ず。帰途河野を訪ひ帰る。野満四郎, 井手来訪。同文書院卒業生波多博, 那須, 江尻三人を招き晚餐を饗す。長尾を訪ひ小談, 帰る。河口介男, 水上某の信至る。
- 六月二十六日 陰。安河内, 本田佐八, 木下温知来訪。白岩龍平, 工藤常三郎の信至る。
- 六月二十七日 晴。日曜。午後機関候補生三人来訪。二時より同文書院卒業式に臨み五時半帰る。夜池部政次, 浮田, 島田儀一等を訪ひ, 十時帰る。
- 六月二十八日 陰。朝安河内来訪。午前郵便局, 正金に至り預金を受取り, 村上を一訪して帰る。同文書院に金千円を貸す。井原真澄, 石川安次郎に致書す。午後五時池部政次の杭州に転任するを送る。安河内を招き晚餐す。
- 六月二十九日 晴。午後池部政次, 平井徳蔵, 安河内弘来訪。安河内より利息百八十七円余を領取す。夜秦, 並に那須, 江尻, 竹下三生来り別を叙す。明日の船にて帰国すと云ふ。武藤巖氏の謝恩会に寄附金三円を池部の帰国に托し久野尉に送る。
- 六月三十日 陰。海軍々令部に書信を送る。井手三郎に致書す。北清地方に旅行する本田学生の為に山西早川新次に添書す。別に京都商業学校修学旅行生の為め南京井原に致書す。朝筑前丸に至り安河内, 上野貞正, 池部鶴彦, 那須, 江尻列の帰国を送り, 続て名和海軍少将を弘濟丸に迎へ, 豊陽館に至り名和氏の処にて中食す。伊国公使館附海軍中佐齋藤半六亦来会。午後二時半名和少将, 並に平井, 齋藤と馬車に分乗し南市を経て大南門外車站を見, 同文書院に至り小談。徐家滙に李鴻章祠堂を觀, 五時半帰る。七時平井少佐の招宴に豊陽館に赴く。名和少将を主賓とし寺垣司令官, 秋山, 鈴木, 桂の三艦長, 伊集院, 船越両副官, 浮田, 並に余の十人なり。十一時散ず。軍令部吉田中佐, 牛莊村秀雄の信至る。
- 七月一日 雨。午前豊陽館に名和少将を訪ひ, 十一時寺垣司令部の招宴に軍艦音羽に赴く。宴に列する者は名和氏を主客とし, 齋藤中佐, 永瀧, 及び余の三人と主人側にては寺垣少将, 鈴木, 秋山, 桂の三艦長と両参謀なり。三時一同辞帰。夜佐々布来訪。九時より豊陽館に至り寺垣少将に面し別を叙す。其明後三日を以て艦隊を率ひ広東方面に向ふを以てなり。十一時半帰る。大雨。
- 七月二日 微雨。午前井手と木器店を觀る。午後内人と四川路, 愛而近路に至り木器を覓め戸棚一個を購ふ。甲斐某, 勝木恒記夫婦来訪。晩野満四郎来訪。七時根津氏の招宴に杏花樓に赴く。同座は御幡, 古莊, 河野, 村上, 秦, 勝木, 及び余の八人なり。九時半散ず。
- 七月三日 陰。是日より名和, 平井二氏と杭州より蘇州に赴かんとす。行李を整ふ。北京宇野, 上野岩三郎, 川島浪速, 増田中佐, 豊島捨松, 並に野満の為に安達謙蔵, 亀井英三郎に致書し, 並に吉田中佐に杭蘇の遊を報ず。午前根津, 勝木, 野満, 吉岡列を送り, 帰途名和少将, 平井を訪ひ帰る。波多博, 外一人, 甲斐友比古等来訪。波多は今夕上船大連に赴くと云ふ。午後四時半家を出て大東公司に至り名和, 平井二氏に会し, 五時杭州行の船に上る。大東より佐々木武蔵同行す。桂伏見艦長, 神崎正助来送。
- 七月四日 半晴。天明嘉善県城外を過ぐ。航路は城の東南に在り。鉄道線路は城の北側を經過せり。此地より楓涇に至る二十清里, 嘉興に至る四十里と云ふ。運河増水稻田と相通じ汪洋たる巨浸を為す。午後八時杭州着, 石原警部, 近藤, 本多, 岡田, 外三, 四人来迎。大東局にて晚餐の饗有り, 深更に及で散ず。
- 七月五日 陰。午前七時轎に乗り一行に岡田, 本多の二人を加へ領事館に至り池部政次を訪ひ, 去て岳廟岳墳に謁して領事館に帰り中食し, 十二時半辞して錢塘門を入り鼓樓を過ぎ鳳山門を出で, 江干に至る。錢塘江の左岸に沿へる一市街にして材木の屯積せる者極て多し。回顧すれば二十二年前風雪の日此地を過ぐ。俯仰今昔感極て深し。更に轎を飛して上游六和塔の附近に至る。塔は江に臨み九層よ

り成る、觀瞻甚雄。閘口の車站に至り汽車を待つ。此處浙江鐵道の起点たり。三時上車、四時拱宸橋駅に達し、大東公司にて水浴し辭して出づ。途小泉土之丞に逢ふ、相携て其寓に至り小談。共に出で石原警部の寓に至り一行に會し、五時半蘇州行の船に上る。石原、近藤、小泉、岡田、郵便局長某來送。

#### 嘉興杭州線駅名

嘉興、王店、硤石、斜橋、周王廟、長安、許村、臨平、笕橋、拱宸橋、艮山門、清泰門、南星、閘口

嘉興至閘口百九十七清里六

嘉興閘口間車賃 一等十九角、二等十三角、三等七角

杭州の城内支線は清泰門の東側より城壁を穿て入り城内を通過し候潮門の東側を出で閘口駅に會す。現に閘口拱宸橋間一日五往復、嘉興閘口間一日午前午後各一回を往復す。嘉興より拱宸橋に至るには艮山門にて乗換へざる可からず。鳳山門外に師団兵舎の敷地を区画し墻壁を繞らせり。

七月六日 雨。午前八時蘇州着。現に湖州地方洪水の爲め杭州より嘉興を経て蘇州に入れり。車を驅て松廼家に投ず。大賀、鳶諸氏來訪。午前十時轎子或は驢馬にて盤門に入り滄浪亭を覽、元妙觀を巡覽し、北寺の塔に上る。九層より成る結構の宏大なる未だ曾て見ざる所、最上層より展望すれば姑蘇の全景一目の中に在り。閘門大街を過ぎ虎丘に至り千人石上にて中食し寒山寺に向ふ。途上雨に遇ふ。寺内に小休す。愈曲園書楓橋夜泊の詩碑有り。文徵明の詩碑は多半剥落に歸し字跡の見るべき者三の一に過ぎず。特に惜む可き也。側に唐寅の碑文有り。曲園詩碑の引に中吳記閘に江楓漁火を江村漁火に作る云々の語有り。五時西門外にて馬車に換坐して歸る。夜居留民の重なる人々より松廼屋にて饗應を受け、來會者は大賀、鳶、福本順三郎、服部本一、是枝幸吉郎等の諸氏なり。十一時半散ず。名和、平井二氏と閑談、午前二時就寢。

七月七日 雨。午前鳶兵太郎來訪。午後領事館に至り別を告げ館の門内にて撮影す。馬車にて蘇州停車場に至り、二時四十五分南京行の汽車に乗ず。鳶氏來送。五時常州を過ぐ。此辺一帶河水汎濫し田畑淹没、民家の被害頗る慘。丹陽県管下浸水区域殊に広く恰も湖水一様の觀を為す。七時鎮江を過ぐ。浸水の地域亦少なからず。九時南京下関に達し城内鐵道に換坐し中正街に至り下車、腕を賃して娃橋の宝來館に至り投宿す。市中処々浸水し車水中を行くもの少時。

七月八日 陰。午前中正街の領事館に至り井原真澄を訪ひ小談。旅館に歸て中食し、鈴木房夫を東道とし馬車にて北極閣に至り登臨す。玄武湖、鷄鳴寺等の勝区眼底に落ち金陵の全景襟帶の下に在り。兩江師範學堂に至り校舎を一覽し、去て陸軍少佐平野平八を司令部前の官舎に訪ひ小談、転じて雨花台に至らんと欲し、途上泥濘の爲め南門（聚寶門）より折回し明の故官の遺址を觀る。断礎殘壁光景荒涼、現に宮城の墻壁を破壊しつつ有り、特に惜む可きなり。五時旅館に歸る。城内浸水深股に及べる所有り。晚鈴木を留て會食す。井原、天野來訪せりと云ふ。

七月九日 陰。前九時旅館を出で中正街に至り汽車に上る。鈴木房夫來り送る。下関に至りて巡覽す。對岸の浦口は津浦鐵道の終点にして、現に棧橋を設て軌条の布設に従事しつつ有り。十二時上車、南京を發し車上にて中食す。線路の左方龍潭夏蜀の間に石炭を採掘せるを見る。近時の發見に係はるものなり。二時鎮江に達し腕車日清公司に至り小休、小汽船にて焦山に遊び頂上の吸江樓に上る。江辺より此に至る一徑蜿蜒、路傍の断崖に古今名人の題詠頗る多し。頂上小平の処に阿姆斯特屯砲十二珊、十五珊の二門を備ふ。満島寺院甚だ多く、就中定慧寺を以て最大と為す。漢三詔焦隱士の遺址有り。五時寓に歸り町田宅の晚餐に赴き、十時岳陽丸に名和、平井兩氏を送り、十一時握別して歸り、日清公司樓上に宿す。

七月十日 晴。軍令部吉田中佐に致書す。町田氏に中食し、一時辭出轎に乗じて車站に至り、二時上海行の汽車に乗ず。須賀虎松同車たり。南京より來れる者なり。七時半上海に着し須賀、佐々木と別れ

家に帰る。

七月十一日 晴。夜両川藤次郎，佐々布質直，河野久太郎，今井邦三，井手友喜前後来訪。白岩，井手，須賀，江尻，安河内，西本，牧，山根，阿南，波多，田畑，竹下，池部夫婦，増見，上妻の信に接す。

七月十二日 晴。午前郵便局に至り証券保管の記入を請求し，永瀧を訪ひ帰る。夜澤村幸夫来訪。

七月十三日 晴，風大。清浦奎吾氏，並に井上雅二，野満四郎，九州日々新聞社村本の信至る。中島為喜来訪。是日孟蘭盆会たり，時物を供し祭を致す。

七月十四日 晴，風大。朝島田数雄来訪。九州日々村本武，河口介男に致書す。下痢。

七月十五日 晴。井手三郎京都よりの信至る。

七月十六日 晴。午前郵便局に至り，帰途篠崎を訪ひ帰る。午後西田善蔵来訪。晩佐々木武蔵来訪，之を留て晚餐す。木下温知亦来談。

七月十七日 晴。井手，鳥居京都よりの連名はがき，並に大山博，莊村秀雄の信至る。

七月十八日 晴。午後謡曲月並会に出席，五時帰る。原田棟一郎の信至る。熊本井手三郎に致書す。佐原，井手来訪。

七月十九日 晴。夜木下温知宅を訪ふ。

七月二十日 晴，是日入大暑。夜家族と堀扶桑を訪ひ，十一時帰る。

七月二十一日 晴，熱甚。隈元喜助の信至る。澤村幸夫来訪。夜佐原来訪。

七月二十二日 晴。夜佐々布来訪。

七月二十三日 晴。國友重章去二十日死去の訃至る。九州日々社より金千四百円を返付し来る。海軍々令部に報告を發し，九州日々社に証書を郵送す。十時郵船に至り郵書を投函す。

七月二十四日 晴。海軍に報告を發す。大連市原源次郎の信至る。鎮江町田，蘇州鳶，杭州池部，近藤，南京鈴木，蘇州大賀に致書す。夜阿部夫婦来訪。

七月二十五日 晴。朝井戸川辰三を東和洋行に訪ふ。歐洲行の途次昨日来着せりと云ふ。其同行者伊東子爵，北小路（西村），窪田書記官等に面す。河野を訪ひ小談，帰る。松倉善家，不破昌材，久野尉太郎の信至る。晩井戸川列の招宴に六三亭に赴く。伊東，窪田，西村，井戸川を主人とし，来客は永瀧，篠崎，佐原，浮田，阿部書記官，並に余の六人なり。十一時散ず。小村伯，青木宣純，伊集院，牧，根津，松岡等に連名して端書を發す。

七月二十六日 晴。十時税関碼頭に至り井戸川列を送り，十二時帰る。夜澤村，川本静夫，井野，佐々木前後来訪。住江常雄月の二十日死去の訃至る。不破昌材の信至る。

七月二十七日 晴。午前加藤駒治，中島為喜を訪ひ，去て領事館に永瀧を訪ひ小談。郵便局に至り勸業債券購入保管の手續を為し，帰途辻武雄を豊陽館に訪ひ帰る。

七月二十八日 晴。住江，國友両家に弔詞を致し，外に高島醇，松倉，不破に復書す。正午辻武雄を車站に送る。恒屋盛服死去の訃至る。其遺族に弔詞を發す。上妻，井手，名和，平井，田中清司の信至る。

七月二十九日 晴。午後岸田太郎来訪。夜河野久太郎来り福州荔枝を贈る。味極て美。堀扶桑，佐々布質直亦来訪。

七月三十日 晴。岳翁，内田友義，荒木七十郎，井上雅二に致書し，伊集院俊，並に亀雄に写真を郵送す。時報館より四月至七月の報酬二百円を送り来る。晩倶楽部の阿部，杉野列の招待会に出席す。北京高宮議，甲斐友比古の信至る。高宮より清国大官表を贈り来る。高宮に復書す。近藤弘造の信至る。

七月三十一日 晴。午後佐原来話。児玉英蔵亦来訪。五時佐原宅に阿部書記官と会談し，七時帰る。市原源，田中瑞穂の信至る。

是日大阪北区空心町に火起り一万四千戸を焼失す。

八月一日 晴。日曜。午前松島宗衛，両川藤次郎来訪。狄の信至る。之に復す。野満，西本，高橋正二

の信至る。宝妻来訪，本日来着せりと云ふ。

八月二日 晴。午前理髮。松島宗衛を勝田館に，宝妻を豊陽館に訪ひ，十二時帰る。軍令部吉田中佐の信，並に京城賀来生の信至る。福岡来訪。

八月三日 晴。軍令部安村介一の信至る。宝妻壽作の妻本日豊陽館にて死去の訃至る。海軍に報告を發し，吉田中佐，安村に復書す。高橋正二に復す。夜内人と豊陽館に至り宝妻に弔詞を述べ奠儀を贈り，十一時帰る。

八月四日 晴。午前郵便局に至り海軍に報告を發し，樋野局長を訪ひ小談，正金銀行に至り同文書院返納の金一千元を預入し，帰途中島為喜を訪ひ，大東に佐々木を敲き帰る。加藤駒治来訪。午後四時宝妻宅の葬式に本願寺に列し，五時半帰る。西本省三に致書す。夜堀夫婦，佐々布来訪。

八月五日 晴。阿多廣介，安村介一に致書す。安村少佐に電信線路図を返却し，別に電信局名録一冊を郵送す。海軍々令部より八，九，十月分手当五百五十円を送り来る。領収証を岩村副官に送る。五島聰千代，青木喬の信至る。佐原，中島前後来訪。

八月六日 晴。午前午前郵便局に至り，帰途松島を勝田館に訪ひ十一時帰る。商務印書館，作新社に至り書籍を購ひ，図書公司にて予約の約章大全，並に光緒政要を受取り帰る。宝妻，井手来訪。本田佐八，亀雄，松倉，賀来，上妻博之の信至る。大阪西村天囚，原田棟に大災見舞状を送る。井手の処にて松島，島田等と会食し，七時半帰る。宅に於て無名会を開く。松島宗衛，佐原，井手友，浮田，西郡，原の諸人なり。十二時散ず。

八月七日 晴。支那官員録を東洋協会と九州日々社に郵送す。朝領事館に至り，十一時帰る。午後松尾，御幡等の帰国を送り，帰途松島，宝妻を訪ひ別を告て帰る。松島は今夕香港に，宝妻は漢口に赴くを以てなり。青木喬に復書す。

八月八日 晴。日曜日。午後佐々布来訪，之を留めて晩食す。井野春毅，並に其弟衛藤龜吉来訪。

八月九日 晴。熊本板井康男，田畑新平に致書し瓜種を郵送す。外に軍令部に上海指南一冊を送る。岳翁，平井徳蔵，河口介男，松島宗衛，荒木七十郎，尚武会の信至る。荒木より四，五，六，三ヶ月の利息を送り来る。荒木に復書す。微雨一次。佐々布来訪。

八月十日 半晴雨意，熱甚。午後中島為喜来訪。夜更大雨。

八月十一日 陰。午前角田隆郎来訪，十二時去る。安達謙蔵，高島醇，野満，亀雄，内田友義，賀来某の信至る。海軍吉田中佐に致書す。夜角田を訪ふ，在らず。篠崎を訪ひ，十時帰る。夜雨。

八月十二日 陰，夜微雨。午後河野を訪ふ。角田在焉。談話時を移て帰る。

八月十三日 陰，微雨霎時。是日より上海杭州間汽車全通す。上妻博路，野満四郎に復書す。夜河野，石橋藤次郎，井手友来訪。夜風雨。

八月十四日 晴。海軍吉田中佐の信，並に井上雅二，隆文館，古閑信夫の信至る。神崎正助，汪康年，姚文藻に致書す。夜謡曲を学び終はりて尚武会の柔道を観んとす。時後れたるを以て果さず。

八月十五日 晴，秋意頓に催す。日曜。佐々布，中島為喜を留め晩餐す。井手，島田来訪。夜謡曲月並会に出席，十一時帰る。秦長三郎より土誼を贈り来る。

八月十六日 晴。軍令部吉田中佐，軍艦音羽伊集院参謀に致書す。福岡荒木に金二百円を郵送す。帰途永瀧，島田を訪ひ正午帰る。上妻，三島真吾の信至る。三島に復書す。

八月十七日 晴。午前清子を伴ひ井野の処に至り齒の治療を受けしむ。村上を一訪して帰る。汪康年の信至る。午時山ノ井来訪。午後平井徳蔵来訪，本日満洲より帰来せりと云ふ。夜堀夫婦来談。

八月十八日 陰。午前井野に至り齒療を為す。夜謡曲に出席。是日秦長三郎を訪ふ。

八月十九日 微雨。午前平井を訪ひ，去て郵便局に至り宇土に金四円を送り盆会香華の資と為す。井野に至り村上と小談。河野を訪ひ白岩に香典を送ることを托して帰る。白岩の母堂逝去せしを以てなり。白岩，西本，西村，原田棟，吉田豊喜，岡田徳好，岡幸七郎，工藤常三郎等の信至る。夜佐々布

来訪。

八月二十日 晴。波多博，河口介男の信至る。午前齒の療治を受く。夜蘇州路火有り，行て大東を訪ふ。

八月二十一日 晴。岡幸七郎，西本省三，岡田徳好，白岩龍平，安村介一に復書す。海軍々令部に報告を發す。午前姚文藻来訪，晌午蘇州に帰る。午後郵便を發し，去て井野に至り齒療を為し，帰途河野，井手を訪ひ帰る。夜佐々木来訪。亀雄，野満の信至る。

八月二十二日 晴。是日陰曆乞巧の節にて，先妣の忌辰たり。時物を供し祭を致す。午後秦長三郎，井野春毅，篠崎都香佐，汪康年，中島為喜等来訪。夜家族と堀を訪ふ。雨。

八月二十三日 晴。午後理髮。帰途北畠玄瀛を本願寺に訪ふ。夜雨。

八月二十四日 晴。海軍吉田中佐に致書す。山田珠一三角よりの信，米原繁蔵日奈久より，田中清司熊本よりの信至る。米原は富田林中学より頃日山鹿中学校長に転任せし者なり。午後中畑栄，浮田郷次を訪ひ，五時半帰る。

八月二十五日 晴。朝平井徳蔵来訪。午前汪康年を静安寺路に訪ひ，正午帰る。山田珠一，米原繁蔵に復書し，海軍に報告を發す。井手三郎に復書す。野満，赤松の信，並に白岩，亀井陸郎，池田寅次郎，外一名の連名端書至る。夜謡曲研究会に出席。

八月二十六日 晴，晩雨。齒痛，井野に至り治療を受く。佐原来訪。

八月二十七日 晴，晡時雷雨。午前齒療を受く。天野恭太郎，中島為喜を訪，正午帰る。夜島田宅を訪ふ。

八月二十八日 晴，午後大雨。午前歯科医に抵り，帰途河野を訪ひ帰る。早朝天野を春日丸に送り，軍令部，山根虎之助に致書す。佐原来訪。井手友を訪ふ。佐々布来る，游泳会招待券を贈る。吉田中佐，宇野海作，西田善蔵，阿南鎮民の信至る。香港松島宗衛の信至る。

八月二十九日 晴。日曜。佐々木来訪。夜游泳会を觀，十一時帰る。是日午後二時海軍大臣洵貝勒一行来着。

八月三十日 晴。歯科医に至る。午後基督教青年会員堀某来り講話を請ふ，之を辞す。夜家族と浮田夫人の病を問ひ，帰途宮尾，小幡，阿部，島田儀市を歴訪して帰る。是夜陰曆七月十五日に当り月色極朗。狄の信至る。澎湖島伊集院俊の信至る。

八月三十一日 陰。海軍に報告を發し，西本，野満に致書す。領事を訪ひ小談，去て井野に至り，晌午帰る。午後雷雨。夜井手友喜を訪ふ。

九月一日 微雨。午前天津山根，熊本荒木に致書す。荒木には日本性〔ママ〕命保險会社に払込を依頼す。井野に抵り，帰途中島を東和に訪ひ，正午帰る。漢口隈元，有安，朝鮮葉室，大連阿南に復書す。海軍々令部の信，並に伊集院参謀，杉尾，田畑の信至る。是日籌弁海軍大臣載洵，薩鎮氷の一行軍艦海圻号にて象山，舟山等の地を経て広東に至り約一ヶ月の後帰来，更に江陰砲台，南京，漢陽鉄廠を巡視して北京に帰り，然る後日本を経て欧米行の途に上ると云ふ。

九月二日 晴。朝井野に抵り，帰途河野を訪ひ三井に払込むべき火災保險金を托して帰る。上妻の信至る。

九月三日 雨。午前井野に抵り，帰途狄を訪ふ。夜佐々布，佐々木来訪。

九月四日 大雨。午前井野に抵り，帰途領事館に至り，十一時帰る。佐原来訪。海軍々令部に南北清旅行日程を送り，外に安村，伊集院に復書す。東京西田善蔵，波多博，奉天赤松慶太に復書す。安達謙蔵，名和少将の信至る。名和氏より暗号電碼を送来。

九月五日 晴。日曜。安達，野満，亀雄，名和少将に復書す。香港赤松宗衛，大連森茂に復書す。高島醇来訪。昨日帰来せりと云ふ。其巖君の信を携へ来る。是日雷鳴電撃天地晦冥，大雨注ぐが如く，白日燈火を点ずるに至る。

九月六日 晴。午前井野に抵り，帰途領事，平井，篠崎等を訪ひ，正午帰る。南京井原真澄に致書す。

東洋協会門田正経に致書す。京都土屋員安致書。夜内人と澤本、篠崎を訪ふ。島田儀一夫婦来訪せりと云ふ。

九月七日 晴、熱甚。朝上野貞正来訪、一昨日来着せりと云ふ。午前領事館、郵船会社、井野、村上に抵り、正午帰る。佐原篤介来訪。午後三時軍艦明石に至り鈴木艦長、並に船越参謀を訪ひ寛談、五時半帰る。村山正隆、森茂の信至る。夜大雨。佐藤喜平治来訪。

九月八日 晴、秋涼頓に催す。午後井野に抵り、去て郵船碼頭に根津一を迎ふ。同文書院の新学生八十余名来着。六時帰る。七時半倶楽部の謡研究会に出席、十一時半帰る。軍令部に致書す。

九月九日 晴。波多、井手、西本、那須、阪口、加来等の信至る。

九月十日 陰、微雨。午後軍艦音羽に至り秋山艦長を訪ひ、五時帰る。夜澤村来訪、銀十元を付す。

九月十一日 晴。午前白岩龍平、勝木恒喜等を春日丸に迎へ、正午帰る。本田選の信至る。午後佐々木来訪、蘇州に転任すと云ふ。晩永瀧領事の留別宴に新太和館に赴く。来客日清人を合せ百余人。十時帰る。

九月十二日 晴。午前中島為喜来訪。午後澤本、白岩、河野、加来等来訪。晩永瀧領事の送別会に倶楽部に出席し、八時帰る。是日午後根津一來訪。

九月十三日 晴。朝浮田来訪。正午龐元濟、狄葆賢の招宴に牛莊路龐公館に赴く。永瀧を主賓とし、赤塚正助、三穂、浮田、中畑、佐原、外清人三名なり。膳羞極て豊。三時散ず。同文書院に至り根津一を訪ひ小談。福岡、上野、青木に名刺を留めて帰る。夜河野仲之助来訪。

九月十四日 陰。海軍に致書す。載洵貝勒、薩鎮冰の一行本日朝南清より帰着。十時永瀧領事の帰朝を春日丸に送る。午後澤本を訪ふ。漢口隈元喜助、相良利吉の信至る。

九月十五日 陰。午前井手三郎を迎ふ。午後井手を訪ひ寛談。葉室、野満、岡田徳好、井上雅二の信至る。夜佐々布来訪。

九月十六日 晴。福州木村丑徳、本田佐八の信至る。午後井手来訪。

九月十七日 晴。午前正金に至り預金を受取り、郵便局に赴き岡田徳好、松倉善家に致書す。午後同文書院和田連次郎来訪、銀一千元を交付す。池部政次、波多博の信至る。夜澤本来訪。

九月十八日 陰。午前理髮。杭州池部に復書す。午後三穂五郎夫婦、浮田郷次来訪。熊本県同文書院新入生佐藤逸人、佐々木徳信、中島止水の三人、並に高島、水上、有働等来訪。五時白岩の招邀に新六三亭に赴く。同座は井手、佐原、河野、根津、御幡、及余の主客七人なり。十時散ず。東京伊集院俊、安村介一の信至る。

九月十九日 陰。午前平井徳蔵、中畑栄、青木喬来訪。正午佐原の北清行を税関馬頭に送る。午後平井、島田を訪ふ。是日神崎正助、阿部一毛来訪。夜佐々布来訪。

九月二十日 晴。朝秋野医院を訪ひ、帰途井手と小談。井原真澄、不破昌材、根津一の信至る。根津明夕豊陽館に招飲。天津山根に石川伍一の事略を作り郵送す。夜井手三郎来訪。

九月二十一日 晴。朝神崎正助を訪ひ小談、帰る。海軍々令部より北清行の旅費三百円を送り来る。外に沿岸紀要、交通 を送来す。井手来訪、六時根津の招饗に豊陽館に赴く。同座は井手、白岩、及余の四人なり。十時辞帰。中島、佐々布、高島来訪。

九月二十二日 雨。島田来訪。東京野満四郎の信至る。夜倶楽部に至る。

九月二十三日 雨。有安の信至る。午後領事館に至る。大雨如注、衣袂皆沾ふ。上海日報社に小憩して帰る。午前安河内弘来訪。

九月二十四日 晴雨無定。午後宮阪九郎、前島次郎来訪。軍令部岩村副官に旅費領収証を発し、外に名和少将に返信を發す。夜宮坂を送る。森茂、阿南、村山正隆の信至る。有安の信至る。

九月二十五日 快晴、秋意頓に催す。午前平井来訪。午後作新社、大倉に至り、帰途提鞆、帽子を購ふ。橋三郎、河野久来訪。杭州小泉土之丞の信至る。



九月二十六日 晴。井手来別。正午出て井手の北清行を送る。吉永清市、佐々木学生来訪。晩松岡洋右を上海車站に迎ふ。己に前次の汽車にて来着せりと云ふ。

九月二十七日 晴。杭州池部、岡田、小泉に復書す。杭州岡田徳好来訪。軍令部吉田中佐に致書。

九月二十八日 微雨。午前白岩龍平夫婦来訪。東京野満四郎に復書し、亀井英三郎に添書を与ふ。

九月二十九日 陰。午前郵便局に至り小包を受取り、大連森茂に致書し、領事館に松岡洋右を訪ひ、十二時帰る。午後寺垣司令官、伊集院参謀を春日丸に迎ふ。澤村、上村来訪。上村は北京より来り陸路安南に赴く者、旅費若干を与へ衣服一枚を給す。明日より杭州に赴き錢塘八月の潮を觀とす。夜行李を收拾す。杭州池部の電報、東京松岡千壽の信至る。

九月三十日 陰。早起七時前家族同伴馬車にて高昌廟車站に至り、八時半杭州行の汽車に乗ず。一等室満員の為め食堂に坐を占む。沿道の車站中江浙兩省交界の楓涇駅は今正に造作中にして他日完成の上は壯觀を呈すべし。嘉興を経て硤石駅を過ぐ。左側小山の上七層の塔有り。長安駅より海寧州に至る、我二里に過ぎずと云ふ。笕橋の附近に大規模の兵營を建設しつつあり。二時半良山門に達す。岡田徳好来り迎ふ。直に拱宸橋行の汽車に換坐し三時達す。徒歩岡田の寓に投ず。少焉池部政次、小泉土之丞来訪。五時大東局に鳶兵太郎を訪ひ、税関前にて船に乗ず。石原警部来りて船を同ふす。本日を以て帰朝の途に就く者なり。大東の小汽船に拖かれ船中にて池部夫婦、岡田夫婦、並に石原等と會食し、十一時石門に至り汽船と別る。石原亦別を叙して去る。此より小河を下り午前三時王橋の下に達す。石門より此に至る二十余里。

十月一日 詰朝微雨。船中にて朝食し、午前十時小舸を賃し王橋を發し、祁王廟を経て海寧州の南水門に達す。王橋より此に至る二十里、是より上陸、州城の南門を入り東門を出で觀潮塔の下に至る。錢塘江眼下に在、幅隕約我一里半、此辺一帶の堤上觀潮の土人千万群を為し我一行を囲み觀る。之を払へども去らず。不得已小普陀寺に入り門を掩て小憩し、寺僧に命じ麵を吃して中食に充つ。午後一時潮の來るを報ず、即ち堤上に出て之を望む。江の下流に當りて濤声轟に響き遠雷の如し。少焉江上遙に一道の白線を見る。漸く近くに從て激浪列を排し流を圧して至る。恰も万馬斉駆一時に殺到するが如く、其勢當る可からず。浪頭一たび至るや涼風之に從て生じ、濤声の激する所鞞鞞として雷の如く、天地為に震動するの概有り。堤上の万衆寂として声無く群立して之を凝望せり。浪の始て至る平水より高きこと約二丈、往々にして堤上に及ぶ事有りと云ふ。毎年陰曆八月十七、八の兩日を以て觀潮の好時期とす。潮の將に海寧に至らんとするや小普陀寺に於て鐘を鳴らし之を報じ、又た二、三の壯丁竹杖を以て觀客を制し堤角に近くこと無からしむ。蓋し危険を防ぐなり。城外の堤上觀潮亭有り、好位置を占む。午後二時小普陀を辭し、海寧城内を通過し南門外に出で船に接す。此時觀潮船の城外に泊するもの数百隻、先を争ふ出づ。橋下の水道を過ぐる毎に混雜、名状す可からず。辛ふして州城を遠かり、七時王橋に達し原船に帰る。晩鷄を割き樂坐して食す。十一時石門に達し招商局汽船の通過するを待ち、引かれて杭州に向ふ。夜蚊に苦む。

十月二日 晴。午前十一時拱宸橋に達し大東局に鳶を訪ひ小談。仁信堂岡田の寓に入り中食す。小泉来訪。午後一時轎を賃し池部夫婦、岡田と共に拱宸橋を發し、玉泉を経て靈隱に遊び溪山の間を徜徉し、五時西湖堤に出で寶石山下の領事館に入る。晩池部、岡田等と暢談、西餐の饗有り。

十月三日 晴。是日午前上海に帰らんとす。池部夫婦苦留、更に一日滯留の事に決す。午後一同相携て寶石山に上る。石徑蜿蜒、頂上に保叔塔、並に英国宣教士の別業有り。眺望佳絶西湖を眼下に望み、府城の全景襟帯の下に集り、東錢塘江を隔て遙に浙東の諸山を望む。觀賞時を移して帰る。

十月四日 陰。午前十一時池部に別を叙し領事館を發し、轎を連て清泰門車站に至る。池部、岡田来り送る。十二時十分の汽車に乘し兩氏に別を告げ杭州を發す。午後五時半高昌廟に達す。車夫阿三来り迎ふ。清子は阿三の車にて帰り、余と内人とは斜橋より電車に乘じ、七時北山西路の寓に帰る。佐々布、井手来訪。有安一雄、勝木恒喜、根津一、上妻、藤本親信、莊村秀雄の信、並に伊集院公使二男

の訃に接す。

十月五日 晴。澤村来訪。軍機大臣張之洞昨日逝去の電報至る。

十月六日 晴。午前中島為喜来訪，共に出て旗艦明石に至り寺垣司令官を訪ふ，在らず。伊集院参謀と暢談十二時帰る。午後正金に至り金二百五十円を受取り，帰途作新社，河野を訪ひ，豊陽館に平井を敲き，司令官の処に至り寛談。鈴木明石艦長，伊集院参謀亦至る。六時辞帰。神崎正助二回来訪せりと云ふ。

十月七日 晴。伊集院公使に其二男を唁す。郵便局に至り海軍軍令部よりの旅費三百円を受取り，領事館に松岡洋右，中畑，浮田等を訪ひ，上海日報社に井手，島田と小談，帰る。夜松岡，三穂，明石，隅田両艦長，伊集院参謀等の招待会に倶楽部に出席す。帰途堀扶桑を訪ひ，十時帰る。

十月八日 晴。神崎正助，嘉来某来訪。午後松岡洋右，中島為喜，澤村，外同文書院学生二名来訪。海軍々令部に報告を發す。

十月九日 晴。早起郵船に至り報告を投函す。朝食，澤本良臣を訪ひ机代金十七円を交す。帰途中島を訪ひ小談，帰る。杭州池部，岡田に致書す。西本省三，井手友喜来訪。西本は本日来着せりと云ふ。熊本荒木七十郎に致す保険金払込を依嘱す。午後寺垣司令官，伊集院参謀来訪。安河内来訪。七，八，九，三ヶ月分利息百三十八円を送り来る。松倉，上村八次郎，亀雄の信至る。夜西本を井手宅に訪ふ。

十月十日 晴。午前八時半日清汽船の小蒸汽にて白岩，河野，井手友と軍艦隅田，宇治，音羽，明石を訪ひ各艦長，司令官に面し，正午帰る。留守中松井石根，平井徳蔵，本田佐八等来訪。本田よりは北清旅行中需むる所の仏像一体を贈る。午後松井大尉，加藤駒治，白岩龍平を東和洋行に訪ひ，六時帰る。

十月十一日 微雨。朝神崎正助来り雉子一羽を贈る。昨日平湖にて獵獲せし者に係はると云ふ。上村八次郎来訪。同文書院佐藤喜平治来訪。四時出て平井徳蔵を訪ひ，五時白岩の招宴に新六三亭に赴く。会する者寺垣第三艦隊司令官，松岡領事，松井大尉，河野久太郎，神崎正助，中島為喜，阿部一毛，及余なり。十時半散ず。

十月十二日 雨。同文。

十月十三日 晴天。大連森，阿南，北京高宮，波多に北游の事を報ず。午後第三艦隊参謀安村介一を豊陽館に訪ふ，本日来着せる者なり。平井と小談，帰途篠崎を訪ひ帰る。西本省三来訪。安村少佐来訪。佐々木，並に永瀧，大谷連名の信片至る。

十月十四日 快晴。岳翁，河口，池部雀彦，北京増田，上野，漢口岡に発信す。海軍々令部に発信す。午後領事館に至り松岡，浮田列を訪ひ，帰途上海日報社に井手，島田を訪ひ，郵船会社にて大連行の船票を購ふ。代四十元。晩河野久来訪。鈴木大佐，伊集院等を豊陽館に訪ひ，帰途白岩を敲き，十時帰る。澤村雅夫，土屋員安の信至る。

十月十五日 晴。朝井野来訪。平井徳蔵来訪。午後明石艦長，鈴木貫太郎，伊集院参謀，陸軍大尉松井石根来訪。同文書院学友会近池利勝来訪，端艇修理寄附金を求む。銀十円を寄附す。大連森茂，東京石橋藤次郎，杭州岡田徳好の信至る。岡田より巖子陵釣台の題詩石刻，並に外一枚を贈る。明日より満洲より北京一帯の地に遊ばんとす。行李を收拾す。夜佐々布来訪。

十月十六日 神戸丸にて大連に航し十八日着，大連，旅順，奉天，鉄嶺，蘇家屯，營口，天津，北京，保定等の各地を経，京漢鉄道にて漢口に下り長江に浮で，十一月三十日上海に帰る。此間日数四十六日間の日記は別冊北清游紀に詳かなれば茲に之を省略す。

十二月一日 晴。午前副島八十六来訪，大隈伯著す所の開国五十年史八部を贈る。十時軍艦明石に至り寺垣司令官，真田艦長，安村，船越両参謀に面し，正午帰る。帰途白岩の招邀に新六三亭に赴く。同

- 座は平井徳蔵，小泉土之丞，小幡恭三等なり。二時散ず。領事館に至り館員全部を訪ひ，四時上海日報社に井手，島田列を訪て帰る。加藤少佐，吉永来訪。
- 十二月二日 快晴。午前井野春毅，平井徳蔵，小泉土之丞等来訪。午後出て西京丸に至り小泉を送る。税関長として間島に赴任する者なり。帰途郵便局に至り，四時帰る。晩平井，加藤招饗に内人と共に新六三亭に赴く。不破，武田寧の信至る。夕刻参謀船越隆義来訪。海軍大学入学の為め明日軍艦明石に便乗帰国すと云ふ。八時平井，加藤両少佐の招宴より帰る。
- 十二月三日 快晴。正午豊陽館に至り，加藤少佐と共に電車楊樹浦に至り，舳板にて軍艦明石に至り平井少佐，船越大尉の帰朝を送り，更に旗艦須磨に赴き寺垣司令官，竹内艦長，山内副長等に面し，三時帰る。郵便局に至り軍令部よりの送金を受取り，上海日報社，原諠太郎，中島為喜等を訪ひ帰る。白岩来訪せりと云ふ。夜篠崎，川本来訪。
- 十二月四日 快晴。午前郵便局に至り預金其他の手数を為し，帰途領事館に松岡，東和に白岩，副島，吉原等を訪て帰る。熊本河口介男に致書す。午後秦，河野，今井等を訪ひ，五時汪康年を敲く，在らず。松岡洋右の招宴に其官邸に臨む。洋饌の饗有り。同座は寺垣中将，寺内須磨艦長，安村，加藤両少佐，藤瀬政次郎，伊東米次郎，鈴木島吉，浮田郷次，三穂五郎，上野貞正，神崎正助，阿部一毛，河野久太郎，大原信，荻野元太郎，及予の十六人なり。十二時散ず。
- 十二月五日 快晴。日曜。午前中島為喜，吉永，島田数雄，葛城等来訪。正午白岩龍平来る，共に出て辰虹園に至り副島八十六紹介の宴を幹旋す。来会者は狄平，狄南士，張虎臣，中島為喜，松岡辰次郎，汪道炳（惺盞）等にして，三時散ず。
- 十二月六日 晴。北京川島浪速，漢口岡，宝妻，角田に致書す。井手友，山ノ井，鈴木房夫来訪。午後郵便局に至る。寺垣司令官，並に三菱松木よりの案内状至る。之に復す。晩白岩夫婦を招き晚餐を共にす。九時出て副島八十六，原諠太郎等の帰国を送る。
- 十二月七日 陰。午前狄葆賢来訪，時報館との合同を更に一年間展期す。本田選，江尻邦真，野満四郎，田中清司の信至る。北京増田中佐，小森，本荘両少佐，小林吉人，實相寺貞彦に致書す。七時三菱松木鼎三郎の招宴に六三亭に出席す。新任上海支店長三谷一二を紹介する為なり。来客二十余人。九時散ず。
- 十二月八日 雨。頭痛，終日在家。中島為喜来訪。
- 十二月九日 雨。水野梅暁来訪。牛島，深水，杉原，山根，上野岩太郎，森茂，川口，阿南等に発信す。西本省三，岡田徳好来訪。
- 十二月十日 雨。天津小幡領事，三浦喜傳，北京豊島，呉，神田，石川等に致書す。午前新任上海領事有吉明を訪ひ，十一時半軍艦須磨の迎艇にて旗艦に至り，司令官寺垣中将の午餐会に臨む。同席は有吉領事，松岡書記官，伊東，藤瀬，三谷，白岩，水野梅，竹内艦長，加藤，安村両少佐，及余なり。二時散ず。帰途水野梅暁を訪ひ，松崎鶴雄に面す。同県人に基督教の牧師なり。晩岡田徳好，近藤弘造を招き晚餐を共にす。七時倶楽部の送迎会に出席す。松木鼎三郎を送り三谷一二，竹内艦長，山内副長，加藤少佐を迎ふる為なり。九時散ず。井手友を拉して帰り，岡田，近藤等と談じ，十一時散ず。
- 十二月十一日 雨。午後水野，松崎，松井少佐来訪。夜井手を訪ふ。福州高洲太郎の信至る。
- 十二月十二日 晴。朝松木の帰国を送り，帰途秦長三郎の処に小談，棋盤街に至り筆墨を購ひ，正午帰る。午後安河内来訪。三時東和に至り松井を訪ふ，在らず。加藤駒次に抵り小談帰る。本荘徳太郎，青柳六輔来訪。
- 十二月十三日 晴。海軍軍令部に北京政況を報告す。外に本田選並に岳翁に致書す。帰途理髮，五時帰る。夜白岩龍平，中島為喜来訪。北京波多博の信至る。
- 十二月十四日 晴。稻生，加藤駒次，村田省三の帰国を送り，正午帰る。午後加藤少佐来訪。保定岡政樹の信至る。

十二月十五日 晴。鉄峯森田領事，森岡，内田，権太，北村，伊東，吉野，金守に発信す。午前六時より井手友喜と西郊に猟し小鳥八羽を獲，四時帰る。隈元喜助，前島真，伊勢田隆の信至る。

十二月十六日 半晴。相良利吉，小泉市太郎に致書す。午前加藤少佐来訪。海軍より一二三月分手当五百五十円を送り来る。軍令部吉田中佐，河口介男，岡田徳好の信至る。北京増田中佐に致書し，並に軍令部に金子領収証を送る。六時六三亭の小集に赴く。松岡洋右，白岩龍平の帰国を送り有吉新任領事を迎ふる為なり。会者松井石根，中島為喜，井手友喜，河野久太郎，神崎正助，阿部一毛，加藤壯太郎，浮田郷次，並に有吉，白岩，松岡の三人なり。十一時散ず。

十二月十七日 晴。七時松井石根の江浙内地に旅行するを停車場に送る。午前郵便局に至り福岡荒木に金五百円を送り，並に軍令部よりの送金五百五十円を受取て帰る。池部雀彦来訪，留て中食す。午後安河内来前借の金二百元を返す。夜白岩を訪ふ。

十二月十八日 晴。午後二時白岩龍平の帰国を送る。晚滬上青年会幹部の晩餐会に新六三に臨み，七時より倶楽部に至り青年会員其他七十余名に対し北京政況の講話を為し，十一時帰る。井手三郎今夕内地より帰来せりと云ふ。

十二月十九日 晴。朝井手を訪ふ。十一時近藤弘造来訪。正午より井手友，小笠原と江湾に猟し鳩一，小鳥三を獲，六時帰る。井手宅に至り晩餐す。是日石黒昌明，上野貞正，和田連次郎，阿部一毛夫婦来訪せりと云ふ。

十二月二十日 陰。寺垣司令官に北京政況報告を贈る。北京増田中佐に小包にて小児洋服，写真，其他を郵送し，外に書信を發す。熊本河口介男に金十四円半を送る。森茂，本田選，深水十八に家族の写真を郵寄す。帰途浮田，加藤を訪ひ，五時帰る。保定岡正樹の信片，並に波多博より写真を送り来る。夜内人と松尾相義，阿部一毛を訪ひ，十時帰る。井手来訪せりと云ふ。

十二月二十一日 晴。井手三郎来訪。上妻博之の信至る。晚新旧領事送迎会に倶楽部に出席す。九時帰る。

十二月二十二日 快晴。午後近藤弘造，池部雀彦を訪ひ，蘇州佐々木，高田に致書，二十四日より蘇州に出猟の事を報ず。夜上海各支店長の催に係はる忘年会兼新旧領事送迎会に六三亭に出席す。寺垣司令官，須磨艦長，新旧領事，以下二十余人。九時帰る。途中北畠玄瀛を訪ふ。柳原，上妻の信至る。

十二月二十三日 晴。平井徳蔵，石橋藤次郎の信至る。午前加藤，桂兩少佐を訪ひ，正午帰る。石橋より北海道の鮭の子を送り来る。加藤少佐夫婦，浮田夫婦，井手兄弟を招き支那料理を饗す。

十二月二十四日 陰。是日午後一時の汽車にて蘇州に出猟せんとす。正午中食，汽車に乗り二時半蘇州着，佐々木武蔵来迎。上車二馬路日清汽船舎宅に至る。夜領事館に大賀事務代理を訪ひ，松井少佐石根に会し小飲。松井は本日浙江より来着せし者なり。高田九郎，福本等と談じ，八時半高田と共に上船，十一時半上方山下の猟区に達し船を泊す。是夜陰月十一月十四日に当り月明如昼，上方七子之諸山依約眠るが如し。十二時半就寝。

十二月二十五日 快晴，寒気極厳。午前五時起床朝食を用ひ，六時上陸。嚴霜如雪。朝河辺の墓地に鳩を待ち，獲る所無し。八時上方山の松林に入り二羽を獲，午後五羽を獲，五時船に帰り，船を石湖に出し月明に乗じて鴨を打たんとし，獲る所無し。是日大賀，松井，佐々木，蘇州より来着。

十二月二十六日 快晴。午前六時上陸。正午迄に一羽を獲，午後河辺の柏林に於て鳩七羽，小鳥三羽を獲，五時船に帰る。晩食後錨を抜で蘇州に向ふ。月色高潔。此行余の獲る所鳩十五羽，小鳥三羽なり。八時蘇州二馬路に達し上陸，日清舎宅に投じ入浴。高田，福本，佐々木と談じ十二時就寝。

十二月二十七日 陰。午前八時寓を出で八時三十分の汽車に乗り，十二時上海に着す。午後寺垣司令官，竹内須磨艦長，安村參謀，桂伏見艦長来訪。同文書院阪口，堀内二生，並に澤村幸夫来訪。伊東小三郎，稲生，石橋藤次郎の信至る。

十二月二十八日 陰。午前松岡洋右，鷹見五郎の帰国を送り，帰途上野貞正と豊陽館加藤壯太郎の処に

中食し、三時帰る。吉野利喜馬、黒川徳次の信至る。晩井手の招宴に杏花楼に赴き、九時帰る。井手来談。

十二月二十九日 陰。寺田の為に香港船津、広東瀬川両領事、並に高道竹雄、大瀧八郎に添書を与ふ。鉄峯森岡正平、本田選、内田友義に致書す。伊東小三郎、吉野利喜馬、黒川徳次の年賀に答ふ。晩寺垣南清艦隊司令官、須磨艦長竹内中佐、桂伏見艦長、安村参謀を邀へ晚餐す。西本省三来談。午後加藤少佐、澤村来訪。

十二月三十日 陰。終日在家。河野久太郎、鷺鳥一隻を贈来。

十二月三十一日 風雨。河口介男、吉田増次郎の信至る。今井邦三よりジヤムを贈り来る。保定田岡正樹の信至る。

明治四十二年十月十六日起

北清遊紀

十月十六日 晴。是日啓程北游を賦せんとす。朝島田数雄来訪。十時半家を出で招商局中棧に至り大連行の神戸丸に搭ず。井手友喜、西本省三、島田数雄、宮崎信夫、岡、稻生、北島玄瀛、白岩龍平、河野久太郎、神崎正助、福岡禄太郎、中島為喜、松尾相義、松井石根、高平、平井徳蔵、秦長三郎、加藤駒治、井野春毅、浮田郷次、川本静夫、島田儀一、澤村幸夫、今井邦三、篠田宗平、安河内弘、佐々布質直、並に高島、甲斐、本田、佐藤等三十余人来りて行を送る。正午開船。軍艦明石の前を過ぐる時寺垣司令官、真田艦長、安村、船越両参謀、甲板上に出で頻りに帽を振りて行を送らる。午後一時中餐。同船の一等客は外国人四、五名のみ。呉淞口外に至れば清国砲艦大小十六隻水道の両側に排列するを見る。午後二時半筑後丸を趕過す。鈴木明石艦長、伊集院中佐等此船に附して帰朝の途に就けり。凝望すれども見へず。三時半茶を用ゆ。傍晚波浪頗高。食堂に出つる能はず、室内に在り点心少量を吃せしのみ。

十月十七日 陰。海上。

十月十八日 雨。午前七時船已に三山島の前を過ぎ、九時大連棧橋に達す。川口市之助、半澤、小谷節夫、高筒信重、阿南鎮民、芹澤、伊場野、岩橋、山田純三郎、森茂氏等来り迎ふ。棧橋の待合に小憩し森氏と馬車を同ふし伏見台の森公館に投ず。道路泥濘、車輪を没し行走頗る難む。小谷と中食を共にす。奉天中島真雄、井深彦三郎、鉄嶺森岡正平、本田選、内田友義、長春守田利遠、営口深水十八、上海留守宅に発信す。夜山田純三郎、阿南鎮民、川口市之助、牛島吉郎、重松 来訪。晚餐を共にし十時入浴。主人と旧話時を移し寝に就く。山田は奉天より、牛島は牛莊より商用の為に此地に来れる者なり。是日午後二時伊藤公来着。

大連在留内地人約二万六千、外国人は三十名内外にして、領事館は英、米、露の三ヶ国なり。

十月十九日 晴。朝小谷節夫来訪、大連案内、旅行案内の二小冊子を贈る。九時馬車を共にして出づ。市上柳原又熊の来訪に会す。三人更に車を同ふし西公園より繁華の市街を過ぎ北公園を巡覧す。日露戦役前此地を遊覧せし時は露国の士女結伴徜徉、満園熱鬧の觀有りしが、今日来游露人の隻影を留めず、今昔の感に堪へず。川崎造船所事務所、並に工場を一覧し、技師長市原敬三に面し、去て大谷高寛を水産事務所に訪ひ小談。途中小谷と別れ愛宕船柳原の寓に至る。山田九郎、山ノ井格太郎来訪。中餐の饗を受け、午後立花政樹を税務司公館に訪ふ。佐原篤介在焉。少焉森茂亦至る。午後六時同文書院出身者の招待に奥町会英楼に赴き支那料理の饗を受く。会者森、野村潔巳、川口、阿南、高筒、半澤、松本、竹島、石川、芹澤、中曾根、松尾、重松、小谷、世良、岡崎、菅野、石射、天海、坂本、中田等の同文書院連と牛島、佐原、原口聞一、及余の二十五人なり。新を談じ旧を話し十時散ず。余は佐原、牛島と深水十八を遼東ホテルに訪ひ小談。深水は本日営口より来着せる者也。牛島は余を送

て伏見台の森氏に來り小談、即ち去る。

十月二十日 快晴。大谷、深水、阿南、並に東洋協會學校卒業生阿部政十來訪。午前十時森氏と出て中央試験所に至り所長藥學博士慶松勝左工門を訪ひ、其の説明にて工場を巡覽し、工芸品、並に鉍石其他の陳列品を觀る。現に荳油を用て石鹼を製し、或は豆粕にて醬油を醸造しつつ有り。其柞蚕糸の精製の如き光沢、純白絹糸に譲らず。本年長浜に送りて縮緬を送らしめ製して衣裳と為し、日英博覽會に出品の計画中なりと云ふ。柞蚕繭一個の価時価一厘五毛にして、遼東に於ける一年の産額四百万円に上ると云ふ。鉍石は金、銅、鉄、鉛、雲母等にして安奉線の沿邊に尤も多く、本溪湖の鉄、金、銅、鉄峯の沙金等見る可き者少なからず。金の含蓄は一万分の一の者有り。十一時辞出。森氏と南滿鐵道本社に至り庶務課長沼田政治郎、調査課宮内季子を訪ひ小談。滿洲日々新聞社に伊藤武一郎、外一人を訪ひ、上車柳原を訪ひ、直に馬車を驅て老虎灘の水産組合関水神社祭典を觀る。黒川某、高柳少佐、石本貫太郎等に邂逅す。大谷高寛接待懇到、模擬店に入り牛乳、蕎麥、薩摩汁等を吃し、大谷を辞し老虎灘山上に登り展望、海湾東南に開け風致頗佳。只だ浜海皆童山にして樹木無し。東側の諸山皆要塞地帯に属す。是日大連在住の士女神社に參拜するもの道路相接踵す。角力の奉納等有り、頗る雜踏を極む。此地大連より約二里許、道の兩側山稜起伏、風景の見るべき者有り。老虎灘に水産試験所、並に新設の漁村十五戸、小学校一所、管理所一、酒保一所有り。此中熊本漁民五戸有り。小学生徒十六人、関水神社の神官、教師を兼任せり。関東州の漁区は皮子窩より金州灣と旅順、大連を包含し、漁船總計二百三十隻、漁民は熊本最も多く、之に次を愛媛とす。熊本の漁船約八十隻、人員四百人に達せり。漁業一ヶ年の収入は百万円にして、都督府より年五千円の補助を為せり。午後五時柳原と共に伏見台に歸る。阿南來訪。晚川口、阿南の招邀に森氏と共に西公園内の西園亭に赴く。亭は園中に孤立し閑靜、塵氣に遠かり、境内只鳥声を聞くのみ。卓を圍て寛話、九時辞出。電気公園を一覽し、川口、阿南に分れて歸る。孤燈日誌を作り午前一時就寢。保定田岡、天津山根に致書す。

十月二十一日 快晴。午前六時半寓を出で柳原宅に至り朝食し、柳原、山田九郎と車站に至り旅順行八時の汽車に乗ず。阿南、小谷來送る。深水十八と同車たり。臭水子、營城子等の車站を経て、十時旅順に達す。同文書院出身者有野學、野口覺次來り迎ふ。直に白玉山に上りて頂上の納骨堂を展し表忠塔を見る。高二百十五呎、巍然として天表に聳ゆ。日露戰役の陣亡者を紀念する者なり。塔直径六間許、螺旋梯有り、頂上に登るべし。頂上眸を放てば旅順の全景襟帶の下に在り。眺望時を移して山を下り市に入りて中食す。燒鶉の味極て美。午後一時馬車を賃し小案子山に至り戰役紀念品陳列館を巡覽す。大小砲身の破裂せる者、機関砲身の無数の銃丸を受けて截断せる者、鉄板上千万の彈痕を留むる者、並に擲彈、木造迫撃砲、砲台模型、其他衣帽、劍銃、鍬鎌、鉄条網、食品等戰時用品一概俱全、人をして当年を追懷せしむ。東鷄冠山に上りて砲台爆破の状を見る。屋大の人造石四方に散乱し巨砲炸裂して半身地中に埋る者、砲架の破壊せる者等所在に錯亂し、其状悽絶、当日惡戰苦闘の状を想見するに足れり。此辺一帶滿山斑々大砲の彈痕を留め、其數勝て數ふ可からず。転じて松樹山に至る。破壊の状鷄冠に彷彿たり。而して堡壘の堅牢宛然地中の城郭たり。午後四時車站に歸り茶店に投じて小休。白須直、平井に致書す。五時發車、有野等來送。又深水と同車たり。七時大連に達す。大谷高寛、阿南、小谷等來り迎ふ。深水と馬車を同ふし熊本縣人の招待會に湖月亭に臨む。會する者は陸軍運輸部大連支部長少佐吉澤逸八、要塞司令部大連派出員大尉松田正孝、滿州日々記者伊藤武一郎、都督府技手戸上弥一郎、山田龜喜、高濱素、有馬邊、松井哲夫、下瀬某、大谷高寛、柳原又熊、深水十八、山下稻三郎、黒川徳次等なり。十時辞歸、柳原來り送る。夜松尾生、余の為に特に來り筑前琵琶一曲を彈ず。宮内季子來訪。熊本人花岡伊之助來訪。

旅順在留の内地人現に六千七百人、外国人十名以内、支那人六万許。小学校は第一、第二の二校にして、第一の生徒五百七十名、第二は九十人なり。

関東州の収入總額五百万円にして、内二百万は國庫より補助す。軍事費は此數中に在らず。

大連には中学校一所，小学校第一，第二の二校有り。現に中学生二百人，小学生徒二校を合せ一千七百人有り。昨年四月調査の時は八百四十名に過ぎざりしが，今年は倍数以上に増加せりと云ふ。

大連の新聞紙は金子某の漢字泰東日報，並に満洲日々，遼東新報の三種なり。

十月二十二日 快晴。朝伊藤武，山ノ井来訪。十時出て柳原を訪ふ。山田，大谷来会。中食後大連商業学校に至り河合篤叙を訪ひ校内を一覧す。現在生徒数九十人，教師七人有り。三十九年の創立にして毎月の経費約二百円，学科を本科と別科の二種に分てり。三時大谷，柳原，山田に別れ寓に帰り行李を收拾す。午後六時二十分寓を辞し森氏と馬車を同ふして車站に至る。川口，深水，柳原，阿南，小谷，松尾，松井，黒川，大谷，野村，半澤，高筒，山田，有馬，伊藤，芹澤，菅野，中田，戸上，高濱，外三，四人来り送る。七時開車，別を諸子に告げ大連を發す。十一時瓦房店に達す。停車二十分，車站附近並に沿道一帶往来の人，汽車上下の客十の七，八人は邦人にして，飲食品を売るの清国人皆日本語を用て叫売，毫も日本内地を旅行するに異ならず。

十月二十三日 快晴。黎明立山馬伊屯駅を過ぎ右方首山を望む。日露の役苦戦の地なり。遼陽に至れば天全く明く，太子河を過ぎ東方群山の透邈たるを望む。二十年前遊跡を留むるの処なり。是日秋空如洗，片雲を留めず，心神蘇せんと欲す。蘇家屯に至る。人家十数戸，所在に点在す。此処撫巡線の分岐点たり。車站鈴木島吉に邂逅す。上海に向て帰る者なり。渾河を度り七時四十分奉天車站に達す。中島真雄，中西正樹，山田純三郎，菊地眞二，佐藤，染谷 等来り迎ふ。中西，中島と馬車を同ふし大西門外の盛京時報社に投ず。石川，平山，岡部二郎，北條某，井野彦三郎，速水一孔等来会，中食を共にす。午後速水副領事と領事館に至り，小池総領事を訪ひ名刺を留め，深澤暹の処に小談。速水と再び出て井深彦三郎を大西門内に訪ひ，五時帰る。夜原口聞一來訪。鉄峯本田選，森岡正平の信至る。天津山根，北京川島，上海白岩に五，六名連名にて信片を發す。

十月二十四日 晴。熊本山田，上海留守宅，井手，島田列，森茂，柳原に致書す。午前野村正，富岡来訪。十時半中島，中西，菊池，染谷と馬車に分乗し北陵に向ふ。正午達す。奉天を北に距る約二里許，清の太宗文皇帝の寢陵なり。境域廣大にして老松林を成し，□然市塵に遠かり，幽静山中に在るが如し。廟の内外を徜徉し松下に欒坐して行厨を用ひ，午後四時帰る。深澤暹，橋三郎等来訪せりと云ふ。山田純三郎，坂田長平来訪。六時半島，中西と井深の招邀に赴く。新を談じ旧を話し，十時月を踏で帰る。

十月二十五日 晴。午前領事館に速水，深澤を訪ひ，去て山田純，原口聞一を敲き，十一時中西と出て諮議局議會を傍聴す。出席議員四十余人，傍聴者僅に十余人。議員の多数は容儀野朴にして服装極て粗野，傍聴者亦多くは卑賤の人なり。議長，副議長，書記は上壇に坐を占め，議員の發議者は台上に登り議長席を背にして演説す。議場静肅，一辞を發する者無し。

諮議局議長は前教育会長呉景濂，副会長二人，一は孫百斛，一は袁金愷なり。

午後松本清司来訪。鉄嶺森岡，本田より電話にて余の來期を問ふ。三谷末次郎，藤野君山，横山吏弓，伊津野和尚来訪。午後二時井深仲卿，遠藤々次郎，西宮房次と馬車を駆て奉天車站に至り，更に新奉線の「トロ」に乗じ塔湾西南の丁香屯に至り，舟を艤して小湖に獵す。風大にして舟意の如くならず，一も獲る所無し。六時屯内の一民屋に投宿。坑上に欒坐し蠟を剪りて暢談，詩歌唱和，亦旅中の一快事なり。是日午前十一時伊藤博文氏の一行奉天を發し吟爾賓に向ふ。

十月二十六日 風雪，寒氣頓に加ふ。午前七時半結束。雪を踏で獵区に向ふ。適々井深の旧知支那の獵夫王宝廷なる者馬に騎して来会，長七尺許の偉丈夫なり。湖上風大にして舟進まず。正午屯に帰りて中食し，「トロ」に乗じて奉天に帰り車站に小憩，馬車，鉄道に乗じて時報館の寓に帰る。時四時なり。三谷の信至る。向野堅一來訪。獵装未だ脱せざるに報有り，曰く，昨日此地を發せる伊藤侯爵今朝十時吟爾賓停車場に達し汽車を下り歡迎者の前を通過の際，洋装の一韓国人群衆中より五，六歩を隔て伊藤公の右腹部を矩銃にて射撃し三弾を命中せしめて之を殲せり。随行の田中満鉄理事，森槐

南、川上総領事傷を被けりと云ふ。午後六時同文書院出身者、其他知人の招宴に奉天倶楽部に赴く。余の招待と速水の送別とを兼る者なり。来会者三十八人。山田純、原口等斡旋尽力せり。九時半辞歸。是夜十二時四十分伊藤公の遺骸奉天駅を過ぎて南下せり。総督巡撫以下清国官憲、並に滞留中の英国キッチナー元帥も亦邦人の在留者一同と之を奉天駅に送迎せり。海軍に伊藤公の変を報ず。

満鉄附属地以外奉天の居留民は二千三百人にして戸数六百戸有り。奉天に於ける清国人口は十七万にして戸数三万なりと云ふ。

十月二十七日 快晴。午前五時起床、上車奉天車站に至り、坂田長平と六時二十分の汽車にて撫順千金寨炭坑視察の途に上る。英将キッチナー亦此の時刻を以て奉天を發し安奉線にて韓国に向ふ。七時二十分蘇家屯着。松田満雄汽車中に来訪。松田は戦役以来此地に居住する者なり。九時五分千金寨に達す。推車に乗り炭坑事務所に至り所長松田博士に面し小談。同文書院出身者松島の東道にて千金寨東立坑に至り、燈を携て七百呎の坑道を下り坑内の事務所に至り小憩（事務所は地下三百四十呎の処に在り）。役員某の案内にて坑内を縦横に巡視し採掘の情況を見、正午事務所に歸り松島正吉、横川安三郎兩人より中食の饗を受け、午後再び出て現に開掘中の大山坑、並に貯水池、発電所、旧市街、舎宅街等を巡覽す。松島及び角某東道たり。三時事務所に歸り小憩。横川の先導にて器械工場、製作場等を一覽し、四時辞して車站に至り五時二十分の汽車に乗ず。松島、横川来り送る。是夜天清く月明にして夜色殊に佳なり。六時孤家子を過ぐ。安奉、撫順兩線の交叉点なり。七時五十分奉天に達す。坂田と別れ馬車、鉄道にて時報館に歸る。

#### 撫順炭坑

撫順炭坑なる者は撫順県下千金寨の東立坑、西立坑、大山坑、東郷坑、楊柏坑、老虎台坑等六坑の総称にして、現に採掘中の者は東西兩立坑、楊柏堡坑、老虎台坑の四坑にして大山、東郷の二坑は今正に試掘中にして最新式の設計にて、大山坑の如きは深さ一千〇四十余呎にして未だ炭層に達せず。東郷坑も大山同様の設計にて、将来此の二坑に全力を用ひんとする者の如し。此辺一帶の炭層は三十度の角度にて、厚さ百五十呎延長三里に及び、目下一日の出炭二千噸、大山、東郷二坑の設備完成の暁には毎日五千噸を出すの予定なり。採掘費は一噸に付き二円を要し、現に一噸六円の価格にて販売せり。

従来開平炭の奉天一帯に銷売せしもの一年二万噸内外なりしが、今は撫順炭に圧せられ四千噸に減少せり。満洲全部に於ける巡撫炭の銷路は一年約十五万噸に過ぎず。本溪湖の炭坑は一日の出炭僅に百二十噸にして、多く焦炭コークスの材料に供す。

目下汽車便にて各地に運出せらるゝもの一日一千八百噸に過ぎずと云ふ。炭坑附属用地は百万坪にして経営に要する総予算は八百九十三万九千三百二十九円なり。

撫順の炭量見積約十億万噸にして、百年計画を以て諸般の設備を逐行しつつあり。現在炭坑事務所長は工業博士松田武一郎にして、役員二百五十三人、坑夫日本人七百二十四人、清人六百八十三人、日本坑夫の最高賃金は一日三円にして最低二十三錢、清人最高三円最低二十錢、之を平均すれば日本人一日一円二二錢、清人五十錢なり。

右の外常役夫、常役苦力等日清兩國合せて二千三百七十五人有り。

千金寨に於ける諸般の経営は全美を極め、学校、警察、病院、旅館、劇場、倶楽部、舎宅等の建築堅牢無比にして、其の建築法の如き千差万別、各其の觀向を異にせり。僻陬の一寒村忽ち變じて巖然たる都市と為り、邦人の来りて各種の職業を営む者毫も内地と異ならず。目下此地に在住する者官民合計男二千二百六人、女一千二百二十五人、守備として中隊本部を此地に置けり。

小学校は尋常、高等を合せ男生九十四人、女八十四名有り。

坑区北は渾河を限り、南は千金台山を包み、東は東州河を界し、西は小瓢屯に至る長方形の地勢なり。



千金寨旧市街の西側に新市街の設計を為せり。街の南に千金寨山有り、眺望佳絶なり。此より撫順県に至る約七清里。

清人の手にて千金寨炭坑を侵蝕する為め此を距る十八清里の新屯に開坑せんとせしを以て我より先じて之を開き其の計画を破れり。

十月二十八日 快晴。午前三谷、井深来訪。午後中島、中西と小西門を入り四平街関東公司に至り三谷を訪ひ、帰途小南門内満鉄公所に佐藤少佐を訪ひ名刺を留め、大南門内の総督衙門、大清銀行、皇宮、其他各衙門を巡覧す。督署は宏大なる洋館にて匾して奉天行省公所と謂ふ。帰途井深宅に名刺を留めて帰る。松田満雄来訪、共に出て領事館に速水一孔を訪ひ、深澤暹、橋三郎等と寛談、五時帰寓。松田は蘇家屯に向て去る。井深、中西、中島と会食す。夜山田純三郎来訪、撫順の画葉書を贈る。

満洲に於ける大連、営口、安東、大東溝、大孤山五処の輸出入総額は一億万両にして、戦前は四千万両に過ぎざりしと云ふ。

十月二十九日 快晴。午後小島真雄と小西門にて馬鉄に乗ず。向野堅一、並に昔佐々家の書生たりし桑原某に車中に遇ふ。向野宅に至り小談。出て小学校、病院、新車站、安奉線の起点等を巡視して帰る。以上の建築は皆満鉄の経営に係はり規模甚だ大なり。向野宅に小談。七時速水の帰国を送る。間島副領事に転任する者なり。深澤、橋の東道にて大南門内江南春に晚餐の饗を受く。同座は中島、中西、向野列なり。九時月を踏で帰る。此夕山田夫婦より晚餐の招有りしも先約を以て辞す。

奉天に於ける漢字新聞は中島の盛京時報、並に東三省日報（民政司機関）、奉天醒時白話報の三種と邦字南満日報となり。

城内外の我小学校には生徒合計三百名有り。

橋三郎来訪。内田より電報至る。電話にて鉄峯内田、森田列に明日出発を報ず。深水、白岩、永瀧、増田、山根に致書す。

十月三十日 快晴。正午時報館諸子に別を告げ、中西と向野宅に至り中食の饗を受く。山根立庵の信至る。三時半向野を辞し車站に至り四時鉄嶺行の汽車に乗ず。中島、中西、向野、北悟一、坂田、日高等来送。赤松慶太より満洲各地の画葉書を送り来る。渡辺某と同車たり。北門外線路の右側宏大なる支那兵營有り。中央に練兵場を設け兵舎之を囲み、鱗次相連る。二個師団の兵を容る可し。車中山中寛太郎に邂逅す。七時鉄峯に達す。北村、本田、権太、森岡、末廣、内田等十余人来迎。上車領事館内本田の所に至り小憩。再び車を駆て城外桜町万安樓の請待に臨む。会する者森田領事、伊東正金店長、牧野、森岡、本田、内田、北村、渡邊、吉野、権太、頼富、小林、石崎、穴澤、末廣、木戸、内藤、金守、白山、山中等にして待遇頗る優。十一時散ず。再び金守商店に至り饗を受け、十二時半帰る。

鉄峯県の人口は城内外を合せ三万五千にして我在留民三千人有り。我小学校には百四十の生徒有り。新聞紙は鉄峯新聞と商況日報の二種なり。

大豆の産地は鉄峯以北にして、開原より三十万石、長春より百五十万石、鉄峯より六十万石を出し、鉄道未成前は遼河を下て営口に出でしが、今は多く鉄道に由れり。

鉄峯製粉会社一年十万袋を製出し（一袋四十斤）、米団粉を奉天以南より駆逐せり。

県城の南に龍首山有り。柴河東南を流れ遼河城北を繞り形勝の地なり。

十月三十一日 晴。午前森岡、本田、内田と東門を出で龍首山に上る。眺望佳絶、県城眼下に在り。遼河蜿蜒に西北を流れ柴河東南を練り、風致清淡画中の趣有り。帰途森田領事を訪ふ。芳野来訪。午後四人相伴て西門を出で金二商店、権太、北村、正金伊東を列訪し、四時帰る。中島真雄の電報至る。夜伊東小三郎、頼富、内田、渡邊、森岡等来訪。守田利遠、田鍋安之助、留守宅、深澤、橋、井深、松倉、佐原に致書す。

十一月一日 健晴。緒方、不破に致書す。十時車站に至り中島真雄を迎へ、領事館に至り森田領事を訪

ひ、本田宅にて中食す。森岡、内田同座たり。二時本田を辞し、中島と正金に至り伊東を訪ひ小談。三時車站に至り四時十分の汽車に乗ず。森岡、本田、内田、松宮、小林、森田領事、梅原、伊東、頼富、穴澤等来り送る。六時奉天に至り中島と分袂す。太田助役、菊池、染谷、坂田、山田純等来送。中西正樹来り余を拉して車を下り尚数日の逗留を勧む。余肯ぜず。中西と同車蘇家屯に至る。七時半着、松田満雄来迎、即ち其家に投ず。入浴後三人会食寛談、午前一時に至り寝に就く。

南満鉄道大連長春間四百五十哩（幹線）にして、大連奉天の間二百五十哩の複線有り。支線は大連旅順間の三十七哩、蘇家屯撫順間三十哩、營口大石橋間十六哩にして、一日一哩の収入約五十四、五円にして東海道線と相似たり。

十一月二日 快晴。午前六時中西奉天に向て帰る。之を郊外に送る。正午松田を辞し營口十二時四八分の汽車に乗ず。松田来送。煙台に至る。同文書院出身水谷生来見。午後二時半遼陽を過ぐ。左側に首山堡有り。鞍山站に至る。左方に千山の奇峯を望む。遼東の名山医巫閭と並称せられ乱巖崖崑、其状犬牙の如く秀絶比無し。鞍山店を過ぐれば線路兩山の間に過ぐ。山頂岩骨嵯峨、不生一木。四時十分湯崗子を過ぐ。駅東二十丁温泉有り。黄昏海城に達す。六時二十分大石橋、七時二十分營口着。深水十八、牛島吉郎、上田賢象、三田村源次、若杉要、上杉博路等来迎。馬車にて新市街深水宅に至り投ず。上田、牛島、上妻、若杉、三田村等と会食す。小泉市太郎来訪。

十一月三日 大風雪。深水宅に蟄居して天長節を迎ふ。牛島、上田、上妻、倉田、三田村、田村等来訪。晚有志者の招宴に祇園閣に臨む。会する者岡部、神崎、會田、内田軍医、以下十九人。十一時辞帰。上田、牛島来談。是日上田、深水、牛島、倉田、田村等と撮影す。

十一月四日 晴、寒氣肌を刺す。午前牛島と馬車を賃し小寺油房を觀る。現に一日に豆餅五千枚を製し、豆油二万三千六百斤を出す。豆餅一枚の価一円二十銭と云ふ。使用する所の工夫七十二人有り。正金銀行に杉原泰雄を訪ひ小談、上海に於ける旧知なり。去て正隆銀行を一見し、領事館に領事太田喜平を訪ひ、若杉の処に中食の饗を受けて、俱樂部、病院を一覽し、民団に岡部を訪ひ、西義順油房に倉田を敲き、転じて道台衙門に至り道台周長齡を訪ひ小談。帰途東来醬園に田村を訪ふ。一年の醬油醸造高千二百石に上ると云ふ。帰途神崎商店に名刺を留め、五時帰寓。晚深水と小泉市太郎の招宴に赴く。途中内田鎮一を訪ふ。小泉宅にて宴終はりて後主人紙を出し字を索む。為に三紙を書す。十時帰る。向野堅一奉天より来宿。

十一月五日 晴。朝理髪す。天津山根虎之助に明後日着津の事を報ず。小田原来訪。晚正金銀行杉原の饗宴に深水、牛島と共に赴く。帰途若杉、志水を訪ひ、十一時帰る。

十一月六日 快晴。牛島、深水書を索む。数紙を書す。晚深水余の為に小宴を開き、牛島、上妻、若杉、小泉、田村、松本等を招き会飲。十二時散ず。

營口居留民二千五百人、邦字新聞滿洲新報有り。

商業学校生徒百五十名、日本教師二名。

日本小学校には生徒百二十名有り。

十一月七日 晴。午前九時深水夫婦と馬車を同ふし遼河岸に至り、小汽船にて河北に渡り、十時半の天津行汽車に乗ず。深水夫婦、田村、三田村、小田原、會田、小泉、若杉、上妻、牛島等来送る。土倉五郎と同車たり。天津に至る一等車資二十三元一角半なり。午後二時溝帮子に至り北京行の汽車に換坐す。右方近く十三山の奇峯を望む。砂河を度り、三時半錦州府を過ぐ。七時食堂に入り晚餐す、膳費二元。八時山海関を通過す。雨。

十一月八日 晴。午前四時二十七分天津着。土倉と分袂す。山根立庵暁を侵して遠路来迎、厚意感ず可きなり。車を駆て山根の寓に至る。残月一彎、暁色人に可なり。朝食後天始て明く。山根と芙蓉館に至り投ず。出て入浴す。江原邦彦、森田元次郎、三浦喜傳来訪。午前山根と出て三浦を訪ひ小談。領事館に小幡領事、西吉、並に瀬上を訪ふ。正午三浦の招きにて敷島に至り中食す。山根、瀬上同座た

り。午後瀬上と日本租界を散歩し、北支那毎日社に小田桐勇輔を訪ふて帰る。小幡領事来訪。中島半次郎、山根虎、三浦来談。六時敷島の歓迎会に臨む。小幡領事、矢田副領事、山根、三浦、中島半、江原、真藤、檜田、森田、豊岡、小田桐、瀬上、以下二十余人。九時半散帰す。

天津在留民一千四百人、尋常高等小学校一生徒百人あり。新聞、天津日々新聞、大公報、商報、忠言報、中国報、時間報、中外実報、民興報（以上漢字新聞）、北支那毎日、北清日報（以上邦字新聞）、並に邦人の主幹に係はる西字報チャイナテレビオン有り。

端総督の参謀は徐清阿、並に巡警局坐弁劉景沂（日本留学出身）の二人なり。

十一月九日 陰。午前八時芙蓉館を出て停車場に至る。小田桐、豊岡、三浦、江原、榎本等来送。九時発車、天津新站に至る。中島半次郎来送。正午北京前門着。増田中佐、大河平書記官、波多、上野岩太郎、西田畔一、高宮議、並に實相寺貞彦特に馬車を出して迎接、増田海軍官舎に投ず。上野、小森少佐正鋭、並に大隈伯の開国五十年史を支那大官に頒贈せしが為に滞在中なる副島八十六来訪。午後石川半山、川島浪速来訪。出て伊集院公使、本多書記官、大河平、高尾、西田を列訪す。晚公使より晚餐の案内有り、増田、副島と共に赴き、九時半辞帰。同座は本多、大河平、増田、副島、実相寺、外一人なり。

十一月十日 晴。午前七時同寓の副島八十六漢口に向て出発す。出て小森、上野、豊島、実相寺、呉、本莊、神田列を歴訪す。呉、豊島来訪。午後順天時報社に上野、津田武、高宮、波多を訪ひ、去て石川を敲く、在らず。晚本庄少佐の招宴に赴く。増田、高尾両夫婦、並に時事新報通信員鷺澤與四二同座たり。

十一月十一日 快晴。上野岩太郎来訪。上海留守宅、柳原、山根に致書す。午後安定門内分司庁胡同に川島浪速を訪ひ、四時辞出。帰途高尾を訪ふて帰る。小森、西田来訪。六時上野の招宴に前門外取登胡同同興堂に赴く。支那饌の饗有り。同座は石川半山、鷺澤、神田、津田、高宮、小森吉人、山崎膽、矢野仁一となり。十時半帰る。奉天坂田の信至る。

十一月十二日 晴。牛島、田岡、小田桐の信に接す。牛島より写真を送り来る。中川芳三郎、小森吉人来訪。午後公使、並に西田を訪ふ。晚増田主と為り余の為に宴を設け、豊島、実相寺、呉、上野、西田、大河平、本庄等を招く。歓談十一時に至て散ず。

十一月十三日 晴。終日寓に在り。神田正雄、松本菊熊、山崎膽、高宮議来訪。夜川島、豊島、呉、実相寺、大河平等旧友の招宴に東四牌楼福全館に赴く。九時半帰る。天津山根の信至る。

十一月十四日 晴。午前九時化石橋に至り外務部左丞曹汝霖を訪ふ。邦語を善くす、少壯の俊才なり。順天時報社に至り津田、波多と相伴て西駙馬大街東華学堂に至り小林吉人、矢野仁一を訪ひ小談。小林、津田、波多と西直門外動物園、植物園に至り遊覧す。規模広大、各種の動物皆此に集る。暢観楼を見る。西洋式の建築にして陳設善美、故太后の休息所なり。燕春軒に至り中食す。小林、津田と連名、武田寧、宇野海作に葉書を出す。四時帰寓。再び出て川島宅に至り入浴、晚餐、謡曲一、二番を謡ひ、寛談午前一時に至り遂に川島宅に留宿す。

十一月十五日 快晴。午前九時半馬車川島宅を出て東四牌楼三条胡同に至り陸軍部尚書鉄良を訪ひ、談話時を移し川島宅に帰り中食し、午後二時半再び馬車にて東單牌楼金魚胡同に外務部尚書那桐を訪ふ。俗巧柔儒、其器鉄良に及ばず、会談少時にして帰る。六時半小林吉人の招饗に扶桑館に赴く。同座は増田、上野、津田、高宮、瀬上等なり。十一時散ず。席上津田の韻に和す。高宮亦た贈るに国風一首を以てす。

昔游回首恨還多、心事百年付逝波、絶代銷魂説不尽、青眼対酒發高歌。

十一月十六日 晴。前八時西城細瓦廠に至り郵便部程明超を訪ふ。湖北人にして翰林出身なり。学識有り、少壯政治家中の人物なり。席上程家裡に会す。順天報社に至り津田、高宮と小談。帰途西田畔一、高尾亨を公使館に訪ひ帰る。午後小森、豊島を訪ひ、四時帰る。上海佐原、中島、白岩、神崎、

管口深水、牛島に致書す。晚正金銀行実相寺の招饗に赴く。同座は阿部天津駐屯軍司令官、増田、本庄両中佐、渡辺副官、石丸助役等なり。十一時散ず。

十一月十七日 晴。前八時西单牌楼豊盛胡同に民政部延鴻を訪ふ。謹厚誠実、頗る識見有り。晌午辞して順天報社に至り中食。波多と上車、西直門を出て行二里許、海淀鎮を過ぎ万寿山下の外務部出張所に至り、案内者を雇ひ万寿山を周覧す。皇室の離宮にして前は昆明湖に臨み、右に西山を控え、湖の大西湖の半に及ばずと雖ども水色清冽、毛髮鑑すべし。門を入れば仁寿殿有り、金碧輝煌、結構小ならず。両宮軍機大臣を召見するの処。第二は玉瀾堂にして皇帝燕息の所。第三を楽寿堂と名け、故太后の居室たり。山上の屹立する層楼は仏光閣にして、其後に金碧燦然たる楼屋有り、匾して泉香界と謂ふ。此他大小の楼宇廻廊曲欄点綴、極て雅致有り。園内松柏掩生、翠滴らんと欲す。二時半巡覧終り帰途に就き、四時半順天報社に帰り上野と小談、五時帰寓。北京廿一日会より晚餐の案内、並に本多書記官より十九日の晩食の請帖至る。西直門より海淀に至る道の左側に禁衛軍兵營の基地有り。

十一月十八日 晴。実相寺の案内状至る。午前小森少佐来訪、二十日晩餐の案内有り。保定田岡、漢口岡に二十一日出發を報ず。中食後上車、安定門内後円恩寺胡同に至り禁衛軍第一旅団長良弼を訪ふ。人と為り豁達精悍、議論風発口を絶たず。満洲宗室にして摂政王の信任極て厚く、満人中傑出の才なり。摂政の弟洵、濤の二人、並に毓朗等と結納し、勢力極て大なり。

良曰く、禁衛軍は現に歩兵一聯隊と騎兵一大隊に過ぎず。又曰く、一鎮を編成するには初年に五百万兩の開弁費を要し、次年以下は三百五十万の經常費を要す。

徴兵令は宣統六年より実施の予定。

良と談話時を移し、去て川島を訪ふ、在らず。帰途呉永寿を泰平公司に訪ひ小談、帰る。延鴻不在中来訪せりと云ふ。晚実相寺の招邀に赴く。填鴨の饗有り。同座は法学士杉英三郎、西田耕一の二人のみ。十一時帰る。

十一月十九日 晴。西駙馬大街に至り小林を訪ひ、帰途津田、高宮、波多を順天社に訪ふ。正午同文書院出身西田、中川、波多、小濱、江原等の招宴に前門外大柵欄豊惠堂に赴き支那料理の饗を受く。安藤不二男亦来会。二時半散ず。波多と写真し、帰途本庄を訪ひ、談話時を移て帰る。

北京日本人八百名、支那官府の聘に応じ当地に在る者

法制学堂六人、法律学堂四人、監獄科二人。高等巡警学堂五人、測繪学堂四人、中学実業学堂八人、優級師範一人、五等中学堂一人、総稅務司衙門一人、農事試験所一人

全国三十六鎮の中十六鎮略ぼ成るを告げ、残り二十鎮有り。三十六鎮を完成するに七千万兩を要す。之に要塞費三千万、総計約一億万兩。

海軍費、製艦、軍港等の総費約五億万円。

憲政実施に伴ひ官制改革、其の他興革事業、並に諸般の施設經營に要する者、概計三十億万円。

一鎮の開弁費三百万兩。經常費毎年二百万兩。

旧式兵全体の經費、年千八百万兩。之を裁して新軍經費の一部に充てんとす。

禁衛軍は全国の模範軍隊なれども毎月逃亡者平均百分の三有り。

午後七時本多書記官の招宴に赴く。同座は下瀬軍医正夫婦、上野夫婦、実相寺夫婦なり。十時半散ず。昨夜実相寺招宴席上左の一絶を其の書画帖に題す。

相識与君二十年、燕雲楚樹恩綿々、今宵燈下一杯酒、酒味不如情味円。

十一月二十日 快晴。朝実相寺、上野、神田、高尾、豊島を訪ひ告別。去て公使館に至り伊集院公使、本多書記官、大河平、西田等に別を告げ、帰途小森を訪て帰る。津田武来訪。是夕良弼より案内有り、因て小森少佐の約を辞す。午後大河平、神田、高宮、実相寺、小林新六、上野岩太郎等来訪。田岡保定よりの信至る。高尾亭来訪。五時半増田と馬車、安定門内後円恩寺胡同に良弼の招宴に赴く。余を主賓とし増田中佐、本庄少佐、町野大尉、岩本中尉、並に禁衛軍聯隊長応龍翔同座たり。八時半辞帰。

北京二十一日会の案内状至る、明日出発するを以て之を辞す。

十一月二十一日 晴。是日北京を辞し漢口に下らんとす。午前五時半起床、行李を整頓す。実相寺其馬車を以て来り送る。増田家に別を告げ、増田、実相寺と同車、前門外車站に至り七時の汽車にて発す。増田、実相寺の外小林吉人、波多、上野、高宮、西田、中川、岡本、吉永父子、津田、小森、川島欣一来り送る。川島浪速より其の昨日遠獵獲る所の雁を味噌漬とし其弟をして来り贈らしむ。情誼感ず可きなり。諸友と握別。七時半芦溝橋を過ぐ。回顧すれば昔年単旅南下の日、故山口外三、井手、北御門、宮島等送て此に至り相別る。烏兔匆々屈指正に二十年、触景往事を憶ふ感何ぞ堪ん。有詩、

独出燕門欲曉天，太行山色轉娟々，并州一別人千里，去度桑軋恨万千。

又、

淹留旬日尋鷗盟，投轄謝他故旧情，一別天涯感多少，曉風殘月出燕京。

瑠璃河を過ぐ、鉄道支線有り。九時易水を度り、十時保定府に達す。田岡正樹、甲斐一之、木堂少佐等来迎。上車西門を入り東門内火神廟田岡の寓に投ず。甲斐、木堂来訪。午後諸氏と出て有名なる蓮池書院を觀る。古の蓮華池唐以前の古蹟にして元の張柔之別墅なり。清の列祖列宗南巡の行宮なり。憲皇帝書院を勅建し蓮池を以て名く。水東樓、六幢亭、法帖亭、直隸図書館等の亭榭、池を繞て点綴し、頗る雅趣有り。以前に於ては天下四大書院の一なりしも、今は廢して公園と為れり。

保定府在留民百名中四十人は文武学堂の教師なり。

法制学堂生徒四百人、法律学堂生徒五百人、巡警学堂生徒二百人、

優級師範学堂生徒五百人、陸軍々官学堂生徒百五十人、陸軍速成学堂生徒一千人、

此他幼年学堂、馬医学堂、主計学堂、軍機学堂、農務学堂等有り。

甲斐一之、多賀少佐宗之を訪ひ、四時日本倶楽部の歓迎会に出席す。会者二十三人。歓談九時に及で辞歸。多賀、甲斐来訪。田岡と談じ十二時就寢。

十一月二十二日 陰。中津三省より晚餐の招あり、本日出発を以て之を辞す。午前九時田岡を辞して保定西門外車站に至り上車。田岡来送。漢口に至る車資念五元六角。十時十五分開車、正午正定府に至り中食す。滹沱河を度り石家庄駅に至る。此処山西太原線の分岐点なり。倉庫、汽罐庫、修繕所、石炭貯蔵所等有り、甚盛、新開の市街なり。右方太行山の逶迤たるを望む。即ち山西に入るの関門なり。午後四時十五分順徳府を通過し、薄暮臨洺関を過ぐ。田岡送行の詩韻に和し郵筒に投ず。邯鄲県に至れば日全く暮る矣。七時十五分彰徳府に達し車上に宿す。

和田岡淮海韻

甘苦嘗來世味語，人生要訣此中探，清苑半夜寒燈下，心迹對君仔細談。

十一月二十三日 晴。未明起床。北京川島浪速、奉天中島真雄、中西正樹列に信片を發す。七時半湯陰県を過ぐ。岳飛の故里なり。此日天気快晴、平疇茫茫、極目際無し。直隸南部より村落稀疎、墟落の間互に一、二里を隔つ。墳墓亦た極て少し。直隸の内邱県一帶の地は波状の高原にして、彰徳以南は右方遠く太行山を望み、左方又た遙に遠山の起伏するを見るのみ。淇水を度る。幅五、六間、水流清淺。淇県を過ぐ。二十年前此より衛輝府に至るの間夜迷て道を失し、之に加ふるに風雪を以てし、飢寒交も至り夜半始て頓飯舗の一小店に投ぜし事有り。今日快車此地を過ぎ、坐に今昔の感に堪へず。九時衛輝府を過ぐ。北門外に殷の太子比干の墓有り。此処は太公望の故里にして、孔子擊磬之處亦た此の地に在り。潞王墳駅に至る。道沢鉄道の清化鎮に至るの線路西方に向て通ずるを見る。道□よりする者は新郷県の南に於て本線に合せり。衛河は新郷県城の北を流る。舟楫の便有り。衛輝以南四顧平茫、南方只だ一、二の小丘を見るのみ。所謂河南の平原是なり。十一時二十分黄河北岸駅に達す。対岸一脈の山形屏風の状の如し。大鉄橋を度る、長二哩十五分間を要す。南岸駅に達す、嶙山の下に在り。山頂城砦の状を為す隧道を過ぐ。北京を出てより之を初と為す。鉄橋を回顧するに恰も百足の

横はるに似たり。嶺山は河に臨で峙ち麓より頂上に至る。開墾万段耕作地と為す。山腹穴居する者甚多し。山南に呂祖の廟有り。滎沢県を過ぎ鄭州に至る。汴洛鉄道州城の西南に於て交叉す。

頗る殷盛の概有り。此より以南棗樹林を成し遠く相連る。和尚橋駅の南より西に向ひ支線有り。竣工する者少許に過ぎず。許州に至り中食す。焼餅一個六文、油条六文、鶏卵一仙、粥一碗六文、二十年前に比し其価僅に五と六の差のみ。鄭州以南は二十三年前曾遊の路なり。許州を出てより村落漸く多く、地味亦肥へ北方の白壤に似ず。民家の構造稍や江南地方のものに似て平房を見ず。羅湾河を度る上下舟楫の便有り。鄆城、西平、遂平一帯の地灌漑の便有り。六時駐馬店に達し天保棧に投宿す。破窓竹床、寒氣肌を刺す。九時就寝。雑踏眠を成す能はず。宿料五十六仙。是日詩有り、

大野茫々不見山、廿年游跡在茲間、青衫一領万千恨、付与秋風鬢髮斑。

十一月二十四日 快晴。午前四時起床。門外已に驟鈴丁東として往来絡繹たり。六時客棧を出で汽車に上る。七時十分開車、前方確山を望見す。是日晴空洗ふが如く、山容妍々空際に浮び風趣言ふ可からず。確山県城と線路右側の山下に在り。黄河を度てより此に至て始て山を得、此より道の両側山陵起伏、長台関を過ぎ大河を度る。此辺地味肥潤、墟落の光景恰も江南に似たり。確山以南一路山陵相属す。信陽州を過ぎ河を度て柳林駅を過ぐ。両側の山益す迫り、碧溪其間を流れ、修竹粗松水を挾て点綴し、宛然一幅倪画の趣有り。李家寨を過ぐ。両側の山愈々逼にして愈險。新店の左方乱峯屏列、山上雉堞を繞らし関門有り。一徑羊腸之に通ず。鷄公山と名く。山中多数の洋房有り、外人避暑の別業なり。行く少許隧道を過ぐ。此処河南、湖北兩省の分界点なり。東篁店を過ぎ広水駅に至る。溪山の間に於ける一市集なり。此辺一帯風景甚佳。詩有り、

清流屈曲匹練長、竹落松村水一方、天下溪山勝絶地、桂林以外有茲郷。

王家店を過ぐれば両側の山漸く尽き、局面始て開く。花園駅以南河流有り、小舟を通ず。午後二時四十分孝感県を過ぐ。県城は駅を距る八清里の地に在り、見ることを得ず。行く少許にして眼前に湖水を望む。湛口を過ぐ。人家二百許丘上に在り。行く数里始て長江岸に出で、江岸車站を通過して四時四十分漢口大智門停車場に達す。岡幸七郎、小山田淑助、角田隆郎、渡辺弥太郎、長安英彦、福島豊太郎、宝妻寿作、茂木一郎、小林和介、三木甚市、田添、安達、中津、濱丈夫、八田等来迎。馬車橋宅に投宿す。角田、岡、宝妻、立川等と晩食す。食後入浴、快殊に甚し。

十一月二十五日 晴。朝小山田来訪。午前理髮。渡辺、田添、小林、実相寺、角田、長安、渡辺官補、吉原等を訪ひ、吉原と日本租界を巡視して帰る。租界長二百五十丈、深百二十丈有り。鳥居赫雄、原田棟一郎、山田珠一、北京増田中佐、上野岩太郎、津田武、高宮議、波多博、上海井手友喜、島田数雄、並に留守宅に致書す。午後五時同窓会の招待に山月亭に出席す。会する者二十五人。七時辞して正金銀行の招宴に赴く。余と実相寺主賓たり。実相寺は急行にて昨日余に先て此地に来着せる者なり。支那料理の饗有り。同座は当地の紳商十九人なり。十一時帰る。岡と談じ午前一時寝に就く。

十一月二十六日 晴。午前井手三郎湖南より帰来、共に出て実相寺貞彦の帰燕を大智門車站に送る。楊子荃、李泉溪来訪。岡の案内にて山月亭に至り中食す。井手、宝妻亦来会。午後二時帰る。勝木恒喜、真藤駿士来り謡曲小集を為す。横山直康、伊勢田隆等来訪。六時福岡禄太郎の招宴に日本人倶楽部に赴き、九時帰る。南陽丸に至り吉原洋三郎を訪ひ小談。武昌談話会、並に獵友会、謡会等より案内有り。之を辞す。

十一月二十七日 晴。倶楽部午餐会の案内至る。先約有るを以て之を辞す。天津山根虎之助、小田桐勇輔に発信す。伊勢田来訪。正午熊本県人の招待会に一品香に臨む。二時散ず。帰途三井丹波、横山、正金小林を訪て帰る。勝木来訪。五時旧知の招宴に角田宅に赴く。会する者は岡、角田、勝木、渡辺、高木、中知、小山田、長安、福島、宝妻、河野同仁医院主、池田寅次郎、丹波義治、小林和介、吉原洋三郎、横山、井手等なり。十時諸氏に別れ南陽丸に上る。以上の諸友、並に茂木、有安、丸、安達、奥田、中津、宮尾、大島、大間知等来送。十二時開船。前夜倶楽部宴席小山田劍南の韻に次す。

北征賦罷又南飛，塵土經年滿客衣，最是快心第一事，微風澹海月載詩還。

十一月二十八日 快晴，気春の如し。同船福岡，吉原兩人なり。午後一時九江着。磁碗大小二種を購入。伊集院公使，本多書記官，大河平，高尾，西田，増田，根津一，軍令部吉田中佐に致書す。午後二時開船。是日晴空拭ふが如く，廬山の面目妍々として眼前に在り。

江西鉄道は九江龍開河の西長江畔の琵琶亭より起り，土工已に徳安迄を竣了せり。此距離二十五哩。現客車，貨車各二輛，汽罐車二輛来着せり。資本金は九江南昌間七百万兩の予算なり。

現に九江在留の邦人十五人に過ぎずと云ふ。是夜月明江山画くが如し。木下船長室にて会食す。

十一月二十九日 晴。午前九時蕪湖着。此地居留民二十人，雜貨店四戸有り。南京井原，福州前島，高洲に致すの書を吉原洋三郎に托す。午後二時南京着，吉原上陸す。七時鎮江着。

十一月三十日 快晴。船中海軍への報告を作る。小林和介に致書す。午後零時上海着，平井徳蔵，加藤壯太郎，松井石根三少佐，小泉土之丞，井手友喜，白岩龍平，中島為喜，秦長三郎，西本省三，島田数雄，宮崎，小笠原等来迎。平井は本日の帰国の予定なりしも余を待つが為に延期。加藤は平井の後任として来着せる者。小泉は間島税関に転任すと云ふ。一時北山西路第三号の寓所に帰る。晩佐々布，井手来訪。夜平井，加藤を訪ひ，去て東和洋行に白岩，松井，副島八十六，小泉等を訪て帰る。

#### 北京政況拾遺

摂政王の参謀とも見る可きは其弟載濤，並に毓朗の兩人にして，隨時出入機密に参与せり。沢公は鉄良を庇護するの故を以て近来王と好からず。肅親王も内心摂政に服せず，始終謙遜の体度を取て載濤，毓朗等に譲れり。鉄良は沢公，慶王と接近せるも股肱の士を有せず。倫貝子も内心摂政に服せず。洵貝勒の信任は其弟濤に及ばず。恭親王尊大自持，各皇族の嫌忌する所と為る。太后臨終の時恭王に謂て曰く，我薨ずるの後爾等協力能く之を謀れと。王自ら太后の遺言を作り全権を委任されしを主張し，摂政王並に慶王の為に憎まれ，其の矯詔の罪を鳴らして之を処分せんとせしも，停調者有て事無きをを得たり。○端方も某御史より為人不正と劾せられ，摂政の信任甚だ深しと言ふに至らず。岑春煊を排斥の上奏を為せしは端方なりと云ふ。慶王の位置危からんとせし時摂政の母に送賄して位置を保つを得たり。○袁世凱免官の時徐世昌の位置危かりしも，毓朗と洵貝勒に哀求して事無きをを得たり。○光緒帝臨終の時軍機大臣は病床に就て，太后の命を衞み幼帝を儲嗣と為すの意を奏す。帝曰く，国歩艱難の時長者を立つるに非ずんば不可なりと。各軍機會議決する能はず。帝王の嗣としては規定上溥字の人に限り。現に年長者を求めれば溥倫貝子か恭親王の外有らず。此時袁世凱摂政王の意を迎へ王自ら立てと勧む。王聞かざる者の如し。袁三たび之を言ふ，王赫然として怒り棹を蹴て之を倒し其の不臣を詰る，袁色を失ふ。各軍機之を和解す。因て太后の意に遵て溥儀を立て嗣と為し，其父を監国として円満なる処置を執るに至れり。袁は最初肅王に属望せしも，他日政を専らにせんには肅王の如き才人有りては妨と為らんことを慮り，遂に之を遠けんことを謀り，両者の間相排擠するに至れり。○袁の意は恭王，若くは倫貝子を皇嗣に擬したるも大勢定て及ばず。○太后も薨去の二，三年前より袁の不臣を劾する者続出せるを以て窃に之を疑ひ，信用以前の如くならず。因て兵権を与ふる事を為さざりしなり。○袁党は排貨運動を以て摂政を苦め外交の困難を醸し，此の機を以て袁を出さんと擬せり。閣臣中世統は稍や露国に傾き，徐世昌は米国に依頼し，摂政王の家臣張翼は独逸に關係有り。袁起用の事に付き那桐，世統，端方の三人摂政に説きしも応ぜざりしと云ふ。